演藝畫報

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和二年十月廿八日印刷
昭和二年十一月一日發行

第十一年
第十四號

嫁ぐ日を前に

晴れの衣裳や
　　御調度品
髪飾品やら
　　裝身具……
嬉しい御準備は
　　大丸で……

「簡易調度の栞」「千代の栞」には
必需品詳細に記してあります
御望みの方は…三階儀式賣場へ

月曜休業
夜間營業

大阪　心齋橋
大丸呉服店

御芝居歸りには打揃ふて
お坐席で是非御會食を

喜久屋食堂

道頓堀戎ばし北詰

支店
大阪支店　北新地裏町
京都支店　木屋町ドングリ橋

道頓堀

第二年・第十四輯

口絵寫眞

◇『繪本太功記』鴈治郎の武智十次郎◇中車の光秀、魁車の初菊◇『保名』長三郎の保名◇『樽屋おせん』福助の女房おせん、魁車の伊助◇『廓文章』鴈治郎の伊左衛門◇『本藏下屋敷』鴈治郎の若狭之助、雀右衛門の三千歳姫、中車の本藏◇『婦系圖』伊井の主税喜多村のお蔦◇『砂繪呪縛』喜多村の森尾重四郎、伊井の勝浦孫之亟、石川の露路、河合のお酉◇『お鯉物語』伊井の兒玉將軍、河合のお鯉、喜多村の力士荒岩◇『原田甲斐』中田の原田甲斐、◇『源平布引瀧』辨天座の人形淨瑠璃

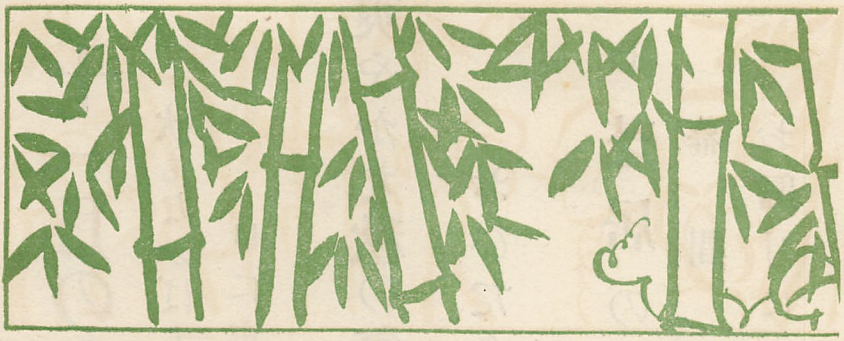
◇表紙……芳國畫

◇中座◇

□繪本太功記（芝居見たまゝ）……素木宗一（二）
□保名（歌詞）……（一〇）
□越後獅子（歌詞）……（一一）
□增補忠臣藏（芝居見たまゝ）……仙之助（一三）
□樽屋おせん（芝居物語）……桃之介（一六）
□廓文章（鸚鵡石）……（二〇）
□光秀と伊左衛門など……高安吸江（二三）
□分身の若狭之助……高原慶三（二四）
□舞臺以外の中車……丸山耕（二三）
□舞臺裝置の復興を望む……入江來布（二六）
□尼ヶ崎雜話……高谷伸（二八）
□玩辭樓漫筆……中村鴈治郎（三〇）
□廓文章雜記……鳥江銕也（三三）

◇浪花座◇

□砂繪呪縛（芝居物語）……奥田美代一（四一）
□お鯉物語（芝居小說）……玉谷まち子（四八）
□婦系圖（鸚鵡石）……（五八）
□嘲笑（芝居小說）……福隅一孝（七二）



□砂繪呪縛について……喜多村綠郎（四七）
□『婦系圖』と『お鯉物語』について……伊井蓉峰（五五）
□『お鯉物語』の特色……佐藤紅綠（五八）
□所謂新派三頭目合同劇……平野止夫（六一）
□伊井河合喜多村の合同劇に就而……綿貫六助（六三）
□新派劇の存在……山上貞一（六四）
□新派三頭目についての希望……川村花菱（六六）
□砂繪呪縛に出て來る人物の性格……土師清二（六九）

■新派三頭目に對しての感想……劇文壇四十數名家（五六）

◇角座◇

□『原田甲斐』寸言……行友李風（八〇）

◇吉三郎の思ひ出◇

□由良之助の師匠……野村治郎三郎（三四）
□岩見重太郎と嗜眠性腦炎……鎌谷來水（三五）
□岡嶋家の部屋草履……新谷誠水（三六）
□嵐吉三郎さんのこと……食滿南北（三八）
□廉直の人……四海波濱右衛門（三九）

◇文樂禮讃（短歌）……木村富子（九）
□喫煙室……高橋蓼雨（四〇）
□劇壇漫語……6×6＝46（五四）
□劇壇縱橫……住田朝郎（八一）

■嵐吉三郎の逸話の一……（三七）
■嵐吉三郎の逸話の二……（三三）
■讀者倶樂部……（八三）

■前號の（短歌）訂正……（三三）
■讀者倶樂部募集……（三三）
■讀者文藝募集……（三三）

□編輯後記……朝郎生
□挿畫カット……大塚克三

十一月の大歌舞伎に梅園のお獻立

秋もなかばして眼に大芝居の觀を盡し
口に定評ある梅園料理の滿を喫し

爽やかな秋の氣分に
おひたり下さい

梅園

お芝居の
幕間と
お歸りには

お芝居での御食事は食堂にておかへりには白鷹にて一寸一ぷく江戸すしを

中座食堂

本店 太左衛門橋北一丁
電話南六二二七番

會旗優勝旗
劇場幕幟
緞帳フラフ
神戸市楠社西門
梅原商店
電話元町一六一五番

京都撮影所超特作品・衣笠映畫聯盟製作

海國記

林長二郎主演・田中絹代・新井淳特別助演

京都撮影所オールスターキャスト

原作　大森痴雪
脚色　三村伸太郎
監督　衣笠貞之助
撮影　杉山公平

山田長政が燃ゆる如き野望をもつて國禁を犯し遠くシヤムに渡つたことは吾國海國史上光彩陸離たるエピソートであるが、これは又先驅長政の壯擧に後るること數年卽ち寛永末期に於て廢れゆく漁村と悲運の吾家との爲めに雄々しくも立ち、秘かに荒海を征服しシヤムに渡つた美少年の物語

松竹キネマ株式會社

小道具・小裂
貸衣裳

素人演藝會
宴會の催物

春秋温習會
婚禮の衣裳

松竹衣裳部

本店　大阪市南區久左衛門町八番地
電話　南一一八八番
四七一一番

東京支店　東京市淺草區並木町十五番地
電話　淺草五五九九番

其他一般の衣裳を多少に拘ず御利用下さい
御來客の御相談に應じ御便利よく取計ます

折紙附の御贈答品は

松竹共通觀覽切手

この切手一枚で全國何處へ往つても松竹經營の劇場のお芝居が見られます。

お手頃の種類

一圓・二圓・三圓・五圓・十圓・十五圓・廿圓・五十圓の八種

御觀劇代のほかに御召上り物、各賣店の御買上品本家茶屋直營の案内所等一切の御支拂に通用致します

様式は十圓券は一圓券十枚、一圓券は二十錢券五枚にて離れるやうになつてゐますから至極御便利です

お手近の發賣所

大阪南區久左衛門町八
大阪道頓堀
大阪東區高麗橋心齋橋筋
京都市河原町蛸薬師上ル

松竹合名社（電南一二四〇・六六八五）
角座（電南六九五六）
プレイガイド（電本三三〇九・三九九五）
松竹合名社（電中二三五二）

其他各座にては三日前より場席の取れる指定番號入前賣切符も發賣してゐます

スキナ脂取紙（あぶら）

山には紅葉の秀麗

限りなき自然の美しさ

道頓堀の各座は人氣集中せり

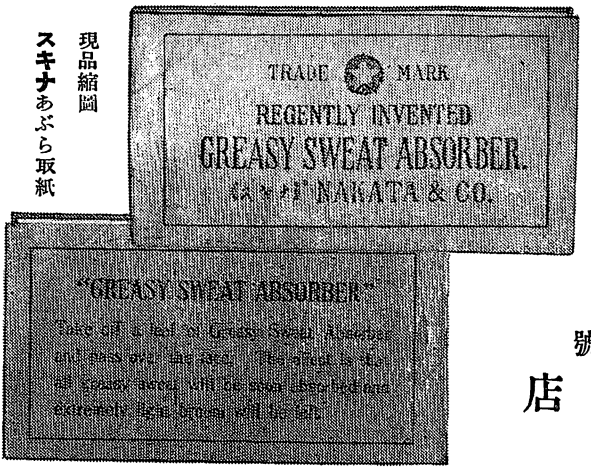
スキナあぶら取紙の品質は向上せり

何れも様より

御ヒーキのスキナは！

道頓堀の各座、及び各地化粧品店に販賣せり

お買求めの節は『スキナ』と御指定を乞ふ



現品縮圖
スキナあぶら取紙

本舗
スキナ屋號
中田商店
大阪

優秀の技術と迅速が當館の有つ
唯一の誇りです。
御散索の折にぜひ御立寄りを……

高津郵便局東
山崎寫眞館
電話南四二四四番

中村鴈治郎の武智十次郎

「繪本太功記」尼ケ崎

十一月の中座

市川中車の　武智光秀

中村魁車の　初菊

十一月の中座

「繪本太功記」
尼ヶ崎の場

中座の十一月

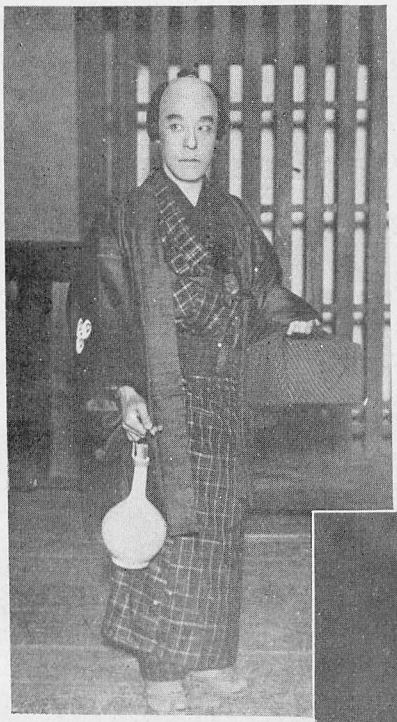
中連元清「名　保」事作所

名保倍阿の郎三長林

中座十一月興行

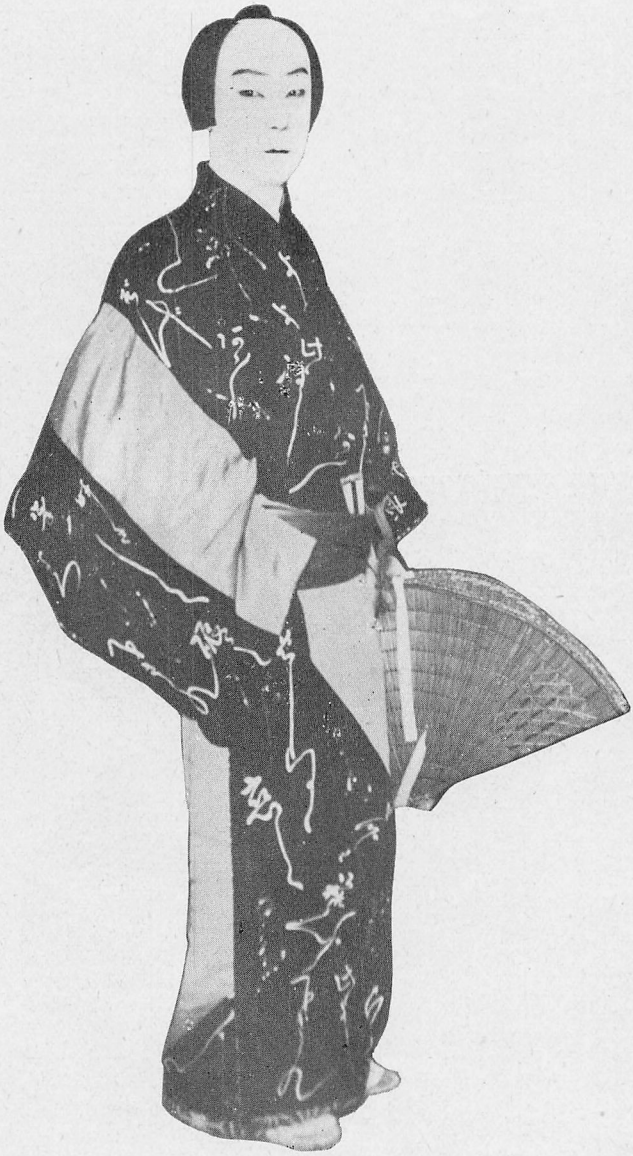
樽屋おせん

（西鶴五人女の内）



中村魁車の　樽屋伊助

中村福助の　女房おせん



中村鴈治郎の藤屋伊左衛門

十一月の中座　「廓文章」　吉田屋

中座の十一月興行大歌舞伎

本藏下屋敷

中村鴈治郎の　桃の井若狭之助

市川中車の　加古川本藏

中村雀右衛門の　三千歳姫

浪花座の十一月興行　「湯島の境内」　婚系圖の内

伊井蓉峯の　早瀬主税　喜多村緑郎の　お蔦

喜多村緑郎の　森尾重四郎

石川新水の　涅槃門のお酉

浪花座の十一月新派三頭目出演

砂繪　呪縛

河合武雄の　娘　露路

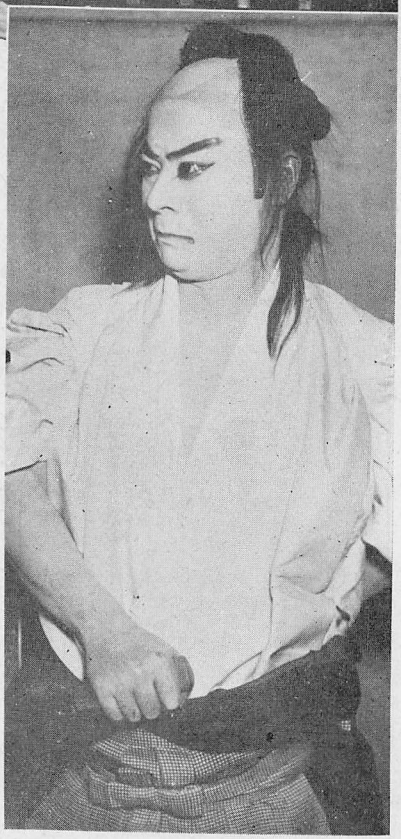
伊井蓉峰の　勝浦孫之亟

伊井蓉峯の兒玉將軍　河合武雄のお鯉

お鯉物語

浪花座の十一月興行

喜多村緑郎の　力士荒岩



中田正造の　原田甲斐

角座の十一月新聲劇

源平布引瀧

辨天座文樂の人形淨瑠璃

月刊・演劇研究・雑誌

道頓堀

第二年・第十四輯

大野郡右工門　中村登喜郎
中沢弥一兵工　市川円笑
赤垣源蔵　中村助太郎
渡辺喜兵工　市川外六
大高源吾　市川新蔵
竹林唯七　市川寿七
神崎与五郎　市川寿八
横川勘平　市川猿蔵
大石源四郎　市川寿三郎
大石主税　中村改源郎
間重次郎　市川染太郎
間新六　市川章作
倉橋傳助　市川今[illegible]
前原伊助　市川升蔵
菅野和介　市川鯉夢
諸士　文勢
足軽神崎与藤馬　市川寿つ

中幕

尼ヶ崎雨屋の場

真柴筑前守久吉　市川猿十郎
武智日向守光秀　市川團十郎
母さつき　市川寿美蔵
妻みさを　中村福助
武智次郎光義　中村仮次郎
言号翁菊　市川新蔵

芸居見たまへ

絵本太閤記

素木宗一

第一幕　尼ヶ崎街道

返し　廣德寺庫裡

序幕は、珍らしい幕ではあるが『筋書』を以つて御免蒙つて、あらまし申上げるとすれば――狹苦しい街道に蝟集する百姓等が道普請の最中、と見せかけて實は武智の腹臣平田權兵衛等が筆頭に化込んだ計略で、西國から主君の弔合戰に駈戻つて來る眞柴久吉を喰ひ止めやうと言うのである。

最中、只一騎の段威の鎧武者、ござんなれと武智の家臣共が阻めると名乘に眞柴久吉と相手が叫んだから忽ち太刀と丸太棒の騷亂場と化す。が、この久吉は眞柴方もさるもの、淺野彌市を化けさせた企みであるものをそれと知らずに武智の家臣は人れ亂れて太刀先、四王天但馬守が折から加勢に駈付けて、改めて賢物の眞柴久吉との一騎討ち！

尼ヶ崎の街道は時ならぬ劍戟の巷――

軈て何思つたか久吉は馬首を變じて隙を狙ふ。そして一散に馬を駈つて雲霞と逃げて行く。但馬守齒を喰ひしばつて卑怯未練を憎んで後を追ふ、その跡へは加藤正清。これは眞柴方の本物の腹心が現れたわけで、再び此處に太刀を爭ふ。まあ、早く言つちまへば四王天但馬守(市藏)と加藤虎之助正清

の(扇雀)顔見せと言つたやうな幕です。

道具返しになつて――。

庫裡では百姓十作夫婦が顫上つてゐた。墓參さなかに陽が暮れて、歸らうとすれば戸外は邊の劍戟修羅で、出たら最後命がなくなりさうな騒ぎ。前幕で敵から遁れて寺へ駈込んだ彌市の眞柴久吉は、俄坊主になつて味噌を摺つてゐる。所化衆は小芋のやうに美しい頭をゴロつかして、戸外の阿修羅に生きた心地もないと言ふ案配。

十作夫婦に到つては只もうウロ〳〵と戸惑ふばかりの折柄門外が騒然と湧返つて勢よく飛込んだのが四王天但馬守だ。眞柴久吉を追ひ詰めた氣、一筋道のこの寺門、隱さず手渡してしまへと和尚を捉へて息意氣が仲々すざまじい。が、和尚も落付いてさらに居ないと答へる。重ねて念を押したら、

『一切妄語は墮獄の近因、南無阿彌陀佛』

と珠數で法衣を拂つた。これで但馬らは張詰めた氣が一時に緩んだ。ガツカリしたら急に腹が空いた。そこで傍の味噌摺坊主に一飯を乞ふと、坊主に非らず眞柴久吉、まだ非らずで、實は腹心淺野彌市だから、饑飢を忍んで敵を詮索せねば隙を與へるも同然と皮肉つてセヽラ喘ふ。但馬守はギクリとした。

『フム、姿かたちは變れども、お身の面影覺えあり』『長き陽射しも落方に、夕日を背にうけ』『白駒に鞭打つ只一騎』『追駈けきたるは武智の一族』『名乘つて突出す槍先を』『左にかはし右に受け』『手練の早業敵はじと』『馬を返して落ちのびる』

互ひに恁うした流麗な割科白を澱みなく交して

『……さては姿を黑染の卑怯未練な俄道心、味噌摺坊主は眞柴久吉！』

但馬守が眼を据えてキマリの見得をきつた。忽ち突出す槍の穗先、一騎打ちに段々門の外へ爭ひながら出てしまふ。と遲れ馳せの加藤正清、主君を案じて庫裡の内へ大音聲。和尚の敎へるまゝに同じく門外へ飛出さうとすると、背後から制した修行者。これが實物の眞柴筑前守久吉その人。

『われはこの姿をこの儘に、この尼ヶ崎に在りと聞く、武智が母の住家へ立ち越えて、尙も苦肉の策をつくさん』

と久吉が勇み立つ處で、愈々芝居は『太十』へ運んで行かうとする。これが十段目への、ハイカツて申せば『ぶろうぐ』

第二幕　尼ヶ崎の場

本舞臺の道具立は說明するまでもない、『太十』と言へば直ぐと先さま先刻ご存じ……『見たまゝ屋』が拙く吃つて永々と饒舌つてゐるでは幕を開けぬうちに三重へ來てしまひさうだ。

單刀直入――幕ひらいて、見たまゝの始まり……。

講中の仕出しが五六人、さつき(遊女)を捉へてゴヤ〳〵と口々に科白を自慢らしく並べるうち『それでは皆の衆』サア〳〵行きましやうとだけハツキリ聞取れて一同去る。御苦勞さま。

……風薫る都の空の月花も……

と床が懸つて漸く芝居を見物して居るやうな心地になつてくる。

操(我童)と初菊(魁車)が本舞臺へかゝる。初菊の緋の振袖の金襴の絲繡が舞臺端にキラリと零れて艶やかである。

二人にとて後室――さつきへの見舞があつて、さつきは孫の重次郎の容子が氣がかりで如何にと尋ねる。その間に坊主に化けた眞柴久吉が宿を乞ふて此の家に忍び込む。等、本行どほりに筋を追つてソロ〳〵重次郎(鴈治郎)の出になる。

さつきへ出陣の許しを受けて、初菊と祝言の盃することになり、舞臺をさつき、操、初菊と三人とも

……三國一の悲しみを知らぬ白齒の孫娘が手引き連れて

とさつきを先頭に退場すると例の重次郎の哀調にかゝる。水々しい若人の頰、成駒家の白い顔が眼を細めて手を合す。

……漸う涙を押とゞめ。

『母さまにも婆さまにも、これ今生の暇乞ひ、この身の願ひかなうたれば思ひをくこと更になし』

……十八年がその間御恩は海山暮へがたし。

の床で若やいだ哀愁を漂はせる重次郎のサワリ、自分を思ひ切つて他家へ緣付と、影ながら初菊への愛想盡し。『わあッ』と泣いて轉びでる緋の紗袖。

『おゝ初菊殿、さては樣子を』

『アイ、のこらず聞いて居りました』娘々の涙聲、怨めしさうに凝と仰ぐと。

……夫が討死あそばすを、妻が知らいで何としやう。

振袖が右に左に溺れ悶へる緋鯉の腹だ。緋を金とを返して切なげに漂ふ。

『せめて今宵は御出陣を』

さつきの前を繕いて重次郎は詮方なく盃を受ける。初菊はその美しい横顔に泌々見詰めて恥しさうに引き留める。媚態が色ッぽいこと夥しい。袂引かれても重次郎は兼ねての覺悟動じない。尤も、ぼくなら動じる。

ヌックと、凜々しく起ち上るとキッカケに陣太鼓の音が聞えてくる。

『いづれも、さらば』

行かうとする、初菊が寄つて眞向から膝を支いて拜み押し少時、女の襟頸が右にとれば、重次郎の美しい顔は左へ避ける、それを留めて左へ、重次郎は右。……頭到鉦太鼓の血腥さい囃子を浴びて花道へ凛々しく駈込んでしまふ。

三人は泣顔を互ひに隠して一と先づ奥の間へ退場すると——愈々である。

極メ付の武智光秀、大立花家の出だ。

……入るや月洩る片びさし。

雨蛙が降るやうに鳴き出す。

出語臺へ現れた太夫の聲がどつしりと、顔を眞赫に咽喉をしぼつてゐる。

……夕顔棚のこなたより現れ出でたる……

本釣がひゞいて、下手の竹籔を掻分けて顔を隠した抜き足バツ！と笠を投げると眉間に血傷の武智光秀（中車）——錦繪の一枚摺から抜出した悪の華！　である。

天下一品！　——竹籔から現れたゞけで誠に動く古風な双紙繪だ。

『大、立、花、家ッ！　の』呼聲が棧敷から、大向ふから、見物、この瞬間の妖しい美！　に醉ッぱらつて氣ちがひのやうに唸つて少時騒然、床も何も聞えたものでない。えゝ！　ぼくも負けずに、事のついでだ。少々大聲で吐鳴つたつて、まさか『見たまゝ屋』とまで誰も氣が付くまい。『お、ほ、たちば、な、やあ—ッ』

……小田の蛙の鳴く音をば、止めて敵に悟られじと、差足……抜足……窺ひ寄り

竹槍を拵へて凝乎！　光秀呼吸を盗んで上手障子家體へ躍つて行く。ピタリと舞臺も呼吸が止まつて水を打つたやうな凄い沈默。

……突込む手練の鎗先にわッとたまぎる女の泣聲。

竹槍の手元、寸分狂はず障子の戸外からズブリ！　同時に女の悲鳴である。光秀ブッと息を吹いて引出した。狙ひをつけた手負の眞柴久吉、と思ひの外、脾腹を押へて血塗ろに七轉八倒、悶絶、するのは現在自分の老ひたる母のさつきだ。

『や、こわ、母人や、や、や、や、やッ』

極悪非道も道が、是には仰天、茫然と立竦んで手が着かぬ。物音に驚いた操が初菊と走り出た。光景はむごたらしい此の有樣。取縋つて泣き叫ぶ。と、苦しい喘ぎの底から細く目をひらいて、

『ヤレ歎くまい〳〵。内大臣春永という主君を害せし武智が一隨かくなり果るは理の當然。系圖正しき我家を、逆賊非道に名を汚す、不孝者とも悪人とも譬へがたなき人非人……』

……主を殺した天罰の報ひは親にも此のとほり、鎗の穗先に手をかけて。

床まで切なさうに息を喘ぐ。光秀は呆然となつて動くにも動かれぬ。

『これ見たまへ光秀どの』

と妻の操が光秀の前へ躍り出た。操のサワリになる。われ幼少の頃よりをさなき耳に滲みて忘れざりし處の、操のさは

り文句、懐しい思出が『軍の首途にくれぐれも』から始まる。
……思ひ止つて給はらば、かうした歎きはあるまいもの。
の泣落し、まこと、竹本の絶唱である。
『せめて母御の御最後に、善心に立歸ると只一言聞かしてたべ』
操は掻口説いて流す涙に必死の赤心があらはれる。
『やあ、猪口才なる諫言立て』
今まで無言の光秀が、憎々しげに唸る。
『無益の舌の根動かすな。恨みかさなる小田春永。……無道の君を弑するは民を憩むる英傑の志。女童の知ることならず。退りをろう』
『スリヤどのやうに申しても』
『エ、、諄い！』
光秀の眼は冷たくギロリと光つたゞけだ。
……折しも聞ゆる陣太鼓、耳を劈く金鼓の響。
と愁歎場が俄に騒然と動揺めき出す。揚幕で打鳴らす烈しい鉦太鼓、殺伐な鳴物、光秀の眼はキッとこれを見据える。
『親人これにお在するや』
弱いちぎれがちの重次郎の聲が花道の七三で喘いだ。見れば痛ましい手負ひ、血だらけな刀を息杖に、漸くのことに後を追うて來る軍兵を切り散らすと庭先に撑！　となつた。
斷末魔にちかい喘ぎである。
勿論、さつきも驚いたが初菊の仰天は眼も當てられぬ。光秀は依然として冷たい。
『やあ不覺なり重次郎。仔細は何んと、つぶさに語れ』
荒々しい吐聲を浴せる。これで氣を取直したか屹と見得。美しい頬にタラ〳〵と血が流れて凄艶である。
『親人の指圖に任せ手勢すぐつて三千餘騎、濱手の方に陣所を固め』と是からが重次郎の軍物語。
……こゝを先途と戰ふうち後の方より大音聲。
床も勿論、大音聲で蛸のやうに煮立つてゐる。眞柴勢との烈しい戰ひが重次郎の手振に漂然と浮び上つてくるやうだ。
……眞柴筑前守の家臣加藤正清これに在り。
重次郎が泣いて叫ぶ哀れな一と言！――『逆賊』
『ナ、なに！』
『逆賊武智が小童共、眼にもの見せて呉れんづと』
いとも凄慘！　味方の軍兵總討死。
『親人のお身の上、心にかゝりそろ故に、これまで落延び歸りしぞや……こゝに、此座あつては危し……危し！』
途切れがちの呼吸、喘いで、斷れて、苦しさうな重次郎の唇が蒼ざめてピクリ、ピクリ顫つてゐる。
『一時も早く本國へ引取り給へサア』
一方は深手のさつきが高二重の眞中から孫のこの痛ましい姿を見下ろして又泣いた。

『光秀、子は不悠にはないか。おのれが心、たゞ一つで討死でもさすことか。逆賊不道の名を汚し殺すは何の因果ぞや』

『そんなら婆さまには……』

重次郎はさつきの切ない息吹を聞いて手捜りに祖母を求めるが、もう弱り果てゝゐるので眼が見えない　重次郎は遂に絶命。さつきも可愛い孫の跡を追うて息絶える。流石の光秀もこの場の態には耐えられない。

……親の慈悲、子故の闇、せめつけられて耐えかねて。ハラ〳〵〳〵〳〵……雨か涙の。

男泣きする途端。また激しく響いてくる矢叫び。

『あの物音は敵か味方か、勝利はいかに』

と庭先の拗ね木の松に登つて手を翳すと遠見の形……で道具が半廻しになる。

『草履摑みの猿面冠者！　イデひとひしぎに致してくれん』

枝を飛び下り驅出さんとすると、花道から鎗引提げて荒々しく跳り出る加藤正清の名乘。

……と一間の内に聲あつて。

『ヤア〳〵武智十兵衞光秀、しばらく待て。眞柴筑前守久吉今改めて對面せん』

『なんと！』

悸ツと聲する我が家を振返る。

双方へ颯ツと正面の襖が開くと、悠然と四天王を隨へて現はれる姿は、幕明きの旅僧のみすぼらしい容姿と打つて變つた優美な陣羽織。立戻つて二度仰天！　が、ピタと足踏構へて睨みつけた。

『ヤア珍らしや眞柴久吉、武智光秀がこの世の引導渡してくれん』

……太刀拔き翳し詰寄つたり。

床も泡を吹いて力む、舞臺の光秀も斯うなつてくると死もの狂ひだ。

『ヤア急いたりな光秀』

久吉は落著いた聲、軍扇で制してニツコリする。

『俱に天を頂かざる亡君の弔ひ戰。今こゝにて討取つては義あつて勇を失ふ道理、諸國の武士に久吉の軍功を知らせん爲時日移さず山崎にて勝負の雌雄決すべし、いかに〳〵』

『ほゝ、流石の久吉よく言うた。我も本懷。互ひの勝負は天王山洞ケ峠に陣所をかまへ。

……只一戰にかけくづさん。

『首を洗つてお待ちやれ久吉』

久吉はそれを受流して正清ともども孫呉の秘術を振つて戰はうと約する。正清は『御安堵あれやわが君さま』と勇み立つ。

……朝鮮國の果までも今にその名は芳しく。

『先づそれまでは眞柴久吉』

『武智光秀』

互ひに名を呼び懸して舞臺正面の大上段、兩手で刀を差上げて光秀が『大立花家』の見得で大きくキマルと、

『さらば、去らば』

聲を併した別れことば。敵も味方も和して唄ふ。

……寫す繪本の太閤記、

と段切の絃が華やかに鳴響くと。光秀を眞中に、眞柴久吉加藤正清の姿が古への立版古の金銀と煌めいて、一枚摺の錦繪をいづれ劣らず並べ立てたやうだ。

……末の世までもものこしける。

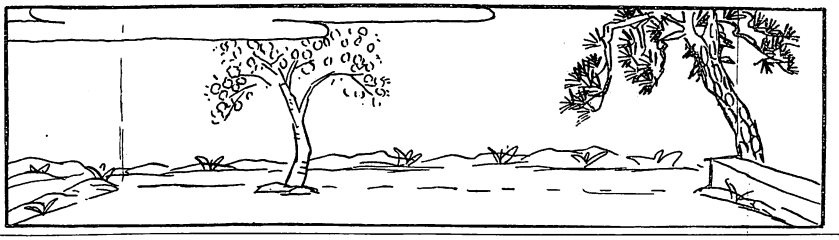
永々と語りましたる太夫が見臺へ額を摺着ける。——と柝頭。古風な繪本の瞬間は五色幕に搔消されて、氣がつけば……

……こゝは中座。（了）

文樂禮讃

木村富子

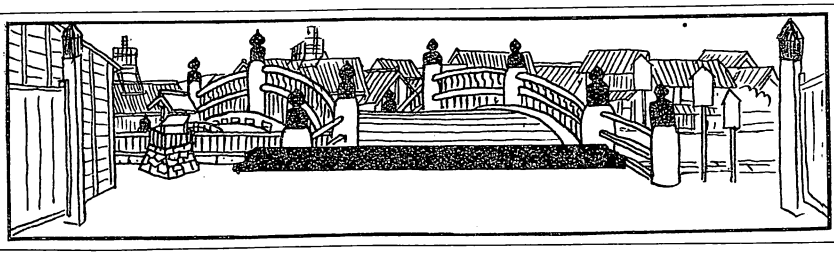
うちかけの衣紋つくろひ艶やかに阿古屋がすなる三曲もよし
狐火が燃ゆる肩衣榮三が美事にかわる白のかたぎぬ
槍彈正逃げ彈正がが〳〵と威張るもをかしひろき舞臺に
文五郎がさす手ひく手にいたいけな靜御前のすなる振事
金扇がつとひらめきて飛びくるを上手に取りぬいとし忠信。
津太夫がいたく嘆けばつまされてかの人形もほろ〳〵と泣く
吃又がいしく踊れば女房もいと嬉しげに小鼓をうつ
人形のお米はいとし籔かげに泣く音つゝみし白き手拭
平作が辿る沼津の里はよし松のけしきも富士の姿も
つれ彈きのはげしき撥が心地ようわが耳を打つ宵のひととき



所作事　**名保**（歌詞）　清元連中

〽戀よこひわれ中空になすな戀。
〽戀風がきては袂にかいもつれ。
〽思ふ中をば吹きわくる花にあらしの狂ひてし心そゞろにいづくとも、道ゆく人に事とへど岩せく水とわが胸と、くだけ落つる泪にはかたしく袖の片思ひ。
〽姿もいつか亂髪たが取りあげていふ事も。
〽菜種の畑にくるふ蝶つばさかわしてうらやましし、野邊のかげろう春草を、すほう袴にふみしたきくるい〳〵てきたりける。
保「なんじや戀人がそこへいたとは、どれ〳〵〳〵エ、またうそいふかわけもない。
〽アレあれをいまみやれ。
〽らいざんかふが筆すさみ、つち人形のいろ娘
〽たかねの花をやる事もないた顔せず、はら立す。
〽りんきもせねば、おとなしう、アーラ、うつゝなの妹背中、ぬしは忘れてござんせう。

〽しかも去年の櫻どき、うへて初日の初會から、あふての後は一日も、たより聞かねば氣も濟まず、うつらうつらと夜を明し。
〽ひる、ねぬほどに思ひつめ、たまに會ふ夜のうれしさにさゝごとやめて、ひたる夜はいつよりもツイ明けやすく、ヨイいのふいなさぬくぜつさへ。
〽月夜がらすに、欺されていつそ、ながしてゐつゞけは日の出るまで、それなりに。
〽ねやうとすれどねられねばねぬを恨みの旅の空。
〽よさの泊りは、どこがとまりぞ。
合〽草を敷寢のひぢ枕〳〵、ひとり明かすぞかなしけれ〳〵。
はこしの〳〵まくのうち、昔戀しき俤かけや、うつり香や、そのおもかげに露はかり
〽似た人あらば、敷へと振りの小袖を身にそへて、狂ひみだれて伏沈む。



所作事　**越後獅子**（歌詞）　長唄連中

〈打つや太鼓の音も澄みわたり角兵衛〉〉と招かれて居ながら見する石橋の浮ぶも舞も風雅もの。

〈諷ふも舞ふも囃すのも一人り旅寢の草枕おらが女房をほめるじやないが、飯も焚いたり水仕事麻撚るたびの樂しみを獨り笑みして來りける。

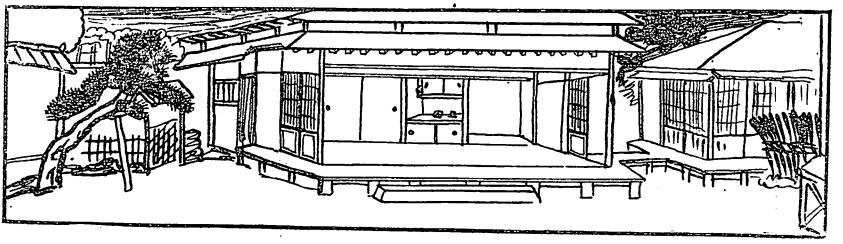
〈越路がたお國名物さま〉〉あれど田舍訛りの片言交りしらそきになる言の葉を、雁の便りに屆けてほしや、小千谷ちゞみの何處やらが見えすく國のならいにや緣を結べば兄やさん兄ぢやないもの夫とじやもの來るか〉〉と濱へ出て見ればのほいの濱の松風音やまさるさやとかけのほいまつかとな好いた水仙すかれた柳のほいの心石竹氣は紅葉さやとかけのほいまつかとな辛苦甚句もおけさ節。

〈何たら愚痴だへ牡丹は持たねど越後の獅子はおのが姿を花と見て、庭に咲いたり咲かせたり、そこのおけさにいなこと言はれ寢たり寢たらず、待ち、明かす、御座れ話しませうぞ、こん小松の蔭で松の葉のよにこん細やかに、彈いて唄ふや獅子の曲。

〈向ひ小山のしちく竹、いたぶし揃へてきりを細りに十七が室の小口に晝寢して花の盛りを夢に見て候

〈見渡せば〉〉西も東も花の顏、何れ賑ふ人の山〉〉打よする〉〉女波男波の絶間なく逆卷水の面白や〉〉

〈さらす細布手にくる〉〉とさらす細布手にくる〉〉といざや歸らんおのが住家へ



中座十一月興行上演

芝居見たまゝ

增補忠臣藏

仙之助

主なる役割

一桃の井若狹之助安近　鴈治郎
一伊浪伴左衛門　箱登羅
一近習高木平馬　齋五郎
一茶道珍才　政治郎
一妹三千歲姫　雀右衛門
一加古川本藏　中車

本藏下邸の場

琴唄で暮が明くと、本藏下邸の茶室である。

〽人知らぬ思ひこそのみ詫しけれ、我歎をば我が身ぞ知る。三世の緣も淺草の片原町にしつらへし、加古川本藏が下邸……

竹本の文句が、ゆるく、ながく、浮き渡つてくる、と奥から井浪伴左衛門、上手から赤羽根平馬が出て來る、そうしてこんな事を語り合ふ

――夫は主人若狹之助の妹、三千歲姫が此下屋敷へ來てゐるのは、言號の縫之助と遠ざける爲に預けられてゐるのである事や、今日若狹之助が本藏を成敗する事等、其上に臺子の釜に毒藥を投じて、若狹之助に呑ませ、殺害しやうと云ふ實に善くない相談である、やがて平馬は何か心得て奥へはいる。伴左衛門は氣味の惡い笑を洩して、懷から藥包を出し、釜の蓋を取

つて毒藥を其中へ投り込む――然し天道は見遁さない、家老加古川本藏が下手の廊下から此樣子を眺めてゐる、伴左衞門は少しも氣がつかない樣子、本藏は障子をぴつしやり閉てるが夫にも氣が付かずに奥へ姿を隱す。

〈〈斯くと白齒も咲く花の、桃の井若狹之助が妹三千歲姬……蔡ひこがるゝ縫之助に、別れ程經し物思ひ……

と上手から沈み勝ちな顏色で、三千歲姬が出て來て、釜の煮音に耳をとめて、何か思ひ出したやうに。

「あのもずやの煮音は、松風に似しとやら、古へ須磨へ流罪の行平卿を、こがれ蔡ひし松風がかこち草、哀れに消えし憂身とや……、縫之助樣と、此の三千歲が……」

有りし日の嬉しさを、思ひ浮べて、果は悲しさが胸へこみあげ、さめ〴〵と泣き伏すのである。其姬の耳元へ異樣な聲が聞える、夫は伴左衞門である。

「……イヤナニ姬君樣、今日は本藏が身の落着、又御前樣には今宵屋敷へ連れ歸れと、則ち此の伴左衞門、お迎ひの役目で御座ります」

「……なんと云やる、兄上樣が自に、今宵屋敷へ歸れとかや」

「イヤモウ歸るとも〳〵、肝玉がでんぐり返る俄の御祝言……」

「え、そんならあの、縫之助樣と……」

と嬉しそうな聲で問ひ返すと、

「いやさ拙者と祝言さゝうとある殿の御上意、是はしたりそうお逃げなさるな」

姬の顏は再び變る、が伴左衞門は猶も、嫌らしい目付で言ひ寄るのを、姬は突き放して、逃げ廻る、伴左衞門は執念く追ひかける、その中へヌツと本藏が出て、其眞中へ突立つ。

「井浪氏、コリヤ何と召さるゝ」

「ヤア加古川氏か、悪い所へイヤサ悪い〳〵、悪い遊びが始まつて、何かその攝まへとか申す鬼の役、拙者に仰せ付けられ、扨々迷惑千萬……」

伴左衞門はテレ隱しに大きく笑ふ、本藏は三千歲に、斯樣な人非人にかまはず、殿のお傍へ早ふと目で知らせる、姬は頷いて其儘次へ立つて行く。伴左衞門は默つてはいない、某を人非人だと云ふ此方から非を改めろ、と、さん〳〵に悪體を並べ立る、本藏は落付拂つて。

「……其落度故今日までお目通り叶はず、此の下屋敷へ蟄居の本藏、去り乍ら横戀慕は致さぬ、まだ此の上に豪子の釜……サ云はぬぞよ一命は主人へ捧ぐるが臣の習ひ、御直の成敗少しもいとはぬ……」

急所を刺された伴左衞門は、返す詞が無い、そこへ平馬が本藏を成敗するから、縄打つて奥庭へ引け、太刀取は伴左衞門に申付ける、との詞意を傳へる、伴左衞門は急に力付いて

本藏に繩をかけて、又怒鳴り付けるのである。

〳〵手先しまつて喰ひ入る繩、目には泣かねど心には、是が忠義の仕納めかと、思へば足もたど〴〵と……

本藏は餘義無く繩にかゝつて、伴左衞門に引立てられて行く……床の送りで舞臺は靜に廻つて行く。

廻り椽付きの二重屋體、床の間、違ひ棚など、何れも立派上の方は間に橋を渡した離れ座敷、燭臺の灯が淋しく照り渡つてゐる。

しめやかな琴唄が聞えて來る……桃の井若狹之助安近は悠然として出て來る、後からは腰元睦月、如月に茶道の珍才が付いて出る……悲しげに鳴く雁の聲……

「時しも空に雁金の、翅かわして鳴き渡るは、心淋しい事ぢやなー」

と皆々へ一順せりふが渡る……又琴唄で二重へ上つて座につく、腰元其他は、しとやかに次へ下つて行く。

伴左衞門は得意そうに出て、中間に土壇の用意をさせて、本藏を是へ引き出させる。

本藏は打沈んで平馬に繩を取られて、出て來る、其儘土壇に直る。平馬は白鞘の刀を伴左衞門に渡して退く。若狹之助は本藏に打向ひ。

「今日の成敗余の義にあらず……」

と先頃殿中で恨あつて師直を打捨てやうとした時、相手は低頭平身して詫びた、それは其方が師直の邸へ行き金銀を以て詔つたゆへ、自分は詔ひ武士ぢやと殿中で云はれてゐる、其次第を云聞かした時松の一枝を切つて金打仕たのは、自分を謀つたな、と云ふ若狹之助の詞は爽かな、而して威權の有る聲である。本藏は、

「……松ヶ枝の金打、何故表裏仕りませうや、松と云ふ字の木偏を切らば、公の一字に恙く、國家長久祈りの金打」

「然らば受けし恥辱は如何に」

「申す迄も候はず、君恥めをうくれば臣死すとの例もあれば」

と云ふも終らぬ内に、冠せかけて。

「默れ本藏……然いふ汝は何故に切腹致して相果てぬのぢや……既に伴左衞門が申すには、本藏を屹度御成敗なさらねば、お家の瑕瑾に相成ると某へ數度の諫言、是非に及ばず只今死罪に行ふ……併し予を恨むであらうな」

若狹之助の詞の底には熱い情がこもつてゐる、本藏は勿體無いと云ふ風に平伏する。而して最期に申上げ度きは臺子の釜、と云ひかけるを伴左衞門は打消して、成敗を急がせる。若狹之助は悠々と庭へ下り立ち、伴左衞門の持つた太刀を拔き放して。

「今が最期ぢゃ觀念せよ」

若狹之助の振り上げた白刃は、思ひもかけぬ井浪伴左衞門

の肩先へ、深く斬り込まれて。返す刀で本藏の縛めは切られる本藏は呆然と……若狭之助はニツコリ笑ふ、そして白刃の血汐をぬぐひ、本藏に伴左衞門の死骸を小柴の蔭へ片づけさせる。

「その方が咎め今日只今相濟んだ、今改めて長の暇をつかはすぞよ」

若狭之助の意外な詞に、本藏はさも嬉しさうに平伏する。

若狭之助も滿足そうに。

「オ、嬉しいが道理々々」

と本藏に妻子を都へ上して、由良之助に對面の上、討たれて死ぬ心であらう、とすつかり本藏の底意を知り拔いた言葉殿中の事件から、自分の短慮の直つたのも其方の影だと、心から嬉んで、未來で忠義を盡してくれと、後は涙で顏をそむける。本藏は此の過失を悔む風に、ほつと溜息をつくのである。

〈何と先非を悔み泣き……何思ひけん本藏は立上り……

本藏はやがて涙を押しぬぐつて、腰元に命じて臺子の釜を運ばせ、其釜の湯を、丁度咲き亂れた竹蘭に注ぎかけると、花の色は失せてしをれてしまふ。夫は最前伴左衞門が投じた毒藥の効目である、若狭之助は猶も本藏の忠節に感じ入る。

家臣が運ぶ白臺には、袈裟尺八が乘せてある。

「コリヤ本藏此袈裟尺八は汝へ餞別、一人の娘を思ふ親の身は、燒野の雉子夜の鶴、巣籠りの一曲……」

と其上高野師直の邸の繪圖面まで添へて與へる、重ねぐ〳〵の熱い情に本藏は有難涙に咽ぶのである。目出度い門出と若狭之助は、本藏と盃のやり取りが有る。上手の一間から、琴の高い調子が、この別れの盃を、なほ物悲しく思はせる樣に響いて來る。

本藏は力無く〳〵立上る、若狭之助も沈んだ調子で……

「思ひ廻せば我れ二十五年の春秋を、あしたには教訓のきりを拂ひ、夕には講說の星を戴き、晝夜旦暮のいつくしみ、滿足に思ふぞよ」と本藏の面を見詰めてはら〳〵と落涙する。

「ハツ君にも益々御機嫌よろしう」と本藏の聲も曇つてゐる緣傳ひに三千歲姫が名殘りを惜しみに出る。

〈……笠の内より御顏を見奉れば姫君も、いとゞ涙に糸竹の末來は一つ一越斷琴……

「是が此世の」と三千歲姫が近寄るのを、若狭之助は「コリヤ」と押へて灯を吹消す、本藏は花道に平伏して泣く、姫も忍び寢に泣いてゐる。

本藏は悄然として、花道をはひつて行く……

樽屋おせん

林 京太郎 画

――お、旦那とおせんが言ひ合したやうに藏の中へ。コリヤ、おかしいなア。

麹屋の若主人長右衛門が、手の空いてゐるおせんを連れて藏へ入子鉢を取出しに行く後姿を見送つて、伊助を弄る氣で鮓屋の久七が揶揄ました。

――おせんさんもハイ〳〵と二つの返事で先へ立たぬばかりにして行かれたが、伊助さん、油斷しなさるなや。

お陸も面白半分煽てます。

それほど天滿の樽屋伊助とその女房おせんの仲は濃やかな、他人眼にも羨まれるほどなので、朋輩衆の嫉みも幾らかは交ぢつて居たのでしやう。

今日は此家の初代の五十年忌の派手やかな法事。麹屋の大身代にふさはしく招かれたお客が、五十人にも餘るので臺所の用意は、近所の女房たちや料理方の男の大勢で眼の眩るほど急がしい。その法事手傳ひに樽屋おせんも亭主伊助と共々働いてゐるさなかに、恁んな事が持ち上つたのです。

おせんは元、この家に上女中で奉公して居る頃から伊助とは深く馴染んで居た間柄で、それを同じこの家の小さん婆さんの取持ちで伊勢へ抜參りしたこともある。あれやこれやでパッと噂が立つやうになれば旦那も默つて居られず到頭好いて好かれた樽屋方へ嫁入となる。

三年前の色模様を擔ぎ出したら、その仲の好い事は一と通りや二タ通りでない。麹屋の臺所で誰一人としておせん伊助の夫婦仲を羨まぬものはなかつたのです。

だから伊助は例令どんな事を傍から言はれても、女房を信じて居ますから何氣なく笑ひ流しました。

――てんごうにも、そんなこと言はんといて呉れ。

おらが女房をほめるぢやないが――と、まるで越後獅子の文句を唄うやうにウットリして、伊助は其場で實際おせんの女房自慢を並べ立てました。

家ぜ返して冷かす者もあつたが、女中のお

粂やお陸は、その長唄のやうな惚氣を又うつとりと聞惚れて、いまさらのやうに、おせん伊助の夫婦仲の良いのを羨み直す騷ぎでした恐らく他人からどんなに惡口で交ぜ返さうとしても、樽屋夫婦の愛情はつゆほどの搖ぎもなかつたのです。

——粗相とは言ひながら氣の毒な事をしたの。

——いゝえ、大事ございません。

藏から出て來た長右衛門は、しんぢつ、氣の毒さうにおせんの髮を眺めました。おせんは愛想笑ひをし乍ら、又しても自分の髮を氣にして手を上げます。美しく結ふた髮がメツカりくづれてしまつて居るのです。

これを見て臺所の女たちは、先刻、二人が藏へ這入りしなに、言つた久七の『おかしいなア……』の言葉を思ひ出して、口にこそ出されお互ひにフイと顏を見合せてしまひました。女は邪推の深いものです。それだけ心が弱いから仕方がありません。

臺所の女達が斯うして疑ひの眼を見交して居る時、長右衛門の妻おさがが出て來ましたこれが名代の燒餅をやく人。耐りません。

——鉢の箱が落ちたら髮がこはれるかえ？

長右衛門が餘りおせんを氣の毒がるので、おさがは到頭、持前の角を生やして癇癪を立て、矢庭に鉢の箱を土間へ叩きつけました。

……木ッ葉微塵。

鉢の割れるきちがひのやうな響に、驚いて料理人や女達が飛び出しました。その大勢に取捲かれながら、言ひ募るのはおさがの烈しい悋氣です。

——ようも〳〵私の顏へ恥の極印打つやうなことを……コレ、おせん。お前はようも旦那を誑らかしくさつたな。

——まあ、あんまりなお疑ひ、どうぞ旦那さま。良いやうにお言譯なされて下さりませ

おせんがオロオロ辭を顚はすと益々長右衛門との仲に妙なことがあつたやうに聞えて來るのでした。

——それでは御寮人さまが可哀さうで御座ります。オイ、おせん。こゝへおいで、此處へおいでと言ふに……お前エライことしたなこゝのお内は大事なお得意、ことに法事の場席、することゝせんことがあるぜ。

と言う工合に抑々の言ひ出しべえの久七が其處はお出入先でツヒ御寮人の肩をもつ、それが猶さらに火の手を煽らずに居りません。おせんは口惜しいやら悲しいやら滿座の中で途方に暮れてしまひました。

——旦那さまの粗忽ゆえ私の髮がつぶれたばかりの事が、どうしてこのやうな大事になるのでございましやう。

おせんは、もう、いつそ腹が立つて、腹が立つて。

——いかに悋氣深い方にしろ、前後をお考へなされたら。

と言つたのでおさかはおさがで又一層赫ツとなつておせんに摑みかゝる大騷動です。

——これおさが。よい加減にしておかんか

長右衛門は見兼ねて妻の手を押へる。

——それほど、おせんが、庇ひたうございますか。

おせんを氣の毒と思へば思ふほど、妻の嫉妬が輪をかけて烈しくなるのです。

そこへ現れた伊助、事が餘り眞實らしく見えるので、ムッとしておせんの手を摑みました。

——おせんが惡いのでございます。

伊助にはおせんが命にかけて眞底から愛しい、愛しいだけに怎んな不安な噂を立てられると、そんな事は滅多にないと信用するだけ

に『いいや』と言う疑ひも一倍濃くなる。—

—これが人情です。

それで麹屋を辭して二人連れで天滿の家へ戻つた時も、お互ひに探り合ひをして夫婦仲に一種そぐはない空氣が漂ふのでした。

おせんにして見れば根も葉もないことを、どうやら夫までに疑はれてゐる、だから腹も立てれば拗ぬても見たくなる。一方にして見れば伊助は伊助で、今も說明したやうに、女戻に限つて滅多にそんなことはは……千も萬も承知してゐながら『だが待てよ』と言う不安心がヒョクヒョクと頭を擡げる。そんな譯で家へ歸つて水入らずに差向ひになつてもお互ひの思ひわずらひで妙に冷たく默り合つてゐました。おせんは女、だから今日のことが腹が立つて腹が立つて、ツヒ酒も飲んで見たくなります。

—そやろ〳〵。俺に言譯がないさかい、それで酒の勢をかるのかおせん。

と、酒を飲んだら飲んだで又伊助は邪推する。

—よう恥を搔かして呉れたなア。

—伊助さん。

涙を零しておせんは恨めしさうに睨みつけました。

—お前はしんぢつ、私をさうした女と思うてゐなさるのかえ、それが心と心を知り合うてる女夫仲でござんすか。

誠を寵めて訴へる。

その眞劍味が伊助の疑つてゐる矢先だから、一生懸命に有つたことを無いと打消さうとするやうに見える。

—おゝ思うてゐるとも。

伊助も恁うなれば死ものぐるひです。

—火のない所に煙はたゝんよつてなあ。

もう半分は捨鉢氣味どうともなれで冷たくセヽラ笑つて領きます

—あゝ、私は今という今、男の心がよう見えて來た。永い歳月暮してきたしんぢつ苦勞の功、それが纔な濡衣を干す力さへないことは餘りのことで、阿呆らしいやら、あさましいやら。

そうなるとおせんも自暴氣味にならずに居られませんでした。

——證據のたつまで蹲居一寸この家を動きませぬ。

——エイ、出て行かぬかい。

烈しく吐鳴りつけるので思はずヒヨイとおせんが起つ、眼も頬も涙で一杯、その哀れな顔を見ると怒つても流石にわが女房、伊助は吃驚してその袂をグツと握りました。だのにまだ矢張り疑ばしゆうて心がゝりでなりません。も一度だけ念を押ず氣で

——オイ、おせん。あの旦那が何んとかお前を欺したのやろ、え？　さうか〳〵……ハイとの返事なら女房を赦してやる心算です。聲を柔げてさう言うのが又却つて惡いのに。

——旦那は何も欺してぢやない、まつたく欺すもへつたくれもない。只、藏へ鉢を取りに行つてその箱が突つて髮がづぶれただけですもの。

——それでは、お前の方からか。

——何をな？

それが又伊助には白ばくれてゐるやうにしか見えぬ。恁んなに事を嚙み分けて大きく出てやつてゐるのにトボけるのかと、もう腹が煮沸かへる。もう我慢がと行なりおせんを引摺倒して打つ、撲る、蹴る。その揚句に仲人の所へ行つて緣を切るのぢやと、伊助はプイと戸外へ出て行つてしまひました。

その跡におせんは寂しさを身に沁ませて茶碗酒をガブ〳〵飲んで居る所へ、伊助を尋ねて來たのが麴屋の長右衛門です。が伊助は留守、先刻の詫びに來たのですけれども。

——言譯いうたらそれで旦那さんのお心は濟みますかえ。

——それは重々すまぬ、申譯はないことながら

——否、それを言うのぢやござりませぬ。大勢の人中で立てられました嬉しい浮名を……

おせんの眼か色ッぽい妖しい眼色でキラと光りました。恁うなると幾ら女は弱いものと言へ、女は女だけの意地があります。

おせんが醉つてゐるので、逆ふては却つて惡いと長右衛門が素直に盃を受けたのが惡るかつた。

——浮名と意地が生ませた戀。わたしやこれで本望でござります。

と、果は淫らがましく膝をくづして長右衛門にしなだれかゝるので、面喰つた長右衛門歸り仕度で起ち上る、それを引止めやうとてヨロめく足元、おせんは行燈に突き當りました。

……灯は消えて闇。おせんは男の腕をギユツと抱へて、酒に火照つた唇が、暗闇の中で長右衛門の頰へ今にも摺れさうになる。

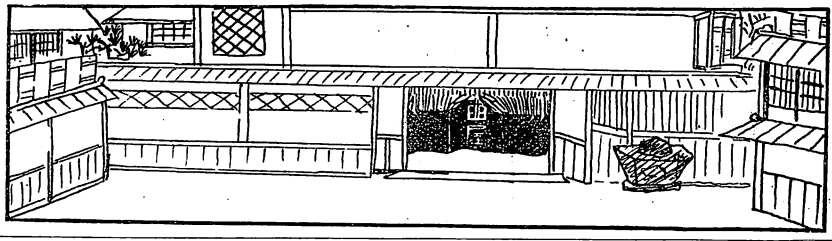
伊助が怒つて出たものゝ、仲人の所へ行くでなし、腹立まぎれに町を歩いたものゝ空の高く澄んだ十六夜の月を眺めると、氣が少し鎭まつてくる、思ひ直して家へ戻つて來ると——家の中は眞暗、確かに遁げて行つたのは男の影、長右衛門、這入るとおせんはグツタリ倒れてしまつてゐる。抱起して洩れる月影に顏を透かして見ると、女房は鉋で咽喉を突破つて喘ぎながらの涙の息、細々と苦しさうに。

——おせんは……おせんは……淫奔女でござんした。

と心底から伊助に詫びの一言、そのまゝ哀れや落命してしまひました。

——エライことしたる。死ぬならあんな事言うのやなかつた。

眼に映るは苦しげなおせんの美しい死顏ばかり——夜明にちかひと見えて烏が一聲啼くのが聞えて來ました。（おはり）



中座十一月興行上演（大森痴雪氏作）

夕霧伊左衛門

廓文章（鵡鸚石）

一夕　一伊左衛門　鴈治郎
　　霧　我童

枕當かい喜左衛門心殘して奥へ行く過し夜すがたの連れびきに思出して伊左衛門胸は二上り三下り今の憂目も心から思ひ廻せば奥の間の歌の唱歌と今の手や

歌　かわい男と逢阪の關よりつらひ世の習ひ。

伊　アノ歌を聞くにつけ去年の月であつたが太夫と奥の小座敷で連れ彈きをひいた時の其面白さ其彈く主は變らねど變つたは私しの身の上、夫にしてもあいつに限りあの樣な心であらうとは

歌　思はぬ人にせきとめられて今は野澤のひとつ水如何樣ナア戀も情けも世にある時人の心は飛鳥川變るは勤めの習ひじやものいつそ逢はずにいんでくれやうか、イヤ〳〵喜左衛門夫婦の心ざし逢はずにいんでは此胸が

歌　濟まぬ心の中にもしばし住むは由緣の月のかげ

竹本　むざんやな、夕ぎりは流の昔なつかしく飛立心おくの間の首尾は朽せぬ緣と緣胸に心の相の山間の襖の工合よく

上　明くれ戀しい夫々の顏見ると嬉しく走りより我身を共に福のよせくる、涙くれいたるコレ目を醒して下さんせい、わしや煩ふてな

夕　ゆりおこし、ゆりおこせば取つて突きのけ

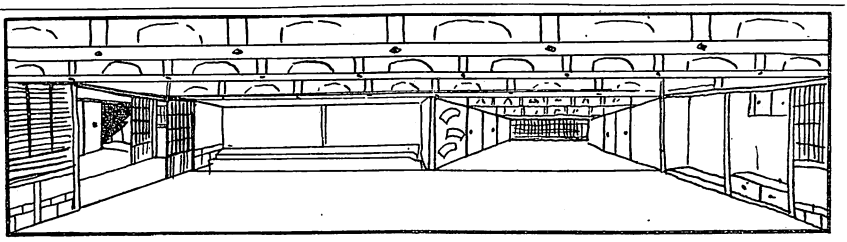
伊　エヽ爰な夕ぎり殿とやら夕飯どのとやら節季師走にこなさんの樣なゆつたりとした身の上とは違います、ハイ此伊左衛門は紙子一つで七百貫目といふ借錢を脊負ふて居るゆへ。

夕　ころりとこけて空鼾き。

夕　恨みがあれば云はしやんせ、わしや何んぼうでも寢さしやせぬ〳〵。

伊　とゆりおこせば。

伊　是はしたりかもうて下さるな此樣になつても藤や伊左衛門萬才殿に近付は持たぬ、萬才ならば春ムれ通りや〳〵。



夕　通りや〳〵と言ければ、

伊　此夕霧を萬才とはへ。

夕　ヲ、萬才傾城の譯知らずば言つて聞かそうか

伊　サアきくわいナア。

夕　ヲ、云ふて聞かそう、全盛の夕霧太夫とも云はるゝ者が最前見ていれば阿波の客じやといふて、そなたを蹴つたを見て居たぞや、あんな田舍の侍に踏れたり、けられたりするを萬才傾城と云ふわいのう。

上　誠に目出度う侍りける。

伊　然かもあしだはいてけるやら。

上　年立ち歯る明たにて誠に目出度う侍りける

伊　侍がけるによつて此伊左衛門も、ける〳〵〳〵コレサ喜左ア、萬才に餅でも米でも早うやつていなしやいのふ。

上　譯も涙の捨言葉煙竹引よせ吹き、きせる空さぬ體にていたりける。

夕　夕霧涙諸共に恨みられたりかこつのも色の習ひと言ひ乍らそれは浮氣の水淺黄逢初めた其日からこんな緣しは唐にもあらうか、はでな浮名が嬉しうて人のそしりも世の義理も。

上　白紙にかく文のつや返事取るまも心せく口舌の床のよしあしも嬉しいにつけ。

悲しいにつけ忘れた事はない夫れにお前は悪性をわしが案事は移り氣な外にもしやと言ひ掛り私に恨みがあるならば此方にも恨みがある、去年の暮から丸一年二年越しに音信なくそれは幾瀬のもの案事ぞえ。

上　煎茶と練茶と釘とあんまでやう〳〵と。

命繼いでたまさかに逢とこなさんにあまえよと思ふ處をさか樣な、コリヤむごらしい

上　エ、胴慾と私が心を變つたら叩いて腹がいえるかへ、コレ死にかゝつている夕霧じや笑顔見せて下さんせいエ、心づよや胴慾な氣强い心に恨み泣き空にしられぬ袖の面も

上　くまなき夜半の

月かげも

上　くもる計りに見へてける

菊五郎

光秀と伊左衛門など

高安吸江

新作ばかりの十月と全くたて方をかへ、今度は皮肉屋の中車を加へて、院本ものを並べた趣向はさすがに考へたものと思はれる。新作も無論結構で、大いに歡迎すべきであるが、私共がいつも云ふやうに、名人上手級の人々が殘つて居る間に、古典劇――殊に京阪では院本もの、標本的なのを、出來るだけ多く一般はもとより若手の俳優諸子に見せ、『吾々は歌舞伎劇など、は全く沒交渉の世界に住む』など、云ふ不心得者の眼を覺させるのが目下の急務であらふ。

今回上演せられる太十は、恐らくそれからヒントを得たものではあるまいかと思はれる程に、鎌倉三代記の絹川村とよく似て居る。先づ佐々木と光秀、三浦之助に十次郎、時姫と初菊、芝居では出ないが故意に時姫の鎗で突かれる三浦の母が皐月の代で、飄逸な久吉の旅僧に對して、チャリの藤三が居る。少々無理ながらおくると操、本田に正清など一々對照すると中々面白い。今此二曲を仔細に比較評論することは私の目的でないから避けるが、一般に云へば太十の方が派手で、筋から云へても三代記の中心が時姫と佐々木との間に迷ふて居るに反し、此方は光秀の悲劇として稍一貫して居る。そして其シテはワルレンシタインの樣に、煮え切らない愚痴をこぼさず、堂々と所信を述べて母や妻の忠言を退けながら、流石に我子の死に向つて暗涙を禁じ得ないといふ、單純でわかり易い日本のサムライ型である。

中車はその光秀役者として當代第一人者であらふ。彼は最近東京の歌舞伎座で梅幸、羽左、源之助等と共に好評を博したそうだが、大阪では既に大正九年六月にやはり今回と殆ど同じ顔ぶれで（惜むべし、其中で多見藏が居ない）上演せられた。當時は多少活歴地味はせまいかとの恐が、交らないでもなかつたが、その後一層堅實に、愈々圓熟の境に入つた彼が此度の演出

は大に期待すべきである。

十次郎は先年と同じく今回も無論鴈治郎であらふ。最近十年間に演つた此人の前髪ものを列擧すると三代記の三浦之助（大正六）、十種香の勝頼（同八）、鈴ヶ森の權八（同十）、妹脊山の久我之助（同十二）、櫻丸が賀の祝（同十二）、と車引（同十五）、それに此二月に出た須磨の浦の敦盛などであるが、十八歳の十次郎は敦盛に次いでの若い役で、先きに相手の福助よりも水々しかつたことを憶へば、此度の成績如何は頗る興味ある問題である。團、菊の晩年に鬼一と牛若とを演つたのを私は見たが、當時中車は智恵内であつた。時節柄この菊畑でも出るかと思つたが左樣でもなかつた。中車の鬼一に鴈の牛若もいゝ取組であらふと思ふが、何時か一度見たいものである。

寺子屋で松王屋敷が一大蛇足の作であるやうに、本藏下屋敷も其仲間入をするに耻かしからぬ作品である。唯三千歳姫などをあしらひ、多少の彩色が施されて居ないではないが是は大正八年の十月に故梅玉の本藏で出たが、適役とはいへ晩年の老人あまりに影が薄いやうであつた。中車は表面の手強い割に、内心中々の感情家であるから、光秀にしても母に向つての痛恨、子に對しての愁傷などに頗る見るべきものがあつた。愛兒の爲に其身を捨てんと、主家を辭し去る本藏は無論彼の適役であらねばならぬ。一方若狭之助は亦先年の如く鴈治郎の役であらふが、此れは彼のお箱の土屋主税に共通する處かあり、逸を以て勞をうつとでも云ふべき役で、安心して頂戴出來るものである。

夕霧は大正五年十月并に同十年十一月に演ぜられたやうにやはり廓文章の方であらふ。此れは近松の阿波鳴戸から阿波侍の條をカットし、中巻及び下の相の山など全部ぬいて、唯勘當がゆりて夕ぎり身受の件丈をくツ付けた、極めて簡單明瞭のものである。そんなことから例の『侍も町人もける、万歳傾城』の意味が明かでなくなつたが、其代りゆかりの月の歌曲が加へられ、音樂的情調が深められたわけである。名殘の正月はじめ阿波鳴戸等すべて此名妓の死を主題として居る劇よりも、寧ろ吾々は藤十郎の古劇の如き、紙子姿の傾城買や、遊女の戀愛などをこゝに見るのである。

鴈治郎の伊左衛門が天下一品であることは今更喋々を要しない。成程東京にも此役に扮し得る名手が無いではない。しかしそれは清元や常盤津での吉田屋で、大坂の新町、吉田屋での伊左衛門にはならぬ。且又我が鴈君のあの柔やかでフックリとした線や、豐麗で魅力に富んだ四肢の運動、明るくつて艶つぽいながらに品位を保つて居るその風姿などは實際和事そのものと云つても過言ではあるまい。既往に於ける彼の印象は是位にして、私共は現今の彼が如何であるかを、此度の中座で見やうと思ふ。

分身の若狭之助

高原慶三

どうした因縁やら僕は鴈治郎氏の『下邸』の若狭なるものにまだ一度も見参してゐない。

鴈治郎のものといつたら大抵少くとも二度以上は見てゐる自信はあるのだが、若狭之助だけは不思議にも一度だつて見てゐない。

ところが、これはどうした因縁やら息子さんたち、即ち長三郎、扇雀兩君の若狭之助は知つてゐる。しかも兄弟とも場所は京都で見てゐる。一寸宿命的な氣持にならざるを得ない譯である。

しかも扇雀君の若狭之助については、ある有名人とのゴシップ的交渉が織込まれてゐるだけに一層思ひ出が深いのである。

『菊池寛、若狭之助、中村扇雀』

三題話めかして、話は數年前にさかのぼる。

鴈治郎氏が『藤十郎の戀』を南座の顔見世でやつた時である。松竹宣傳部が大阪毎日京都支局の後援で、南座で藤十郎講演會をやつたことがある。木谷蓬吟、成瀬無極氏に東京側から作家の菊池寛氏を招いて、僕が憚らず前口上を勸めた關係から當時流行作家だつた菊池氏に初めて面識を得るに到つた、その時に僕は同席した初對面の山本修二氏と一緒になつて、當時京都明治座を根城に活動してた扇雀君を大にかつぎ上げたものだつた。

『然うかな!! それぢや明日は扇雀を見にゆかうかな』と、菊池氏はいつた。今は知らないが、その頃の菊池氏にもこんな子供らしさがあつたのだ。

その翌々晩かに、大毎の京都支局の僕宛てに松吉旅館の男衆が使ひして菊池氏の手紙がとどいた。

開封すると、それは『扇雀を見る、菊池寛』なる四五枚の原稿なのであつた。

僕は三拜もせず、それを翌日の京都附錄に載せたに過ぎなかつた。

鏑一文も支拂はないで、一言の依頼も、返禮もしないで、菊池寛の原稿を取つて、無雜作に新聞の地方版にうち込むだのは恐らくは文壇廣しといへども一人もなからうと思ふが、知何。

『道頓堀』の編輯者鳥江銕也よ、何とけなりいと思はないか。

さて、それから三ヶ月ほど經つて偶然四條通りの大丸呉服店で菊池氏に出會つた。

『何時いらつしやいました。扇雀の芝居を御覽でしたか』

『うん、見ました』

まるでその當時の僕には「われらがセンジャク」といふ感じが胸一杯だつたものと見える。今から思へば甚だ笑止だが……

翌朝、下河原の旅館喜多家へ、菊池氏を訪問した。その近くに下宿してた僕は朝湯歸りに濡れ手拭などをブラ下げて立寄つたなど、甚だ失禮なないだつたのだが、これも今にして思ふと全く汗顔の至りである。

『扇雀觀を聞かせて下さい』

僕は、この前の菊池氏の原稿が京都の劇壇に非常なセンセーションを與へた事を知つてゐるので、新聞記者的に再び柳の下の鰌をねらつたのであつた。それで若し原稿がとれなければ『菊池寛氏談』でもよいと思つたから短兵急に菊池氏に話を求むるのであつた。

菊池氏は直截に扇雀の若狭之助を驚嘆する許りに推賞した。至純で、眞率で、心持の深さ、あらゆる點で日本一の若狭之助だと褒めた。

又、同時に中村小福――今帝キネにゐると思ふ――の三千歳姫を極言して褒めた。

機會があつたら扇雀一座をサンデー毎日にでも書いてもよいとさへいつた。

文壇の大御所、菊池寛にもかうした時代があつたのだ。

劇壇の俊傑中村扇雀にもこんな時代があつた。

さて、かくいふ僕にも……と、甚だ悄然とする現在である。

兄さんの長三郎君の若狭之助は昨年の夏、南座の五色座で初見參した。本藏は鰕十郎君、三千歳姫は成太郎君であつた。

これは扇雀君の場合のやうに追想のつながりに大きな固有名詞がないだけに印象が餘程淡い。たゞ次のやうな一項が日記にノートされてある許りだ。

『長三郎の若狭之助は氣品のあるのと、形だけは飛抜けてよいが、調子がわるい、せき込むとダヾけてゐるやうで聞きづらかつた』。

甚だ卒氣ないがこんな程度である。

お父さん（鴈治郎氏）の若狭之助には初對面だが、息子さん二人のには相當淺からぬお馴染である。お父さんの若狭之助を書くつもりが、息子に花を持つてしまつた。子は親の分身だからお父さんこれで勘辨して下さい。野坡に句あり。

長松が親の名で來る御慶かな。

哥たち

舞臺裝置の復興を望む

入江來布

一しきり、舞臺裝置がやかましく唱道せられ、それにつれて照明も重要視され、海外劇場の裝置や照明の智識も一時に移し植えられて、舞臺專門家や同好たちの間にも研究團體が勃興し、大阪にも舞臺の會が生れ、東京と相呼應して展覽會なども開かれ、少しく大業に謂へば百華燎亂のありさま、舞臺裝置全盛で、一時は肝腎の芝居よりも舞臺裝置を先づ鑑賞するといふ有樣にまでなつた、一方には、その刺戟をうけて舊式の道具立にも寫實的な精巧な裝置が流行して纖細を極めた本ものゝやうな二重を組み、庭には一々飛石まで置いて役者はわざ〳〵その飛石の上をぴよい〳〵と飛んで歩かされた（或ひは役者の方から註文をつけて飛んで歩いた）といふ樣な事もあつた、番付に裝置家の名を入れる事も此の頃の所產であつたかと思ふ。

それほどまでに全盛であつた舞臺裝置や照明熱がいつの間にか冷靜になつて、いつしか當事者間にも見物にもあまりやかましく言はれなくなつた、これは、

一、全盛の頂點に達して一時休憩のかたち。

一、復古的思想擡頭の影響。

まあ斯ういふ事が主で、それに飜譯劇の流行が下火になつたことや、小劇場の推移なども影響してゐやうが、尙もう一つ主なる原因として當事者の熱が冷靜になつて來た事も否む譯には行くまい、なぜ、突然こんな事を言ひ出したかと言ふと、それは久しぶりに先月中座の成駒家劇を觀たときに、照明の扱ひ方があまりと言へばあまりに蕪雜であつたのに驚いたからである、十年一日、何の進展もないといふのならまだいゝが、これはまた、十年前と比べて退歩である、照明だけで言へばまるで場末の芝居であつて、これならば、なまじか光りなどを動かさないで、昔しの樣に畫の場も夜の場も一定の光度で同じ樣にたゞ明るくさへ照して居ればいゝといふ式の方が遙かにましである、先月の狂言には可なりに光りを動かす場面が多かつた、「曲物語」の峠茶屋の場、「瀨戸民吉」の各場面、「二枚繪草紙」の

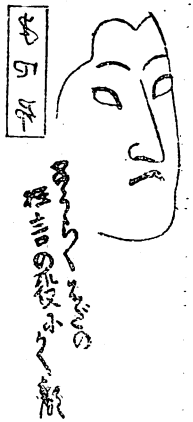
長柄堤、殊に所作事の「女郎蜘蛛」など、さうしてそれ等の場面にはわざとらしい照明がやりつ放しに角々しく放射された、脚光は青い鼈甲紙を張つた光り一點張り、天井からは橙色の光り一點張り、その光りの移り方がカチリ〳〵と音でもしさうな角張つた動かし方であつた、それから頻りに暗轉を重ねた、切の所作事「女郎蜘蛛」の巣の條りなどは本來ならば大に照明家の腕の見せ所なのであるが、たゞまつくらの中へ幻燈を映してゐるといふ見得であつた、一體あれで役者衆が得心してゐたのかと少々訝かしくもなつた　斯うなると役者衆にも一言を呈したくなる、道頓堀第一流の劇場の照明が今日なほこの有樣では誠に情けない、但し、私は、何も複雜な、むつかしい光りを出してほしいといふのではない、あんな角ばつたゴツ〳〵した光りでなく、丸みのある、温かく、柔らかい光りで舞臺を抱きかかへてほしいのである。

先月の中座の道具立は平凡ではあつたが目障りのところはなかつた、「曲物語」の大源寺奥書院の場なども工夫があつたし「二枚繪草紙」の伴榮晴君の長柄堤の場などはたしかに佳作であつた、「瀬戸民吉」の竈場の意匠は矢野陶々君の考案といふので寫實のうちにどこか離れたところがあつて先づこれも成功であつた、けれども折角の是等の裝置も、一狂言毎に一貫した裝置上の主想といふものが流動して居ないためにばら〳〵になつた、その點で背景、道具立も安心してゐる場合ではないと思ふ、尤もこれも別段實物を見るやうな複雜な凝つたもの、手間とお金のかゝつたものを作れといふのではない、簡單な裝置であつて却つて効果の多い場合が屢々あるのである、此の間の猿之助奮闘劇の舞臺裝置が安物で氣の毒であつたと言つて同情的の意をもらした劇評を見たが、卑見ではあの時の道具立は如何にも有合せものらしかつたに拘らず効果は大に現はれて居た、觀方に依つては寧ろその安物であつたことが簡明の効を援けたとも言ひ得るのである。

要するに、先月の中座を見て、私は斯ういふ事を直感した、舞臺裝置は今や一服の姿で、漸く人々から閑却されかゝつてゐるのではないかと、まさかさうではあるまいが、多少ともさういふ影がさしてゐるとすれば大事である、大阪には熱心な專門家の集つてゐる舞臺の會もあり、各種の劇場と各種の劇團をもつてゐるのであるから、さういふ傾向のある無しに拘らず、大に發奮して舞臺裝置（照明を含む）の復興を策して貰ひたいものである。

—話逸の郎三吉—

嵐吉三郎は樂屋にゐても一向役者らしくなく、のんびりしたもので樂屋に來客があると先づ香を焚く、焚く時にはなるたけ火に遠ざけなければいけないなどと一々講釋を云つて焚く、あまりに火が遠ざかりすぎるので少しも匂はないので、ある時來客がこつそり香を火の中へ突き込んで了つた、そこへ吉三郎が舞臺から戻つて來て、鼻をクン〳〵やりながら、どうです、よう匂ひますやろ、香といふものは火に遠けるほどこないに好い匂ひがしまつさなどゝ落付きはらつた事を云つてゐた、嵐吉はさういふ風にのんびりした人であつた。



尼ケ崎雑話

高谷　伸

繪本太功記、誰にもお馴染の淨瑠璃、一足でも稽古屋の敷居を跨げたらすぐにも耳に入らうといふもの、殘る蕾から段切まで空んじてしかた話の聲色入で一字脫がさず語つてのけるは、刮目に値するとしても、某伯爵は器用に任せて操のさわりを八へんつゞけさまに繰りかへし太功記八十段目の稱號を頂かるゝなど、太棹持つ猫は勿論杓子にもお馴染のと、まくらをふつてをいて本題に入る。

寛政十一年といへば人形淨瑠璃は下り坂の時代である。近松やなぎ、近松湖水軒など、作家としても二三流所の人である。にも拘らず尼ケ崎の段、前期中期の名作を壓倒して人氣がある大小の舞臺で度々お目にかゝる戯曲である。

十次郎は鴈治郎延若から扇雀、光秀は中車、幸四郎、多見藏巖笑から嵐吉三郎など數へたてればさまざまの舞臺も見たなかに出來もあれば不出來もある。

金高きが故に尊からず、舞臺を大がゝりにしたからといふて有難からぬ一例は、幸四郎演ずる光秀の時、〈又も聞ゆる人馬の物音矢叫びの音喧しく……〉で舞臺を廻し、正面にすね木の松ケ枝ではなく松の幹を見せて踏みしめ〳〵よぢ登るのである死骸を黑衣が赤毛布で消さいでも濟むといふ便利はあつて軒の瓢を發矢ときる光秀のイキが出ず、うしろ一面の黑幕、鍬疊とんだ芝居のだんまり模樣に終るばかり、故人の意を損じ、寫すでなく、移す異本の太功記、後の世までも殘して欲しくない型である。近八の陣屋を二杯どころか三杯道具で飾り、盛綱の陣屋に廊下づたひの離れ座敷のちよんの間ができる程ではなくても蛇足である。

三河家が巡業で久吉が湯殿へ入ると見せて向ふ揚幕へ逃げこんだあとの湯殿へ光秀がひつそぎ竹の槍を突込むとかの珍型を見せたこともあるといふ。

初菊が振裡の上に兜をのせて、引いて入る型も歌舞伎らしい佳い好みである。それに、何と言つても座がしら役の光秀に對

し、書き出しの十次郎役者が活躍する。

〈〈殘る蕾から出せば正面暖簾口から出る光義、その前から出せば、平舞臺から二重の上へ直る光義、前髪の水際立つた男振りでまづ見物の心を誘ふ。それからの究所究所を簡單に舉げると、〈〈孝と戀との思ひの海で、奥を伺ひながら三段を下りかけ踏外さうとして刀をとんと突き正面むいてのきまり、〈〈だう急がるゝものぞいのの枝折戸の柱につかまつての形、〈〈鎧の袖にふりかゝるで、初菊と鎧をひきあい『えゝ面倒な』と拂ひのけてツケを入れてのきまりなどある。

二度目の出になつてからは絞り兼ねたるばかりなりで、陣扇を開いて顔にあて涙をかくすところ、あと花道の引込みである

これは延若で行くと、〈〈哀れをこゝに吹き送るで揚幕でドンチャンを打込むと、十次郎は『いづれもさらば』と平舞臺へ下りる初菊が追ふて入れ替りになり枝折戸で止める。拂ふて行くのを縋りつく。〈〈思ひきつたる鎧の袖で兜の忍びの緒をきり、初菊に渡しその手をとつて思ひ入あり、ふるふ手さきを思ひきつて突きやり、兜の庇へ右手をかけ、きつと見得、逸散に揚幕へ駈け込むのである。しかし、行方知れずのかゝりで七三へきて、ちよつとおこつき床のテンテンで五六歩後退りして、愁を もつて踞つてしまふ所へ再びドンチャンを打込むので氣を取直し、きつと見得して揚幕へ駈込むのもある。

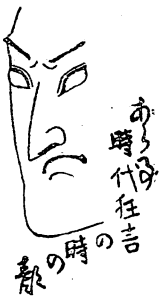
鴈治郎で行くと、〈〈風がもてくるで耳へ手をあて右膝を立てきまり、立ち上り初菊のからむのを振りはなし、花道七三でおこつき、向ふを見てきまり、『いづれもさらば』で本舞臺へ一禮して左手に兜を捧げて左足を踏み出して立ち、その出した足を後へ一つ引いて、兜を高く捧げ、緒を口に啣へきつと見得、それから右手を大きく振つて二足進み、兜を前に冠るやうに持ち直して、前かゞみに揚幕へ駈け込む。

前者の方が情があるが後者の型が歌舞伎としては本格である

三度目は手負で花道から出る。搦んでくる軍兵を追ひかへすのが普通であるが、扇雀の十次郎の時、秀郎の光秀が光義危しと見て手裏劍を打つのは珍型であつた。本舞臺で皆々に呼び生けられ最後に光秀が軍扇で叩くのではつと心をとり直し、合の手で活を入れるところよろしく糸の直しで左足を踏出してきまり、ノリ地に移り血糊を舐める。ノリ地だからのりを舐めるなどゝまぜかへしてはいけない。以下手負ひの物語りになるが、これでも三浦之助でも手負ひといふことに囚はれると、折角の好男子が腎虚になる。

歌舞伎劇の型、この頃の言葉の演出に相當するそれは、理に卽せず、理に離れず而して美に卽くのを本體とする。

十次郎の說明のみ長くなつたがそれは一例である。十次郎のみならず、太十のみならずすべての歌舞伎の演出は、繰りかへして言ふ理に溺れず、美に逝くを本體とすべきである。



玩辭樓漫筆

中村鴈治郎

十一月もまた中座でお目通りをすることが出來ることになつたので、たいへん結構なことゝ喜んで居ります次第でございます。ところが役割がやつと決つて、これから稽古にかゝらうといふ時に、編輯部の方が見えて、持ち役についての苦心を話せといふことでしたが、これには困りました。もとより數ならぬ私どもにしても、技藝のことについて、聽いて頂けることならば、それはもう數かぎりもないほど澤山に申上げたいことはございますが、さてくどくゝと申上げてしまふより、出來あがつた舞臺を見て頂く方がどれほど、手つとり早いかわからないとかういふやうにも考へられます。こんどはすでに數回手にかけて居ります役々ではございますが、いくら手なれた狂言でも上演の都度私の習慣といたしまして、いつも初役のつもりで、いろくゝと役の研究もし、苦心もいたしますが、それは稽古にかゝりまして、その芝居が終りますまで、毎日頭を惱ますやうな次第で、こんどの上演についてのことはたゞいまでは、なんともまだ申上げ兼ねます。

本藏下邸は、たしか明治三十年頃のこと、文樂座の竹本七五三太夫の淨瑠璃を聽きまして、これをひとつ舞臺に直して見たいと思つて、先代の市川荒五郎氏に本藏を賴んで、京都の南座で上演いたしましたのが始めであつたと思ひます。その後度々の上演に、いろくゝ苦勞をしてまゐりましたが、本藏は荒五郎氏の歿後は中村傳五郎氏、中村梅玉氏、などに賴んで居りました。この三人の本藏はみなそれぞれ特長がありまして、巧いと思ふところはそれぞれありましたが、私としては最初からの本藏ではあり、荒五郎氏がいつち附き合ひよかつたのです。荒五郎氏は本藏をたゞの主從とは考へずに、若狹之助を育てた乳母の心持で附き合つてゐると云つて居りました通り、なんとも云へぬ慈愛が双方の間に籠つて、演つて居ります私まで、なんと

なしに涙がこぼれるやうな温か味をおこしました。幕切れに笠を持つての引込みにも型ちがくづれず本藏として實に申分のない人だといまでも思つて居ります。

新町に生れました私が藤屋伊左衞門を演るといふことは、世間樣から御覽になると、甚だ演りいゝやうにお考へになりますが、廓の事情や通客のことを知りつくしてゐるだけに、かへつて演りにくいのです。紙衣を着ても、どこまでも若旦那であり御大盡である心持を忘れずに應揚な品位を保つて演ることを心掛けて居りますやうなわけで、またこの作の本文に昔はやりが迎へにくる、いまはやう〳〵薙刀のといふところがあります。こゝは多くの俳優は、槍をもち薙刀を使ふやうな科をしたものですが、これはたいへんな間違ひだと氣がつきまして、もうずつとの以前から私は他の俳優たちの科とは變へてやつて居ります。なぜにそれを變へたかと申しますと、このやりの解釋であります。やりは勿論揚屋の遣り手と槍とにかけてある言葉で、淨瑠璃には多く用ひられてある文章のあやですが、遣り手のやりと槍とにかけてあるところを、たゞ槍とだけ解釋してしまふのはかうした芝居としてはつり合はないことだと思つたのでございます。而しなんと云つても所作やうの芝居ですから寫實的に云つては辻つまの合はないところは、いくらもございますがひとつは錦繪のやうな舞臺面といふことが主になつて居りますだけに餘り理窟にはこだわらないやうに。といふつもりです。

讀者文藝募集

俳句　日比煤養氏選

◎題（大根、冬季雜吟）（句數無制限）

情歌　食滿南北氏選

◎題（前茶屋、世話もの）（歌數無制限）

川柳　馬場蹄二氏選

◎題（太夫、所作事）（句數無制限）

短歌　編輯部選

◎題（歌舞伎雜詠）（歌數無制限）

◎原稿締切（十一月十五日）

◎用紙宮制はがきに限ります。

◎入選者には粗賞を呈す進呈いたします。

◎應募原稿は　大阪市南區久左衞門町八番地　松竹合名社內　道頓堀編輯部宛

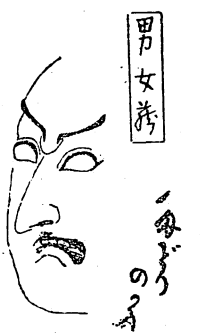
讀者倶樂部募集

讀者倶樂部は、松竹經營各座の老名優と言はず新名題と言はず、あるひは劍劇、新劇、新派のあらゆる俳優演劇を各自勝手に選んで、公開狀になり、批評になり御自由に投稿して頂きたいのです。

他誌並の口上で言へば紙面提供、さては新進劇評家の引立て策といふところですが私共はそんな面倒なことは言ひませぬ、ただ諸彥と共に歡談一夕、そのお積りでお平らにお平らに。……

定規

狂言見たまゝ（四百字詰、四枚以內）
劇評所感（四百字詰、四枚以內）
俳優への公開狀（四百字詰、四枚以內）
原稿締切（毎號十五日）



舞臺以外の中車

丸山耕

舞臺上のことは私以上の先輩が多數居られることですから、それは先輩に讓るとして此處には私の見た舞臺以外の中車老――と云つたやうなもので責任を果させて頂きます。

私いつも爾々思つて居るのですが、橋尾老の姿に接すると、宛ども慈母の懷ろに抱かれるやうな想ひがして、何とも云へぬ温かみ、何とも云へぬ嬉しさを感ずるのです――と云ふのが偶々私共が橋尾老の樂屋を訪問して、其時の狂言に就て何かと質問でもすることがありますと、橋尾老は丸で手を取つて敎へるやうに前後の模樣から故實其他を事細かに落ちもなく話して聽かせて呉れます、そうして夫れが殊に新聞社や雜誌社から何か書けと注文をされて居る場合など、どの位助けになるか分らないのです、橋尾老程の名優ともなると、動もすれば若輩を眼下に見るやうに成りたがるものですが、橋尾老に限つては全く夫れが無い、何時も一視同仁で、そうして何時も親切な好々爺です、斯ふして橋尾氏のことを書續けて居ながらも私の眼には樂屋で好物の蒲燒でも下物に飯を喰つて居る温厚圓滿な橋尾老の面影がまざ〳〵と見えるやうな氣がしてなりませぬ、要するに橋尾老を評すべき適當な言葉と云つたら『親切』の二字に盡きるでせう。

吉三郎の逸話

先月死んだ嵐吉三郎といふ人は風流人であつた、東京へ行くと、先づ書畫屋めぐりをしたり、銀座の夜見世をぶらついて古書畫の堀出し物をする事を樂みにしてゐた、さういふ趣味を持つてゐただけに、自分でも繪心があつた、たしか菅楯彥氏の門に入つてゐたかと思ふ。此春鴈治郎と一緒に上京した時に出た、新作狂言の九十九折に出る京都の山猫のやかたの表がかりなどは大谷氏に賴まれて吉三郎が自ら畫いて道具帳の參考にしたくらゐであつた、曾て井川洗厓の近親に天性芝居のまねの上手な子供があつたので、吉三郎が預かつて役者に仕立てるつもりで自分の幼名の李三郎を名乘らせた時などは、親身も及ばぬ世話をして力瘤を入れてゐたが、此子不幸にして夭折したので、吉三郎は洗厓以上に力落としをしてゐた。

廓文章雜記

鳥江銕也

浪華新町扇屋四郎兵衛の抱、夕霧は江戸の高尾、京の芳野と並び稱された一代の名妓であつた。その全盛言はん方なく客の招きに應じきれないので闇ひ女郎を置いて安の座敷へ出した。これが引船の濫觴であるといふ、延寶六年正月六日夕霧がかりそめの病から百方醫療をつくした效なく死去した時、浪華市中はその噂で持ち切つて居た。直ちに際物の追善劇として同年二月三日から大阪荒木與次兵衛座で『夕霧名殘の正月』と藝題して坂田藤十郎が大盡藤屋伊左衛門の傾城買の狂言大當り藤十郎は生涯に十八回も伊左衛門を演じた。夕霧は霧浪千壽であつた江戸役者の荒事に對して上方役者は傾城買のやつし事を得意とした。夕霧、伊左衛門はそうした上方藝の傳統を見るべき狂言である。

ついで夕霧歿後七年を經た伊左衛門の荒んだ境遇と薄命な娘おせきとを中心にして同じ作者で演ぜられた『夕霧七年忌』といふ狂言本が今日最も古い夕霧狂言として傳つてゐる。

今日よく舞臺に上演される夕霧伊左衛門は安永九年改作の『廓文章』である『濠標』に今も扇屋に夕霧の文を所藏すると傳へるのが名題の由つて來る所であらう江戸の舞臺に上つたのは文政十年九月市村座大切の『廓文章』で竹本と常盤津のかけ合、藤屋伊左衛門〔三津五郎〕夕ぎり〔粂三郎〕吉田屋喜左衛門〔團十郎〕女房おせん〔常世〕富本では天明四年正月森田座の『夕ぎり伊左衛門春夜障子梅』夕ぎり〔三桝德次郎〕伊左衛門〔幸四郎〕寛政七年正月都座『今樣冬簪廓水仙』夕ぎり〔のしほ〕伊左衛門〔菊之丞〕及び寛政十年三月桐座『道行栄種裳』（新夕ぎり）夕ぎり〔菊之丞〕伊左衛門〔宗十郎〕など、何れも今日清元に傳つて行はれてゐる、常盤津では嘉永五年十一月市村座『三羽鶴中吉田屋』夕ぎり〔しうか〕伊左衛門〔高助〕等であつた。

前號京屋十二姿の誤植訂正

——（○印は訂正）——

緒の切れしざうり片手に馳せ入れるお弓の瞳こそ忘れね。（ぬ）

片思ひの鮑（飽）は悲しわかうどが血潮盛りたる貝のさかづき

岩見重太郎と嗜眠性腦炎

―嵐吉三郎を追憶する―

野村治郎三郎

故嵐吉三郎氏

南地の重亭――現今のみやけ――の大廣間に、師走の宵をよそにして、華やかな宴が開かれてゐる、その末座に控へたのが嵐吉三郎、客といふは新聞記者の誰れ彼れ、盃のまはるにつれていづれも酔興横溢、中にも故人となつた高橋愛川氏は、吉三郎とは竹馬の友とあつて大はしやぎ、立つて岡島家の聲色を、身振りを交へて演ずるのが、そつくり其儘なので、藝妓どもから囃されて、愛川氏は得意、吉三郎は只にや〳〵と笑つてゐた。

私はそれに興味を覺えて、もつと〳〵と所望するのを、隣席の大森痴雪氏――その當時大阪朝日――ゐた――が、癖をさらけ出して氣の毒だよと止めた……

これは大正元年の歳の暮、嵐吉三郎が一等俳優に昇進の披露宴の光景であつた。

◇

あくれば宮島座の初春興行は、その披露とあつて『岩見重太郎』が出され、全くの適り役といふので好評、非常な人氣を湧せた。

この重太郎が、重亭の席上に、默つてにゝやかに笑つてゐる吉三郎に、また彷彿たるものであつた。

その印象は深く腦裏に刻まれて、未だに忘れないのである。

◇

天滿の八千代座に、この十月、松竹專屬歌舞伎が出演することになり、朔日の初日に私は見物に出掛けて、たま〳〵樂屋に入ると、誰かゞ『嵐吉さんは、腦が惡くて眠る病氣、しみん何とかに罹らはつたさうだす』と云つたのを聽いて驚いた――と同時に岩見重太郎の姿が腦裏に浮んだ。

重太郎のやうな吉三郎が嗜眠性腦炎に……

私は不思議な思ひをした。

◇

いつたいそれは事實であらうか、見舞かたゝ訪問して、確めやうとは思つたが、もし眞實であつたなら……氣の毒で奈何にもならぬ。

そこで翌二日の新聞に、私は職責上捨てゝおけぬので『嵐吉三郎嗜眠性腦炎に羅る』の記事を掲げながらも、まだ眞僞を疑つてゐたすると翌日の大阪朝報に和田博士の診察によつて、それと決定した旨が載せられて、事實は裏書された。

問もなく嵐吉三郎は、不歸の客となつたのである。

◇

嵐吉三郎――岩見重太郎――嗜眠性腦炎――造化の神の惡戯も、どこまで奇を衒ふものぞ……噫。

由良之助の師匠

温厚の性格を髣髴させる 訛ある「かまはん」の印象

鎌谷來水

嵐吉クンと私とは準友人（變な熟語だが）である。

冥途から形式的な生前辱知の諸君並みに扱つて呉れては居ないだらうと思ふ、と云ふのは私が新聞記者として接觸する其以前より親しくしてゐたからである……逢ふと私を「かーまはアん」と言ふ。

心易い人が私を「鎌はん」と通稱してゐるのは別に不思議ではないが、その「かまーはアん」が一種をもく訛るので、他の人の「鎌はん」「オイ君」と言つた印象より「なア、あんた」風の感じを享け、其處に此優の温厚な性格を髣髴させるものがあつて、未だに耳底に殘つてゐる。

こんな話は什うでも「かまはん」として……嵐吉クンに對する新らしい追憶は、一昨年の暮道頓堀の辨天座で歌舞伎研究會と銘打つて素人劇を催した際、振附をして貰らつた事である。

其時の狂言が「假名手本忠臣藏」で私は顔の長いと寸があるのが一德で座頭役の由良之助前日まで由良之助を演つてゐた嵐吉クンが一々手を採つて振附をして呉れたのであつた。「四段目」で判官から九寸五分を頂戴に及んでから、それを懐中に入れては胸へ閊へてお辭儀が演惡いから懐中へしまふやうな振をしてソツと春中に入れるものだとか、「七段目」で顔世からの手紙を讀む時、右手で卷取るには旨く演らぬと飛んだ蠟燭の芯卷きが出來ると……種々細かいコツを親切に教へられたのを非常に嬉しく思つた。

その上「城明渡し」の引込みで御馳走に嵐吉クンが舞臺へ出て三重を彈いて呉れたので私に取つては表へ花輪が山ほど積まれるよりもつと生きた華を飾つて貰らつた。

處が花道の七三でチャンと仕事を濟まし貫目を附けて靜々と引上げやう――イヤ汗だく

岡嶋家の部屋草履

新谷誠水

で遁足になる――すると、チャンチャカチャン〳〵と彈き出したので、私は面を喰つて燒糞で南瓜踊を踊つて這入つた。

是が反つて素人らしい愛嬌となつて大喝采を博した、嵐吉クンには眞面目な一面にこんな洒落氣を持つてゐた優である

舞臺に於ける忌憚なき嵐吉クンの感想としては、些か憂ひ顏と少し粘つた調子で幾分明快を缺き、梅雨期の煎餅のやうな感がないでもなかつた、夫れが禍ひして買冠らせる事が出來ず反つて割引して買はれてゐた其點を甚だ惜しむのである。其辯樂屋では新らしい頭腦の人であつた、舞臺だけは別天地と見へる

嵐吉クンのタイプは堂々たる大達者で、女形ござれ、立役、老ケ役、惡役と何でも消化せる重寶な俳優であつた、この優の傑作も澤山あるが私は「栗山大膳」の黑田右京佐を擧げ度い、それはオ氣走らないオットリとした人柄が配役の輪廓を描いてゐたからである。

嵐吉三郎の片倉小十郎

何の藝題だつたか、とんと忘れて了つたが

雁榜一座が、或る地方の劇場へかゝつた初日だつた、遇然行合した地で、成駒家に逢ふのが懷かしく、樂家を訪れると、舞臺は芝居の最中だつた六曲の屏風をめぐらした片隅に吉三郎クンがゐた、織物の裃の、下だけをぬいだ姿で、短い袴下の衣裳の下から、ラクダのぱつちが膝から下まるで出てゐる、頭は羽二重そのまゝといふ珍格好であつた、この不思議な姿の吉三郎クンを、いぶかりながら、話をしてゐる最中、成駒家は役を濟ましてゐつて來た。

「イヨウ妙な所で逢いまんな、わしの芝居を見に來てくれたのやナ」なぞと、例の八方美人式ニコヤカな笑を見せて衣裳をぬぐと、其處に、吉三郎が、キチンと膝に手を置いて待つてゐる。成駒家は、吉三郎を流し目で見ると同時に、困るデ、あすこで芝居をしたら、わしがテレルがな、君一人の芝居やないぜ」と、大分のお冠りである吉三郎は、平身低頭、成駒家に謝罪をして歸つてゐつた。

吉三郎程の役者を、衣裳もぬがさず待たし

てゐる成駒家の大きい事は勿論だが、成駒家をそれ程重じて芝居を大切がる吉三郎、其場には、然も、すぐ筆にしたがる新聞記者の私がゐる前で、あの謙讓な態度飽くまで一座の立者を重ずゝ美風、飾り氣のない吉三郎、あれから私は岡嶋家が非常に好きになつて了つた。

▽

中座の長三郎の部屋へ行くと麻雀の道具が飾つてあつた、まだ流行したこの時で長三郎はこれが自慢だつた「誰れにリーダーをして貰つてますか」と聞くと、意外にも、吉三郎がお師匠さんだ「ヘエあの岡嶋家が」私の驚きも無理でない、あの人にそんな新しい趣味があらふとは夢にも思はなかつたが、それは私の寡聞だつた東京の阪彦に次ぐ時計道樂で堀江の自宅には、各國の時計が藏されてゐる、ラヂオが出來た當時、第一番に放送局を訪れて、種々な研究をしたのも此人だ。

▽

歌舞伎研究何とかといふ名義で、私共が、道頓堀の辨天座で、忠臣藏の通しを演つた事がある、吉三郎、右團治、我童等がお師匠さんであるこの芝居は二十二日間、この人達が同じ忠臣藏を打つた後、そのまゝ繼承したもので、吉三郎は由良之助、右團治が平右衛門だつた。私の役が平右衛門で右團治氏に直接教を乞ふたので、吉三郎氏とは、何の交渉もなかつたが舞臺稽古から、初日二日、ぐうと附き通して呉れた人は、吉三郎氏一人だけだつた、初日の幕が明いて、K氏の由良之助が例の城明渡しの前になると、今迄黒衣を着て働いてゐてくれた岡嶋家が、急に、服裝を更めて、紋付姿となつて了つた、ハテどうするのかと思つてゐると、急に三味線をかゝえて、下手から舞臺へ現れるなり、例の三重を、眞面目な顔で彈き初める、見物は豫期せない吉三郎の出現にワツと湧き返つて拍手は雷の樣だつた、

▽

この拍手に驚いたのはK氏の由良之助だ、K氏も豫期しない吉三郎の出現に、より多く由良之助の演出に、光輝を添えた事である、見物席には、成駒家を初め、大阪歌舞伎の諸星、雲の如くの見物である、吉三郎のこの突然の應援は、私等への義理、そんな小さな問題では、とうてい出來ない仕事、私等の研究劇に、心から盡して呉れた眞心にほかならない、現金の樣だが、一層この人が好きになつた所以である。

▽

嵐吉三郎の梅王丸

私の平右衛門は失敗した、初日にスリッパを穿いたまゝ、舞臺へ出て了つた、それは後見が間違へて、平右衛門の出に持つて來て呉れた刀が、さめ鞘だつた、銅輪の刀ととりかへにやつてゐる間に出がかゝつたのであつた周章てふためいた私は、ついスリッパのまゝ一力の御座敷へ上つて了つた、芝居が濟んで部屋へ戻ると、鏡臺前に新しい部屋草履が置

嵐吉三郎さんのこと

食滿南北

てあつた、吉三郎氏があの愛嬌ある顏を一層ニコ〳〵しながら「明日からこれをはきなはれ、これなら重いから、いくら周章てゝも、きつとぬぐ氣になりまず」皮表の草履には、大きく岡嶋家と記した燒印が押されてある、その草履は、私の平右衛門の思出として私の家に殘つてゐるが、それが、岡嶋家の唯一の思出の種ともなつたわけである。

實際かうした重寶なお役者をむざ〳〵殺すのは、何より惜しいと思ひます。

故人は頗る好人物でした、繪もちよいと描ける、地方巡業などに出ると、日記帳を費入にして、しかもそれに川柳なんかをかいてあつたものです、それが兎も角堂に入つたものでした。

それに拙し位の英語も解する事が出來たのです、松竹の事をよく『パイン、バンブー、コンバニー』なんと云つて笑はしてゐた事などもありました。

食物にも中々通でした、よく鶴屋の鯛のあたまを喰ひに行つたり、生野の鰻を旨がつてゐました。

舞臺も本當に重寶でした。女形も出來れば立役、敵役、老役等何んでも來いといつた風でした。

兎に角旦那風の人で、あまり藝人といつた風のなかつた、むつかしくいふと人格者でした、

蜘蛛と雷とが何より嫌ひでした。舞臺でも蜘蛛が出て來たり、折からの雷雨といふ事になるとすつかり顏色をかへてしまひます、時には押入へは入つてがタ〳〵ふるへてゐるといふ風でした。

延若氏と長らく二人で打つてまはつてゐました、其間にすつかり腕をあげてしまつたわけです。

雀三郎から吉三郎になつたのもこの一行から離れて歸つて來た時でした。

李冠といふ俳號が自分ながら非常に好きでした「李下に冠をたゞさず」といふのですと誰に逢ふても話してゐました、それだけに李冠といふ字を間違へると何よりも腹を立てたものです、其處等にこの人らしい色彩がカツキリ出てゐると思ひます。

子供を二人までも役者をやめさしたのはこの人の一見識だと思ひます。

堀江のしまふた屋のやうな家の奥まつた處で型のかはつた時計をなぶりながら

「ハイ〳〵」

と何事も反對しなかつた好人物の吉三郎さんにはもう會へないかと思ふとちよつと淋み

しい氣がします。

「役者氣質」さうしたものがおひ〳〵に薄らいで行く現今に、最尊い人であつた事を再書添へて置ます。

廉直の人

四海波濱右衞門

嵐吉三郎は、古今大家の書を獵り、自習なれど漢學の素養もあり、歌舞伎役者としては稀にみる達書家であつた。

賢い、温和しい、非常に廉直な人である。

役を受取るにしても、執着なく、掛引なく蟬りとか臨機應變とかいふものはみじんもなく。

『八釜しくいつたつて仕方がない』

と、多くの場合、松竹からもつていつた役を其まゝ受け容れる人。あてられた役を能ふ限りつとめねばならぬと平素から心がけてゐる役者であつた。

さうして、非常特別の場合の外は、書面、又は、電話にて何事でも相談し、尠くも、奥役に手數をかけぬ點では道頓堀の第一人者として擧げたい。

しかし、いけないといひ出したら金輪際、煽でにのらず、賴めど肯かず、利害得失は彼れ自ら解してゐながら頑固に押し通して挺子でも動かぬ異例もあつた。

「給料は、白井興行主の御眼鏡にかなつた丈け頂けばいゝ。斷じて俳優が强要すべきものでない』

といつてゐた。

嵐吉三郎は、徹頭徹尾、廉直な人であつた。

市川中車の光秀

現在の秀光は、武智光秀の歌舞伎俳優で、中車は、除外ていする俳優は、出來ぬ絶対に、三宅周太郎氏といなれば唱へ失敗に、時同じくして、再び、前眼の家事好び、再び、出現する、極めて、難付け、至高の、秀光あるべき。

―中座十一月狂言―

喫煙室

高橋蓼雨

◇

芝居シーズンになると大向ふが賑はふ。

中座の初日、例の初日會の御常連二階の正面の後ろへ機關砲を据えて、最負役者の出這入りや、こゝといふ正念場には覗ひすまして一齊射撃。

初日には、ひとりや二人ではこたへませんから、七十餘名が束になつて喚きます』

『この人等は、中國の毛利元就の末裔らしいぞ』

◇

心中二枚繪草紙。

卯三郎の介右衛門が抽斗へなほした講金を、延若の善次郎がとりだして、神棚のお神酒徳利の中へ入れる。

とは知らで、鴈治郎の市郎右衛門が酒をのむべく茶椀へうつず。

中から金と酒。

『お金もよいが酒もほしいな』

下手の猛々が咽喉をゴクン。

◇

天滿八千代座、朝顔日記の宿屋。

我童の深雪が、右團次の駒澤次郎左衛門の聲に聞おぼへあるといふ思入れ。

正面のオールバックが。

『それが即ち、ハズさんで』

かぶりつきから。

『わかつてる』と、厭がらせ。

それから、それへと努鳴り散らす。

三階の一隅から。

『默れ四夫ッ』

の罵聲に、さしもの難局も直ちに收拾。

來る逐鹿戰には、この人を日比谷へ送つて議長に擧げたい。

◇

名古屋の新守座にて、玉藻前曦の袂三段目の、采女之助を演てかへつた、坂東壽三郎の門人ゆたかの許へ、興行中にリングまで取交はした舞妓から。

とても叶はぬ戀ゆへに、覺悟はきはめて居りました……と、大阪中を艶殺しさうな文。

この舞妓は、清水のほとりにて蜡龍の鍬形を肌に添へてあつた捨て兒。

◇

名古屋の新守座へゆく可き人が岡崎近くまで乘越した。

送り還されるときには居眠つて一の宮まで又乘越して興覺顏。

今度は乘越さぬやう名古屋終點の電車にのつて無事息災に到着した三十男がある。

親のあるうちに、一遍お醫者はんに診せなはれや。

◇

澤田正二郎、浪花座の樂屋にて他所ゆき顏。

『星のあとに星なしとまでいはれた明治政史中の怪傑星亭に扮すると、四十歳以上の人は實物を知つてゐるから氣が張つて勞かれ、夜更ての最負廻りは實に辛らい』

實は、潜水艇の如く新地へ出沒オット、このこと、久松喜世子へ内證。

◇

病後の豊竹古靱太夫、半歳ぶりに出勤して猿廻はしを語り汗びつしより。

『澁紙を通ほして肩衣までこの通

りだす』

口のへらないのが。

『あてら、まだ、床へあがらぬ先から汗が出ます』

この太夫は冷の字を忘れてゐる

◇

六世、嵐吉三郎、突如、喈眠性腸炎に罹り、僅々七日の煩ひにて無常の嵐に散り逝く。

訃音に接した門人の、マキノ映畫スター岡嶋艷子から弔電。

オジョウサマノ、ゴセイキョウカナシミマス。

受附子、癖かしさうに。

『主人が死んだと報らしたのにお嬢さまとは、テ面妖な』

やがて、それは、御師匠さまの誤記と判かり、漫ろに悲しさの増すなかに、はじめて笑ひ聲。

◇

あたら弔客の多きなかに、片岡當之助は愛妻携え頗る家庭圓満の二ケ伴れにて、嵐家の總本山へ前後四回參拜して珠數爪繰る。

元來、この夫婦は、吉凶は人一倍よくつとめる方ではあるが、これには聊か譯がある。

まだ、故人の生存中に、三ツ吉の定紋つきし鏡臺を譲りうけたからつて。

其麼ことをいふ勿れ。

『……』、ナ、御合點か。

◇

故人は雷さんを大嫌ひ。

先年、ある宴席にてテーブルスピーチをやる可く椅子を離れた刹那にゴロ〳〵ピカ〳〵と雷鳴。

目を白黒させカップの水を乾して咳一咳。

されど、天ます〳〵怒りて瀧々段々家も人も八ツ裂になりさうな物凄い音。

いまは生きた心地せず耳の下まで蒼うしてテーブルの下へ四ツ這ひ。

『私は……あの……音が怖はいので……』

モう涙聲。

◇

大正十一年の四月、横濱の横濱座へ出勤中、妹背山の御殿を開演中に漏電にて出火。

吉三郎、木綿荒格子の長袴、からげ袋附のかづらの上から、豆絞りの鉢巻じめ、腰へ一舛徳利をブラ下げし鱶七の姿の儘で、頭取が諌めるのも諾かず、裏木戸から外へ出て、小手を翳して燃えさかる劇場をうち眺め。

『こりや、エライことになつた哩』

◇

大正十三年三月、九州へ巡業して、門人をつれて唐津から船を借切つて七ツ釜へ穴めぐりした。

凪の海原に、急に黒雲のゆきかひはげしくなり、加之、雨さへ加はつて船は木の葉の如く搖れる。

お念佛を唱へたり、金毘羅さんを拜んだりしてゐるところへ、咫尺も辨ぜぬ怒濤の中から三間にあまる大鱶があらはれて船の横腹をつく。

『哂木綿はないかッ』

『褌を投げてくれッ』

船頭は必死に叫ぶが、みんな猿股ばかり。

弟子の吉五郎、かなり古びた越中褌をはづして波へ流すと果して鱶は怖れて逃げた。

この功により羽二重の紋服を拜領。

吉五郎、恩師吉三郎の柩の前にて相弟子と怖ろしかりし遭難を語りつゝ豌豆のやうな涙をぽろり。

◇ ◇ ◇

浪花座十一月興行上演
大阪朝日新聞連載中

砂繪呪縛

土師清二氏原作

芝居物語

奥田美代一

1　淺草寺境内額堂

淺草寺の境内は今日も賑はつてゐた。納額を飾る額堂と並んで甘酒屋の店が頗りに客を呼んでゐる。銀杏の大樹には注連を張り繪馬がぶらさがつてゐる。砂繪師藤兵衛は平地に坐つて砂繪を描いてゐるのを大勢の人達が取圍んで見物してゐた。

『さあ、これからが日蓮上人の逆さ題目ぢゃ』

と見物より錢を請求したが誰一人として投げるものもなく立去つたので藤兵衛は口小言を言ひつゝ酒を飲みに出掛けた。新聞の挿繪でお馴染の柳影組の鳥羽勘藏が僞金造りの黒阿彌を伴つて出て來た。黒阿彌は天目黨の人達を大層恐れてびく〳〵してゐた。柳影といふ親柱があつての事で、將軍家のお手許が不如意だといふのを名目に天下の通用金へ銅をつぎ込んで數を殖した黒阿彌は天目黨にねらはれる迄もなく逆磔は免かれない罪人である。それを勘藏や勘定奉行の萩原殿の力で助つてゐるのだ。二人はこれから竹屋の渡しを渡つて遊びにゆくのだ。二人の立去つた後へ天目黨の勝浦孫之亟が編笠を被つて出て來た。六本木の米吉が子分の卯七を連れて出て來た。今日は燈明供養で大層賑やかだとか、御姿は一寸八分の觀音樣でも御利益は大したものだといつた話が茶店の娘と交されてゐたが卯七を先にやつて人氣のないのを見すませた米吉は、今の世の中が無茶苦茶で手先仲間で隼といはれた氷吉も柳澤天下でミス〳〵僞金造りを大手を振つて歩いてゐるのを見ても手がつけられないとは困つたことだと歎く。四五日前も麻布の法妙寺の門前で葬人足が殺されてゐたのに檢死もおりないで取片づけられて失

つた。それに引かへ犬が一匹死んでゐたら名主から町役人惣掛りの立合ひで殺したものは輕くて遠島、重ければ死罪、いまに手先は止めて犬小屋の見張人でもなりませうかと、へらず口を叩いた。孫之亟はそれをなだめて吾等天目黨は水府公を頼み濁り切つた德川を浚つて見せると言明した。米吉は大いに喜んで去つて行く。そこへ間部詮房の娘露路は侍女の千浪や腰元達と共にやつて來た。千浪は孫之亟の妹であつた。露路はかねてから孫之亟を慕ふてゐた。

『よい所であなた樣に……』

と濡模樣になるのだ。それで明夜染の井の下屋敷で庭に虫を放つて虫聞の催しをするのでと孫之亟を招待する。琴の名手をお聞かせ下されと孫之亟も行く約束をする。露路はそれを樂しみに心をあとに立去る。湼盤門のお酉が雇婆のお島を連れて出て來る。

『婆や雷門ですれ違つたお侍は奇麗だつたね』

『あなたのやうにいつまでも眼の底へ入れておきませんよ』

と二人は蓮葉な男の品さだめを騷き合つてゐる。お酉は孫之亟をじつと見て立止つた。そしてお島を先にやつて失ふ。

『あのお火を一寸……』

お酉は孫之亟の傍に近寄つた。麻布の者で父が此の額堂へ繪馬をあげたと聞き一目見たいと思ふが文字が讀めないのでと言ひ寄つた。孫之亟は眞に思つて探したが解らない。お酉はそのお禮が言ひたいと孫之亟の邸のありかを尋ねた。砂繪師はいつか戻つて來て雪女郎を描いてゐた。その襟足の三本のおくれ毛がよく出來てゐるといふて孫之亟は何程かの鳥目を遣つた。そこへ卯七が出て來て何か囁いたので孫之亟は急いで立去つた。

お酉は藤兵衛にその雪女郎の顏を今のお侍の顏にして自分の身體へ靑刺をしてくれと頼んだ砂繪を書く時に手から落して行く呼吸とほりもの師が針をおろしてゆく呼吸と似てゐる筈だから宅へ來てくれと頼んだ。芝山內の湼槃門を左へ曲つた一軒家だと敎へた。そこへお島婆が歸つて來た。二人が連れ立つて去る後から米吉が出て來た。

『播磨屋の娘にさゝして葬つた金かんざしはあれだ。まさか彼女が墓發とは』

と考へて砂繪師にお酉の住居を聞いた。

2　芝山內拔道の夜

樹立が茂つてゐる。砂繪師の藤兵衛が酒に醉つて千鳥足で出て來た。お酉の家へ行つた歸り道である。

『……さあ雪女郎の下繪をつけておくれよと、帶を解いてあの眞白い肌を……、あゝ堪らない』

六本木の米吉がぬつと現れた。お酉の家の樣子を聞いた。女と婆、外に五十ばかりの老人は居ないかと聞いたが居らないといふので忽ち姿を隱した。黑阿彌が出て來た。それを追つて勝浦孫之亟が三尺ばかりの棒で黑阿彌を討つた。黑阿彌は兩刄の合口を振つた。勝浦は素早くその手首を叩いて短刀を落さした。そして當身を喰はして縛つた。藤兵衛はふるへてゐた。その背中へ黑阿彌を背負はせた。柳影組の侍が孫之亟に斬つてかゝるのを大刀を鞘ぐるみ拔上げて鍔ではつしと受とめた。

『どぜうか。柳の下に巢をくふ　じやう奴』

柳影組の手道具黑阿彌は天目黨の勝浦孫之亟が棒に延ばして連れてゆくぞ』

柳影組の侍は覺えておれと言ひ乍ら逃げて行つた。そこへ勝浦の臣が町駕を連れて來た。勝浦が活を入れると黑阿彌が眼をひらいた。年寄りだ。いたはれ。然し駕の中で弱音をあげる程

黒阿彌は老耄してゐねえぜとせゝら笑ふのを孫之亟は引かれ者の小唄だと黒い袋で頭から包んて黒阿彌を駕へ入れた。駕が逸散に走つたあとへ柳影組の者が多勢出て來た。勝浦は大いに奮闘をする。

3　白山追分附近

秋草が一面に生ひ茂つてゐる。すゝきの尾が風に動く。三日月が美しうかゝつて見える。虫の聲がやさしく聞える。間部家の定紋のついた箱提灯を先に、鋲打の乗物が出て來た。侍女の千浪や附添ひの女中が取圍み老けた用人がついてゐるのを見れば乗物の中は詮房の娘露路とうなづかれる。邸にもう間もない處だ。そこへばら〳〵と黒き影が現れた。神明の紋吉とその子分、それに森尾重四郎と侍達である。

『斬るとも刺すとも申さない。いゝ處へお供をするために迎へに來たのだ』

重四郎の聲に千浪は駕へぴつたりと附添つて懐剣の柄へ手をかけた。暫くは所謂亂闘がつゞく。とゞの末重四郎が千浪を握つてゐる間に紋吉が猿ぐつわをはめて露路を連れて逃げて失つた。

『お嬢様をさらつたのは柳影組だ。いづれ挨拶があらうからその時の返答次第で娘御は返して進ぜる』

と重四郎は言ひおいて立ち去つた。千浪は

『お姫様。〳〵』

と呼んだがばつたりと倒れた。奪ひ返せないまでもせめて先途を見定めてと思ひ直して立上るゝ月が雲にかくれた。

そこへ勝浦孫之亟が現れた。

『兄上、露路様を柳影組に奪取られました』

孫之亟は怒つた。千浪は吉岡流の小太刀の遣ひ手ではなかつたが孫之亟は矢庭に千浪に斬りかけた。千浪は見事短刀で受けた。生死の境を踏越えたものゝ心眼の開けではあるが

河合武雄の涅槃門の酉

それはもう遅かつた。千浪を首にして間部殿に謝罪をすると兄は言つた。千浪も覺悟をした。既に……といふ時間部詮房がそれを止めた。申譯がないといふ兄妹をゆるして妹を貰ふが異存はないかと間部は聞いた。將軍家の大奥に女中として千浪に上つて貰ひたい。天下の爲、將軍家の爲に隱密の役目を命じた、將軍家の御跡目について大奥は紀州に傾いてゐるが正當なる御世嗣は甲州樣だ。それをかゝせに自己の榮達榮躍を企てゝゐるものがあるとすれば捨てゝおけない。男禁制の大奥、そこで女の千浪に大命は降つた千浪はきつと引受けた。勝浦は姫君はきつと拘者がといふのを間部は

『いや、天目黨はまづ天下のおんためを』

と言ふ。虫の音がぴつたりと止んだと思ふとそこには柳影組の侍が浦勝に斬りかゝつた。勝浦は見事に斬り倒した。月光が四邊を美しく照らした。

4　今戸黑阿彌宅

露路は湯上りらしく床の間の前の鏡臺に對つて化粧してゐた。お酉はいま湯から上つて來た二人は姉妹のやうに仲がよい。露路が夢うつゝに勝浦樣〳〵と呼ぶのをお酉は不審に思つてゐた。それが心に思ふ殿御と知つて

『大名のお娘御とて油斷がならぬ』

と笑つた。雪と雪とではお互ひの雪の淨さ美しさが見えないが、泥には雪の淸さが分る。私は命にかけてあなたを守つて進じますよ。とお酉は露路に言つた。二人はまた母のないことで共鳴した。そしてどうしても他人でないやうな氣がするとお酉は露路を可愛く思つた。そこへお鳥が登山の御前が金波樓から迎へを寄越したとお酉をよんだ。

すぐに歸つてくるとお酉は出て行つた。その後へ森尾重四郎は鳥羽勘藏や辻岡角彌と、庭先からやつて來た。黑阿彌の家だから暗くていけないがこつた普請らしいと、辻岡が見廻すのを重四郎はつまらなげに見てゐた、お鳥が出て來た。お酉の留守を幸ひ露路をこゝへ出してくれと勘藏が言ふ。露路はおびえながら出て來た。黑阿彌の身替りには美し過ぎると笑つた。露路の父間部の差金で天目黨がさらつてゐる黑阿彌を返してくれ。さすれば娘御を返やそうと談判したが間部は黑阿彌の事は知らないと言つて來た。お互にこうなれば腕づくで取返し合ひをすることゝなつた。今夜は勝浦孫之亟が先立でくるらしい。と聞いて露路は一道の光明を見て喜ぶと共に男の身の上に對する不安に胸をいためた。重四郎はそうした掛合にも何の興味ももつてゐなかつた。彼は柳影組についても何の興味も持たない男である。勘藏は露路に父に宛てる手紙を書いてくれといつた。そこへ紋吉が六本木の米吉の手引で勝浦がやつて來ることを報せて來た。露路は秘密の部屋へ連れて行かれて失ふ。勘藏は此家は黑阿彌一流のからくりで仕掛けがしてあるから幾人來やうと皆殺しだ。一應見ておけと辻岡をつれて去つた。重四郎はごろりと轉がつた。紋吉がいよ〳〵敵の來たことを報せて來た。重四郎は紋吉を呼止めて娘の行衛を聞いた。紋吉がそれどころぢやないと駈け出すと虫の聲が頓りにして鐘が鳴つた。天目黨の人々が入り込んで來て亂闘が始つた。

5　陷穽の內部

『勝浦樣』

『勝浦の旦那』

と喧い中に目明し米吉の聲が聞える。ほの暗い陷穽の底では勝浦らしい黑い影がうごく。劍戟の音がする。あとは死のやうな靜かさだ。ぱつと明りがさす。陷穽の蓋をあけて鳥羽勘藏が一刻たてば水穽になる。いくら達人でも死ぬより

仕方がない。貴公の命と黒阿彌と取替へやう、と呼びかける。間部へそのよし手紙を書けといふ。勝浦は今更命に未練はもたないと叫ぶ。そして露路殿は無事かと一言だけ聞く。無事だその露路を添へてもよい黒阿彌と取かへをしやうといふ聲の終らない中にエイッと斬込む聲、チヤリンと劔の擊ち合つた音、陷穽の蓋がたんと閉まる。再び暗黑だ。すると何處かで錠前をきしる音がする。手觸の明りがさつと射してお酉が現はれる。敵ぢやない、味方だといつて勝浦の手をかつて細梯子を降りて來る。

『柳影組だの天目黨だの、そんなものは今の私には何のかゝり合もない。妾は女子、一人の女子、そして貴方は殿御、たゞそれだけです』

とて救ひ出そうとする。では助けて貰ふぞ。と細枳子に掛け寄るのをとめて、露路の隱してある處が解つてあるかと問ふ。その口の下から此處から救ひ出そうとする妾の志を受けてくれとすがり寄つた。救ひ出すかはりにあなたの心が欲しいとお酉は孫之亟を見つめた。淺草で逢つてから孫之亟の姿なり聲なりがお酉には忘れることが出來なかつた。お酉はすつかり初心な女になつてゐた。その前には天目黨と柳影組との爭ひも、何もない。たゞ勝浦から可愛い女と一言いつて貰ひたいのみである。

『言語同斷だ』

『えゝ、そりや、余りだ〳〵』

お酉ははては泣き臥した。その途端お酉の頭髮から金のかんざしが落ちた。勝浦はきつと見た。そして簪を擲つて吐鳴つた。

『よるな、穢らはしいわ』

そこへ露路が勝浦を見つけて降りて來た。

『おゝ露路殿』『勝浦樣』

露路は泣きすがつた。勝浦はその無事な姿を見て喜んだ。さて二人で逃れやうと、お酉に案内を頼むと『いやです』と言下にお酉は斷つた今日までの澤山な男は皆お酉に魂まで掴まれて泣いたり嬉しがつたりしたのに勝浦ばかりは情知らずであつた。しかしそれも露路といふ女があるためだといふので、お酉は露路と爭つても勝浦を我が者にするといふ。それでも聞かない勝浦に種ケ島を見せてこれ一發で陷穽が水だとも言つた。勝浦はこの女こそ正保寺の墓發きの餘類だと言つたが之にはお酉も驚いた。然し露路はお酉こそ命の親だといふので、恩を仇では返されないとて孫之亟の小刀であはや自殺しやうとしたお酉は慌てゝこれを止めた。

妾が惡うございました。いま上には誰も居りませんから早くお孃樣を助けてあげて下さいませ』『かたじけない』

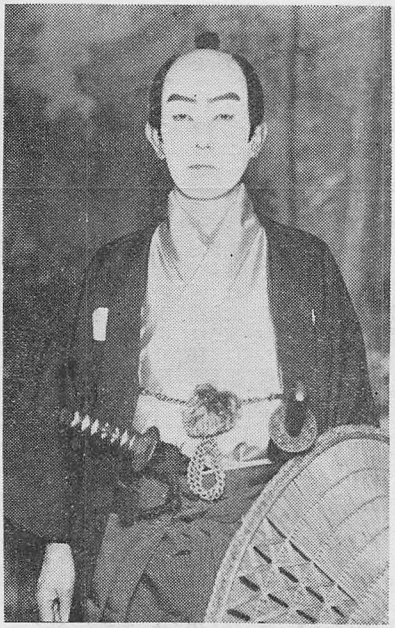
と勝浦孫之亟は露路を連れて上つてゆく、

『勝浦樣、お孃樣のことはお願ひいたします』

とお酉は悲痛な聲で呼んだ。

『お姉樣』

といふ露路の聲も悲しげに幕は降りた。



伊井蓉峰の勝浦孫之亟

一口の狂言の話

砂繪呪縛について

喜多村緑郎

『砂繪呪縛』の上演　わたしは、脚色されたものを見てはじめて知つた。そしてわたしは、その脚本を讀んで、あまりに蕪雜で統一のとれてゐないのに驚かされた。もつともそれが、目下新聞連載中のもので、映畫と違ひ、時間を考慮に入れ、原作から遠ざからず、そのうちで結末をつけなければならない。

脚色者の苦哀は充分推察した。ましてこれを脚色した時は、今ほど事件が展開してゐないので、涅槃門のお酉と勝浦孫之亟との戀を中心にして、露路を取返すまでをまとめたものだつた。そして原作では、砂繪師がお酉の注文で雪女郎の刺青を彫ると、その後、書く砂繪の顔がみんなお酉の顔になるといふ面白味があるが、舞臺では、その演出が不可能なので、お酉が砂繪師に、雪女郎を勝浦の顔にして彫らせることにした。ありやうは、お酉が勝浦への戀を濃く見せるためだつた。

要するに『砂繪呪縛』の上演は、興行者側からまわつた譯で、原作者土師氏に對して好い意味に表はれないのを、まことに濟まないと思つてゐる。それだけにわれ〳〵も苦痛を感じてゐる。

角座新聲劇

行友李風氏作伊達騷動實記『原田甲斐』五幕の中田正造が扮する原田甲斐

築地の待合柏家の一室のこと

こゝに流連の三人組、とは郵船會社の若手の面々、名を記せば田崎恒男、岩代恭一郎、野尻喜十郎達が昨夜の醉ひが今さめて……と言つた態たらく、午前十一時と言ふ早さに、また候、迎ひ酒を煽つて女中を困らせて居る。

隣座敷の騒々しい角力甚句を聞かされてゐるでは興がない。茲でも、ひとつ、わツ、と、改めて陽氣に亂痴氣騒ぎをおツぱじめたいにも、女がないので、まことに、心細くて、隣の飲めや唄へや、が、癪に障る、癇立てゝ。

もつともお鯉を先刻から呼びに遣つてあるのだが、まだ艶やかな姿は見せぬ——その頃新橋で名妓の肩書をしなやかな優肩に背負つて居た藝妓がお鯉で。

一力士は荒岩、藝妓はお鯉——とは三人組の中の野尻君の口癖で、會社で事務を執つてゐる時ですら、調子が乘ると鼻唄に交ぜて唄つてゐた。

だから、癖れをきらして待つほどに、待つほどに、さて、手を鳴らしたほどでは池の鯉ぢやあるめえし、仲々以つて現れない。待焦れて他愛なくなつてゐると、野尻君の件の唄に謳はれたお角力の荒岩龜之助の方が湯上りの艶々した林檎のやうな頰を火照らして通りかゝつたのである。好敵ござんなれーだ。見逃しはせぬ、ま、一盃……と、三人組パラパラッと取圍んで喚き

立てたが、荒岩は何處やらに浮かぬ色を匂はせて沈みかちであつたのだ。

「今日の常陸山との取組が、それほど氣にかゝるかね？」

野尻君、思はず恁う尋ねて見ます。

今日は一月場所の六日目、荒岩と常陸山の取組に相撲狂ひの間は釜を沸立たせる大評判だが相手は梅ケ谷と一緒にこの度、東西の新横綱——かてゝ、加へて初日から今日まで土つかず、然れども荒岩にとればも一つ、だが、と言う接ぎ詞を挾まずに居られぬ。勝つも負けるも時の運、運賦天賦と心を落著ければ、たゞ、摩利支天を念じるより方法がなかつたのである。

「おそくなりました」

婀娜ッぽい聲に振返る。襖に洩れた白い襟頸、島田髷の水ッぽさ、照近江のお鯉、待ちかねたお鯉どの、こひには人の死なぬものかは……

「岩永さん」とお鯉、「俺の名は岩代だ」岩代君たるものをウロ覺えされて御立腹だ。「ま、失禮。岩永か岩代か、どつちにしても芝居に出る赤面の敵役の名と思つたのさ」と其處は矢張り市村哥吉の女房だつたこともある。芝居氣たツぷりお里があらはれる。「それより關取、一盃頂きましやう」お鯉荒岩を顧みてニツコリ……やゝ馴々しい場面ではある。ところで、常陸山は兼々からこのお鯉に執心の模樣であることは、況んや野尻君の會社の重役連が一つに纏めやうと奔走してゐることが、實際にも運動されて居たのであるが。

「あたしやね」

野尻君が醉ひついでにそんな話の種を蒔散らすのでお鯉もちよつとひらき直る。「一旦藝妓を止めて人妻になつて、そして失敗つた揚句の女ですが、女の誠はもつて居る氣！が、金づくぢや駄目、相手が日の下開山の横綱だつて、強面で出られちや眞ッ平御免……」

今日の本場所、若しも相手の常陸山が勝てば郵船會社の社長は褒美に何んな事でも叶へるとそこで相手の常陸山はどうやらお鯉を望んでゐる、さすれば荒岩龜之助には今日の角力が運試し——「まあ、大事の場合だ、はぐらかさずに聞いてくれ」——荒岩は嘘は吐かぬ、お鯉さんは好きだ、惚れてゐる。今日の角力は一生を賭ける、負けりや本望だ。鄕里へ歸つて木樵に還る。「嬉しい、關取……」お鯉はその意氣に感じる。涙を耐へて歡んだ。男の意氣、かくありたい。

「蒼蠅いッ、貴樣等は默つとれ」

廊下から濁聲、床踏鳴らして瀧澤堅五が、腰に絡みつく藝妓の二三、心配さうに引留めるのをブン廻して、座敷へ仁王立ちに衝ッ立つのを、呆れて仰ぎ所謂豪傑肌、愛國同志會副會長とな申し侍る？荒岩を呼びに使ひを立てた狸八が、その狸八を呼び戻しに來させた谷の音關が、こゝの座敷で木伊乃になつて居やあがる！それが癪に又さはる。

「お、荒岩、貴樣は何故俺の座敷へ來んのか」

おい——！と呼んで抱着かうとした、身を替す。

醉つてゐるから助からない。空を摑んでどさり！小氣味よい地響たてゝ仁王が倒れたンだからも一倍、枷をかけて御腹立ち、荒岩は何の怨みで俺を投げた！理由きかう……だ。どうも醉たンぼは恁うなるから瀧澤堅五に限らず誰にしたつて嫌なもの。「理由を言はんければ歸らん、斷じて歸らん。歸つて耐るか」と大の字になつたので、折角の座敷も白ちやけた。さるにても無粹さまなる哉、愛國同志會副會長殿——性分として默つてゐられない、利かぬ氣、負けず魂のお鯉。

「關取を是非ともと、再三再四のお使だのに、私のやうな者が附き纏うて離れないから御迷惑なすつたのです。元はと言へば惡者は私——ね

え、あの、あなた」

と瀧澤を捉へる。女に捉へられて見れば滿更憂國の壯士と雖も惡くなかろう相手は藝妓。紅唇ひらいて問はれるまゝに愛國同志會たるものの性質主意長廣舌を以つて一席、辯ぢあげたる……何とやら、だ。最中に女中が周章と來る。荒岩へ同向院の場所から迎ひに弟子が來たと申上げます。お鯉と夜を約して、荒岩は土俵入、夕方までの命。三人組が背後から力瘤を握つて此の家を送出したのである。これを眺めては谷の音も瀧澤の座敷で安如と坐つては居られないが、泥たんぼの醉どれ豪傑。荒岩に巧く逸らされた矢先でムシャクシャする、そのムカ腹を今度は谷の音に向けて無理難題である。行かせじと管を捲いて絡めてしまふ。傍の眼のお鯉が又、見るに見兼ねた。

「ねえ、瀧澤の旦那、谷關を遣つて下さいよ」

「そんなら貴公。美事俺の主意を立てると言うのか」

腹に一物……どころか、底の底まで算段だらけだ。急に谷の音をお鯉の乞ふまゝに手離した。手離されたが、さて、今までの無理と打つて變つた易々諾々で、緩められて見れば、今度は又谷の音にお鯉の身が案じられる。

「土俵は武士の戰場同然。私の事なんか案じずに……」お鯉の辭は優しいうちにも凛と響く、それを聞いて少しは心が休まる。で、挨拶もそこ〳〵、彼も土俵入を急いだのである。と、瀧澤は座敷に居殘る幇間狸八も追ひ出すので「では妾も」と續いて起ち上つたお鯉の裾を押へて「おい、待て！」瀧澤のこの顏は何うして立てる、と又しても小蒼蠅い言ひ懸りです。お鯉にしても少々虫に障つて居る折からだつたので鮮かな所をキメつけた。さあ、野暮の骨頂先生、怒つたの怒らないのつて。

吼えるやうな叫號、部下を呼ぶ。忽ちにして蝟集する同志會々員なるもの數、五人。「なんです先生！」ヌッと髭面を陣列して座敷を覗くとこれ又意外、奇麗首としんねこには非ざるか？……と見た。しんねこどころか先生たるもの叫んで曰く「新橋中引廻してこの女を川の中へ抛込んでしまへ」プン〳〵逆鱗して盤を蹴つて瀧澤堅五なる憂國の志士去る。一同、呆れてしまつた。が、先生の呟は背かれぬ。虎の威を借る狐、寄つて蝟つてお鯉の細腕捩ぢ上げやうとすると、通りかゝつた。十德奏、兒玉將軍であつた。意外千萬な留め男、この宗匠頭巾のおひぼれ老爺、「まあ、待ちなさいもあるものか、血氣旺んな、一方は壯士連である。兒玉將軍とは氣がつかない。お鯉の手を皺だらけの手にとつて俤若無人、宗匠頭巾は座敷を出て行かうとするではないか。と、瀧澤が立戻つて來て驚いたや、や、やー閣下。

始めて兒玉將軍と聞いて、勢、どこへやら、立竦んだのは同志會々員たる壯士の一同、頼みとする吾等が瀧澤先生が低頭平身だから、こつちは平蛛蜘を踏つぶした、と言う形容が必要。

將軍、瀧澤を訓誡して曰く。一日露戰爭促進運動など、正直な國民を理由なく煽動して呉れちや困るぞ。刀を拔かずに事は納めたい、が、やる時には必らず遣る——氣を注けツ！」

將軍の大聲疾呼は有名である。一と聲で、愛國同志會たるもの座敷から吹ッ飛ばされてしまつたのは此の時で。

應じて現はれる一隊は、參謀本部の將校連、福山少將を先頭にバラバラッと座敷を占領する同勢、數へて七人。戰利品には盃盤狼藉の酒、々、々。敵の要塞地帶を完全に侵入した上々吉の卦。

「お鯉、昨日逢うたら桂が頻に汝の噂をして居たぞ」と兒玉將軍。

桂とは國事多端の折から總理大臣。その人に

噂されるほどならば、お鯉、女冥利と言ふ所だが。

「嫌ですよ、御前」ともかく、鮮かなものだ。極り悪さの嫌がられ次手「まあ、嫌な御前」と將軍まで突放される。苦笑で話頭が轉じた。今こゝでお鯉の危難の、もとの起りが荒岩であつたと知れたので。

「オイ、どうだ？荒岩と常陸山との勝敗は、孰方のものだと君達は思ふかね」

將軍忽ち配下を集めて臨時參謀會議出現。「先づ……」と福山少將が戰端をひらいた。先づ、と勿體振らなくても異口同音。決定する所は常陸山が勝つだろう、否、勝つ！

「強い者が勝つて弱い者が敗けると決まつて居れば、相撲は一向に詰らン」閣下は味のある名言を吐かれた。お鯉もさう言はれゝば益々命が懸る。荒岩に勝たせたい……一生の運試しと先刻出て行く時、一言殘した詞もある。

「そうれ、見ろ！」お鯉の逃懐を聞いて將軍雀躍した。「なら荒岩は決死の勇ぢや。常陸は守勢で荒岩は攻勢——戰術の原則から言つても攻勢でなくちや不可ン」

そのおもひは兒玉將軍にとつても同じき象を具へて居たのである。大きい露國を相手に廻して、大きいから、強いからと怖れては、國事多難。「俺にしても運さだめぢや。ぜひ、荒岩に勝たせたい」

滿座は將軍の心情を汲んで感極つた。常陸山の名聲に呑まれて、徒に、彼の勢ひに醉はされたことが恥かしくて。

「閣下、遲くなりましたッ」

乘馬服のまゝ飛んで來たのが遲れ馳せの澤井中佐、ぢつは、囘向院を偵察に行つたので。

「どうした々々、どうだつた……戰況は如何に？」少壯將校連折も折とてわッと勇敢なる間者を圍繞してけり！「勝はどつちだ。常陸山？」

「荒岩でしたッ」

うわあッゝこれ、驚愕、滿座どよめき渡ればこれ、歡喜——荒岩の名は荒武者の口々に鹿むぢやの間に、花と咲く、ひらく。「日本の國は亡びんぞ」と絶叫する將校もある。

「お鯉」

兒玉將軍は婦を寄せる。老の眼に思ひなしかキラリと宿る露——「お前も荒岩贔負か……お互ひに嬉しいなあ」

時、これ、正に明治卅七年一月の廿日。

その夜更け——池上の曙樓の座敷に、常陸山を美事倒した荒岩は、好いたお鯉と盃を酬して居たのである。

もつとも、この取持役は郵船會社の三人組、會社側では揃つて常陸山贔負であるに不拘、天の邪鬼、この三人組たるもの眼の色變へて荒岩の肩を持つ、力瘤の入れ甲斐あつて今日の土俵は鮮かに勝を得たので、喜ぶまいか、轉こぶまいか、田崎君に到つてはシャツ一枚で震へて居た。相撲の勝負がキマつて氣が注いて我身を振返つて眺めて見たら。

斯うした荒岩ビイキの三人組、この座敷にお鯉と二人を祭上げて「馬に蹴られぬそのうちに」と、粹を頗る利かした氣で歸つて行く後の靜かな部屋に流れてくるのは、しんみりと戀風、歌澤の音じめが色ッぽい。

いゝ加減お客に醉はされた酒の酔ひで荒岩は醉ひつぶれて炬燵へ足を突込んでゐる。着替への荒縞丹前、背後から着せかけるお鯉の手つきが、また、色ッぽい。

夜廻りの柏子木が正月の寒空に冴えて——荒岩は今ぞ思ひの丈を打明ける時が到來した惠まれた。晴の勝負、一生の運試しに勝を取つて見れば、思ひに殘るは只ひとつ、好いたお鯉——心は、けつして陽氣浮氣の浮いたこゝろでない。しんぢつ、お鯉を宿の妻に貰ひ受けたい、

と、申すのが本願、はれて夫婦に添遂げて大阪北の新地、豐田屋へ一緒に歸りたい。

「關取……私のやうなものを、それまで言って下さるのは嬉しいが」お鯉はそれだけは許して、と手を退けたのである。何故ッて？初めての人妻となつて、既に、失敗つた苦い憂目がある。詮じつめれば同じ藝人。惡い方へ考へたら、心元ない案じが蠶の糸より多い、つゞく。

「私が相撲取だから嫁に來ては呉れないのか……」

と問詰められゝばお鯉も女、そりやあ、行末の望み、ひとつ、位はある。それは何？お國に盡して見たい、女ながらお國の爲に盡せる事がして見たい——と言うのが、訊かれるならば言ふればキッパリ返辭のできる心願であつた。併し……だ。まんざら女の身で戰爭にも出られまいし、とは聞かされる荒岩でなくとも案じられる一大難題。

「さあ、そこだ」お鯉、その心中を語り出さんが頃には醉ひがスッカリ廻つて來た。舌もまはる。「癇癪氣論だが聞いてちやうだい。國家の何んな偉人でも時には氣の變する事はある。人間です。戰爭でも初まれば猶更のことでしやう。それを和らげ、揖をとつて、後の憂ひなく働ける力を出させるのが女の役目」

まあ、そんなものぢやあるまいか、と眼を据えたお鯉の姿は、矢張り憂國の思ひに燃える女丈夫と映つた。

「さう言へば桂侯がお鯉さんに御執心と聞いたが、もし話が誠になれば今の言葉も」

荒岩は佗しげに、何心なく呟やいたが、女丈夫、圖星を當てられて面を喰らつた。「まあ、呆れた！」

荒岩の今日の勝はお鯉思ひつめてこその勝——さて、一生を賭けて勝つて見れば相手の心は好いた惚れたの色戀でなかつた。只、お鯉には弱きに肩もつ俠氣に過ぎないのであつた。

明くれば卅八年。難攻不落の旅順口陷落——バルチック艦隊の全滅——講和成立——世は擧げて大勝利の喚聲に花火の如く、鳴る、わめく、散る。

が、その年の九月五日の夜、日比谷公園の街上に首相桂侯の非を鳴らし、群集に圍まれて獅々吼する壯士、は、瀧澤堅五、

時しもお鯉には念願屆いて桂侯に落籍されて赤坂榎坂に園はれの身、それを指して首相を懐柔するは一賤妓お鯉こそにと罵つた、呪つた。瀧澤には私怨がある！それを巧みに憂國の意氣に纏なしてゐる——で、あるまいか。群集は盲目千人。巧言麗色で國難から說き起した三段論鋒、罪は女、お鯉にある、やつちまへ！と盲動して忽ち榎坂へ突貫する。非道いのは「お鯉を殺しちまへ一」と鯨聲を揚げるのもあつた。

瀧澤こそ陽に國家を唱へ、陰に私怨を含む獅子心中の虫けら。お鯉に對する執念深さ、呆れ蛙で、いつそ、踏潰したい位。

「外務省へ火が着いたと暗から喚く聲が潮の引いたあとで聞えはじめる。さては燒打ち……。

刻同じゆうして、勿論、お鯉の家は、瀧澤に煽動された暴徒の群に踏み込まれ、門は破られ土足で座敷を狂人の如く荒されてゐたのである。

さうしてお鯉は——義母を新宿へ、召使達もそれぞれへ、落著拂つて避難させた後を踏留まつて裏庭の崖下に、植木屋の桑次郎に護られて女の身の只一人、懷に黑鞘の短刀を押へて萬が一の覺悟さへ定めて居た世間に間々思ひ誤りの慣ひはある。けれども、これまでに、これほどまでに、いやしくも一國の柱石たる桂侯を欺らかす妖婦と狙まれたが死ぬよりも口惜しい。今日も今日とて官邸で桂侯にお目に懸つた時、「俺の爲した仕事は十年廿年、惡くすればそれ以上、誤解されたまゝで分らないかも知れぬ。そ

れでも俺は滿足する」と仰言つた彼の一言、あれを思へば女一疋、例令どんな眼に逢はされやうと、遠から覺悟は極めてある！先刻も新宿へ義母を落延びさせる時、元氣のつくやうにと差上げた白葡萄酒、その盃の半分を頂いたのは生別れの盃の氣――お鯉は恁うして判然と、今宵の驅擾に死を以つて用意して居たのであるが。

暗のなかには凄い鯨波――「お鯉を殺せ、妖婦を嬲り殺しにしてしまへ一の唸りが絶えぬ。お鯉は耳を澄まして怨差の暴風を聽きながら凝と眼をとぢた。

「私は、いつそ、あの人達に殺されませう。すれば後で私の心が分つてくれるだろう」

あまりと言へば餘りに罵聲怒號が炎をあげすぎる。さしものお鯉もムラ〳〵と昂ぶつて義理にもこれ以上耐えることが能きなかつたが、傍付の榮次郎が必死になつて引き留めた。「飛んでもない！今、出れば犬死だ、々々。不可ねッてのに。」

お鯉は起つに起たれず行くに行かれず口惜しさ餘つてわッとひと聲、聲をあげて泣伏したのは此の時の話。

時に突然、お鯉の前に銃劍が光つた。見据えると從卒を伴つた井上中尉、これはお鯉の隣屋敷の若樣。なのでヤレ安心とおもへば、その中尉が護衛して連れて來たところの面會人、誰と聞くまでもない、板坂町々内の代表が三人、と暗から答へる。怪しい者でなかつたが、お鯉にとつては矢張り悲しみの種。

「氣の毒ながら早急この町内を立退いて貰ひましやう」

でないとお鯉――安藤の家に火をつけると暴徒は騒いでゐる最中、傍杖喰べさゝれては耐つたものでない。町内の衆議一決で罷越した次第人皆おのれの爲には良く他人には辛い。

「ハイ、さう致しましやう」

傍で植木屋榮次郎が、それこそ火のついたやうに薄情な挨拶を吐鳴り散らし、柄突いて見たが、お鯉がもう穏かに頭を下げてしまつてゐる臣の身として手が、いまさら、着されぬ。

官邸から肱岡警部。

桂侯から使者とてお鯉を捜して……現はれる侯もお鯉の身を案じてのことらしい。その手紙が手渡された。暗にひろげて何事とお鯉は心強く拾へば、颯！顔色が蒼ざめた。あな情なや緣を絶て、とは！

「御返辭を承りたいと存じます」警部の顏も緊張してゐるが其處までの事情はつゆさら知らぬ。「承知いたしましたとお傳へを」その一言ぢつに、血、血を吐いた。――誰も知らぬ、否氣どられまいこの思ひ。

お鯉は天も裂けよ地も碎けよ。と、呪はしかつた、悲しかつた。

けれども怨むに人はない。人は、群は、只、浮草のやうに浮動してゐるのではあるまいか。その群衆に殺されて遣る！ことは百も千も覺悟の前だ。けれども、植木屋の榮次郎が咽喉を破らんがばかり、必死に、留めたから思ひ止まつたのだ。もう恁うなれば濡れぬ先の露だもの。たゞ、御前さまへ、その心あての、只、ひとつの頼みが、今、プツツリ斷たれてしまつたのだからいちぢに、寒さが身に泌みてお鯉は身顫ひした。空を仰ぐ。

空、鴈鳴きわたる――花を見すてゝ歸る鴈か思はず男まさりなお鯉も流石この緣斷狀には少時氣を失つたのも無理のないことで。

一何事も御前まかせのおらが春……」

緣と月日、お鯉は女のやうな弱い未練氣もなかつた。桂侯の心を佛と頼んで、來る春を待つおもへばやつぱり、女心の一筋か――。例令男まさりのお俠と言つたところで。（終）

9×9＝49

○

伊井蓉峰が幾年振りで喜多村と合同で、しかも獨自の境といふべき鏡花物の『湯島』を上演する。演出が馬鹿に新らしくなつたネとの評判を訊いた蓉峰、それだから新派と申しますヨと反り身になる鏡花物で敎化ずるんでサと下手な洒落を木内末吉太夫元氏が吐く。道理で二十九日間の滿員は凄じいもの。――

○

喜多村綠樹宗匠が『お鯉物語』で力士荒岩に扮し、自然の藝で活躍してゐるが、池上の場で得意の歌澤を唄ふ。淺草の觀客が淺草らしく安來節をヤレと無理な注文を出す。喜多村苦笑して曰く、序幕の『砂繪呪縛』でチャン〳〵バラ〳〵を演つてゐるんだからカンベンしてくれ！と。

○

中村吉藏氏が又、頗る本氣で新派復古の第一は脚本の大衆的向上にありと、そこで大衆の新らしい心持ちを握んだ社會喜劇『嘲笑』を呈與した。これが又、素晴しくフレッシュなもの。金子洋文氏も一幕脚色したさうだ。ドシ〳〵大衆向きに新らしくなつてほしい。木戸も安くしてほしい。

○

岡田嘉子一座が相當の人氣を取つてゐるが、結局は金龍館に入るものだと評判されて居る。イヤ、諸口十九の一座と合同しますヨと樂屋雀が噂さして居る。それぢや山田隆彌一座とも合同するかも知れないヤ。

○

淺草の金龍館に日活の梅村蓉子が暫時加入して、顏だけを看板代りにさらすさうだ。そこでパントマイムが又流行しだすかも知れない。イヤ、しかし何んでもいゝ人氣が沸騰して大入袋が出れば、此の不景氣に人助けとなる。

○

河合武雄がお鯉物語でお鯉に扮して評判を取つてゐる。河合の妻女とお鯉が突然舞臺監督代理と狂言方の眞似をしてアレコレ世話を燒いてゐる。十八貫五百匁、少々肥大過ぎる河合のお鯉、これだけが困りますヨと云へば、本人の安藤照子、一層のこと『姙娠してゐるお鯉』としませうかと笑ふ。

○

洋行を止して滿鮮興行をやつた曾我廼家五九郎は來月は名古屋新守座ださうだ。それから如何する？ 小生夢坊氏が退座したといふし、宣傳第一で演れなくなるとすると、一寸氣の毒。しかし怪物の事だし、拔け道は在らう？。

○

築地小劇場が最近のレコード破りしたソビエットロシアの喜劇『空氣饅頭』がよくも上演禁止にならなかつたものだ。レーニンの肖像やら赤旗やらを舞臺に飾つてゐるのに。佐々木孝丸氏曰く『大阪の△△ちうは芝居を知らんのだヨ』と兎に角、東京を中心の小劇場運動も段々と積極的になつて來たことは事實らしい……

○

小生夢坊氏日本一の美人の稱ある愛妻松下八重子夫人を紛失。私立探偵社に捜索を賴んで五十圓取られたよ、とベソをかいて受領證を見せる。鳥江銕也氏洒落て曰く『小生君は和事師であるのに何故色が黑いかといふことについて僕は一晩考へた』『そこで？』と夢坊氏……『つまり色が黑いのは玄人であるといふ結論を得た!!!』

『婦系圖』と『お鯉物語』について

伊井蓉峰

私事を御披露するといふ事は、誠に恐縮の趣もありますが、外題に絡る插話として、晩秋の夜長の芝居話も又一興と存じまして、聊因縁話を申上げます。

「婦系圖」の東京に於ての書卸は、明治四十一年新富座でした。狂言を定めて私は持病の鼻の手術にかゝりました。醫者が十日間の豫定を一週間に切つめて貰つて　鼻の穴を切りだしました。その間は絶對に新聞さへ見る事を禁じられたにも拘はらず、經過のいゝ所から、氣になる儘に臺詞書に眼を通しました

所が年來の惱に引かへ幼少の折の神童に立戻りましたが、直ぐと記憶が出來るといふ次第で、これならばといふ氣になつてすつかり安心してしまひ、稽古場へ入つてもうかゝ切つて、やがて初日になりました。私の例で何時もプロンプターをつけておくのですが、今度は無論要らないと心得て、愈々舞臺へ出ますと豈圖らんや一言一句も覺えてゐなかつた事に歸着しました餘り早く覺えて早く抜けてしまつたのです。肝心な早瀬主税といふ自分の役名を忘れてしまひ「俺の名前は――」と聞きましたが、プロンプターは平常私に叱り飛ばされてゐるから、皮肉に調弄つてゐると心得て「冗談いつちやいけません」といつて更につけて呉れません。――そのうち舞臺に穴があく、やゝ逆上氣味で大きな聲をしてプロンプターと喧嘩をするといふやうな新演出をいたしました。この時、今度演ります湯島の境内は當時坂東一鶴といふ名子役がありまして、私は我子のやうに可愛がつてゐました。これを十二の掏摸にして、自分が十二の年を思ひ出すといふ趣向でした。この時一鶴が私の臺詞を覺えてゐて細かにつけて呉れました。今更思へば、その一鶴こそ正眞正銘の神童でした。その次が明治座でお蔦は河合氏でした。故鈴木春浦氏が醉つて樂屋へ來て誰に煽てられたか、ある場面の惣出へ出た事がありました。私はその日がすんでから一座の者

を集めて解散すると怒りました。そしてとう〳〵この芝居後解散同様の運命になりました。次は市村座で喜多村氏のお蔦でした。久保田万太郎氏が補筆された時です。無理な初日を開けました所、序幕早々大失態、二幕目では衣裝が間に合はぬため登場する役者が出て來ず、私は途中で幕を引かせ今日は芝居をやめるといひました。そして大混亂の結果、どうやらその日は演了しましたがおさまらないのは大谷氏で、所屬の役者がそんな事をしたといふので、新派をやめると怒りました。次は大正十三年五月御當地開演中六月興行の東京の松竹座にこの狂言が確定しました時、東京より電話で家内が亡くなつたといふ報せがありました。由來私は御當地に開演中義母も生母も亡くし尚、香浮園の類燒もあり餘り不幸が度重なりますので、如何に呑氣な私もこの時は力を落しきりました。興行を途中で打切り葬儀をすませて六月松竹座で開演いたしましたが、どうも芝居をしてゐるものゝ氣が滅入り勝で、役者の辛さを切々染ました夫から永い間休演といふ運命。この度は又、公園劇場に開演中、四日目に家内同樣な者が亡くなりました。かういふ因緣でございますが、今回は初日以來大入でかへつて私は元氣が出て參りました。その出て參りました所でこのお話をするのですから、決して緣起の悪い譯はございません。

さて湯島の境内で、お蔦が主税にこれから先どうして暮すと問はれた時「私は他樣の頭髪をいぢるのが好きでしたから梳手にでもして貰ひます」と申す躾詞があります。今のお若い方にはさほどお感じにはなりますまいが、實によく穿つた言葉で、當時の名ある藝者衆は堅氣になつて、自分の生活のため今まで習ひ覺えた唄や三味線の師匠をして暮さうといふ氣はありませんでした。堅氣になつた限りは、堅氣の職業で立つて行かなければ仲間へ對して恥辱だといふ觀念がありました。今一つはたとへ自分がその道の名

新派 三頭目に對しての感想

（順序不同）

千葉亀雄

伊井氏の美貌は『美貌が、俳優の唯一の資源だ』といふ迷信を、立派に目覺ますやうな役目を、つとめて居るのも皮肉です。内容のない美貌、特色のない美貌、心的苦悶を持たず、またそれを表現しない美貌は一つの面に過ぎません。伊井氏があれほど努力して、今なを新派俳優としての無辯者に彷徨することは、この美貌に無意味にたより過ぎたせいではないでせうか。高田は決して、『好男子』ではなかつたが……河合氏は名人、喜多村氏は達人、こゝでは、どうしても全く違つたそれ〳〵の殊藝を持つて居ます。私は二氏とも古くから好きで、河合氏の明るい役――といつて喜劇ではもちろんありません――蓮葉な役に人並みにひどく溺れます。喜多村の捨て鉢な、いくらか淋しい役にも同じ情熱ではきり込みます。が、喜多村氏の新劇（正宗氏もののや

手でも、師匠といふ者の範圍を犯してはならぬといふ念慮もあつたのでせう。實は私の家内なぞも他様の髪を結ふのが好きで、私が二十五で一座を組織して二三年後、生活に困つた時分、髪結をして米でも買はうなどゝいつた事がありました實に鏡花氏が、此間の機微をよくとらへた事と今更ながら敬服いたして居ります

「お鯉物語」の兒玉將軍について申上げます。私は將軍には御在世中二度——それもほとんどすれ違つた程度でお目にかゝつた事がありました。この役を引受けました私は、稽古の日もなく他方面から研究する暇もなかつたので、先日亡くなりました佛の記憶を辿つて貰つて作り上げました。從つてこの役は、亡くなりました佛の演出と申さして頂きたいと思ひます。將軍の「勝てば怨まれ負けてはすまぬ、ほんに戰はせまいもの」といふ御自作の都々逸は戰役後の作ださうでございますが、佛の記憶から書いて渡して呉れました。私には佛の絶筆になつて居ります。私はそれを舞臺で戰役前にして中へ入れて居ります。

話が因縁話すぎますから、佛に絡まる將軍の逸話をもつて終りといたしませうそれは數年前に佛から聞きました話でしたが、私もつい忘れて居りましたが、今度亡くなりましたにつきまして私も記憶を辿り起しました。

丁度御當地へ私と佛が參りました時分今度高野山へ行く間がなかつたと云つた事でした

それは將軍が戰地へ行かれる前、佛が清香時代で「お鯉物語」のお鯉さんと二人で瓢家でお目にかゝつた時、佛が將軍に御贔屓になつてゐるのですから何か肌身についた形見を呉れと申しました。すると將軍は、今與へるものがないと申したので、イヽエものゝ高下をいふのぢやありません、肌身についたものが欲しいと申上げましたら、暫く考へて居られましたが、やがて鋏を取寄せて睾丸の毛を二本切つて、俺が死んだら祀つて呉れと仰有つて、佛とお鯉さんに一本づゝ呉れました、お鯉さんの方はどうしたか知りませんが、佛は羽二重に包んで高野山へ納める積りでゐました

うなの解釋はもう一息です。そうした移動性の敏感では河合氏の方にいくらか分があるやうです。

高須芳次郎

別に申上げることもありませんが三君共に好きです。三君近時の活躍を會心の至りに存じ光ある未來を祝福致します。そして現在、將來に對し大なる期待を持ちます。

坪内士行

三頭目が過去においての功績はまことに敬すべく、賞すべきものが多いと思ひます然し、遠慮なく申せば、伊井の色男はあまりにも今のモボと距りが多く、又、河合、喜多村の兩君、技は甚だ巧みなりと雖も、今になつても女形でおさえて行かうと云ふ自負心はこれ亦現今の一般見物の要求とはあまりにへだゝりが遠過ぎると思ひます、前から申してゐる事ですが、之等三頭目が所謂演出監督となつて、かげで、若手を使つて芝居を演じさせたら、我れ人共に滿足を得るに相違ないのになアと考へます。

お鯉物語の特色

佐藤紅緑

伊井の藝風は大阪人には適かない、大阪人はこつてりした、油つこい、しつこいものが好きだ。

伊井の藝風はあつさりした、淡白であつて、輕い味がある、だから鰻でもない、天麩羅でもない、洋食でもない、つまり東京の八百善の鯛の吸物みたいである。鯉のあらひ、といつた藝風である。

其處が大阪人には適はないのだ、つまり上方風と江戸風の相違である。それで大きな聲を出して花道で見得を切るといつた藝は絶對に出來ない。

新派全盛の時は伊井と高田は大立物であつた。高田は團十郎であり伊井は菊五郎といつた所だ。

高田の藝は力强くて、派手で、芝居の要點をぐつと摑んだ、誇張する藝であつた、伊井の藝には誇張がない、誇張なしに力が强くない、然し其處に何んとも言へない清洒な、上品な味がある、例へば、政界の方でいふと西園寺公といつた感じだ。一體舞臺に於ける藝といふものに品位がある。

死んだ村田正雄が芝居上手であつた。名人の部に數えられる人であるが、惜しい

長田幹彦

完成された藝術には感激がない。歴史的に過ぎ去つた生態には生命の力を感じることが出來ない。新派の三頭目、それは歌舞伎劇ほどに長い傳統をもつた一種の『藝』の人格化である。美しき生ける屍である。唯それだけだ。

中村吉藏

こん度の公園劇場での『お鯉物語』は大當りい樣子で、新派復活の作なりと云はる、何んにしても活きた現實と接觸する事を力めるところに、新派劇の前途打開の唯一の方法はあるべし又ゾロ後戻りをせず、前へ前へと進んで行く事を忘れずに大努力をつゞけてもらひたし。

仲木貞一

新派劇は一體民衆を對手として面白い刺激强い芝居を見せるべきだのに、何時の間にか上流階級へ喰入らうとして歌舞伎劇に敗けた形があるのです。今度新たにスタートを切つて民衆に向はんとする勇氣には敬服してゐます。而して、東京に於ける第一

ことには品位に乏しかつた。伊井の芝居は力強くはないが、品位に於ては何人も學ぶことの出來ないものがある。

其れは、其人の性格の故もあり精神修養の故もあり、生れ育ちの故もあらう。

兎に角、今日若し伊井がなかつたなら、上品な役者は恐らく日本には無くなるだらうと思ふ。

喜多村の藝は非常に澁い藝である、澁味！つまり内的の藝である一體喜多村といふ人は、聲が悪いし、形もぶく〳〵太つて女形には適しない、近頃は一層肥り過ぎた樣だ。其れであり乍ら舞臺に於て見物を魅きつけて居るのは、何んのためかといふと、内的だからだ、陰性だからだ。内的であるから派手ではない、光がない、光があつても純金の上に燻しをかけた藝で生地のまゝではない、それだから若し、非難するところがあるとすれば、生々としたフレッシュな感じのないといふ事だ。

現代の青年どもに向かない所以は、生々しくないからである。

喜多村は凡て生々しい事が嫌ひなのだ。一ぺんは藝質といふ、燻しをかけて、底に潜んでゐるかすかな光を放射する。そこに何んとも言へない味がある。如何にも窮屈らしく見えるけれど、凡ての力が、この胸の中に内訌してゐる。渦を卷いてゐる所に、彼の藝風の面白味がある。

其れに對して河合は如何かといふに、その朗らかな聲とか、妖艶な顔と形、女形としては完全なものを備えてゐる。

それだけに、彼の藝風は自由奔放である。

面白いことには死んだ松井須磨子や、帝劇の女優達でも、凡ての女優は皆んな河合の眞似をする。

河合は内的でなく外的である。燻し金でなく、純金の光のまゝを輝かしてゐる。

回の試みは首尾よく成功したのでした。尙近代は集團の力で押すべきです。だから一の力より三の力の方が如何に強いか明瞭な事です。然も名人三人が氣を合はして芝居をするのだから、その芝居の面白い事は勿論、成功疑ひなき事です。

南部修太郎

喜多村はその藝風、その藝道に於ける精進の態度から見てなほ將來あるものと存じ候。伊井河合は既に日暮れる道遠しの感有之候へ共最近の淺草に於ける三人合同劇の如き孤城落日の姿ある新派劇を昔日に返さんとする協心的努力大に好感を誘ふものあり、一般の好評を贏ち得たるまた偶然ならずと存じ候三人寄れば文珠の知慧と申す事も有之老いたりと雖もこゝもと氣を揃へて粉骨碎心すべしと存じ候。

新居格

私はかの大地震以來、芝居は殆ど見てゐません。數回位のものです。新派の三頭目の演技は一度もみて居ません。けれどあの三人はなつかしい人達です。私は日本の秋がすきなやうに、また泉鏡花氏の作品がす

實際、舞臺の河合を見ると眼が眩む、樂屋で素裸で、赤い腰卷をつけた彼を見ると、誰れでも本當の裸體の女を見るやうな氣持がする。

今度の芝居の面白味は、外的な河合と、內的な喜多村の對照にある。一は陽であり、一は陰である、陰と陽と衝突する時に、稻妻がひらめき、雷が飛ぶ。

だが、河合と喜多村をして活躍せしめ得る脚本が、今日あるや否やは問題である『砂繪呪縛』といふのは讀んだことはない。『お鯉物語』は、新聞連載中愛讀して居つた。

あれはあのまゝでは到底、芝居になるものではないと思ふ、然し武田正憲（音羽六藏）が、脚色したといふものだ。

武田は、新劇の出身で、しかも永年の間新派に修業をした男であり、僕とも多年非常に親密な間柄である。武田が、その芝居の仕組方について持つてゐる技倆は、今日の所謂、文學者共より遙かに勝つてゐることを斷言し得る。

だから『お鯉物語』は必ずよいものが出來たゞらうと思ふ。

たゞ、あの物語の中には、お鯉の戀物語がない、其れを如何取扱つたか、それは興味ある問題だ。

河合の扮するお鯉はお手のものだらう。何故かといへば、河合はもつともお鯉を知つて居る。

嘗つて、僕の脚本を演つた時も、河合がお鯉をモデルにして扮裝したことがあるから、今度のお鯉の扮裝に就いては、充分行き屆いてゐるものがある。

伊井にしろ、喜多村にしろ、此の物語を演出するに就いては、隨分、樂つたいものがあるだらう。それにつけても思ひ出すのは、お鯉と仲々深い關係のあつた高田を墓の中から引張り出して、この中の一役を演らしてみたいものだ。

きなやうに、あの三人がそれ〴〵に好きなのです。

伊井、河合、喜多村の三君が、現代日本の現代感情と步調を合せて行くなら、最もうけるべき筈だと思ふのです。あの人達の多年の熟練は光つた技巧になしてゐる。そして伊井は經快、河合は明麗、喜多村は好ましい陰影をもつてゐる。

加藤武雄氏や三上於菟吉氏の小說がうけるのだから、三人がうけない譯はないと思ふのですが……

白石實三

伊井氏を、この二月かに帝劇で見て『獅子に喰はれた女』の曲馬團長など、氣に入つたものと、厭みなく嬉しく觀ました。今は好きな野球のシイズンで、歌舞伎芝居など念頭にありませんが、新派だけに、その後どうなつてゐるか觀たいやうに存ぜられます。諸雜誌の大衆讀物など、だん〴〵深みのある複雜なものが現はれます矢先、かの新派三氏が更に一生面を描いて、面白いものを見せてくれる時機ではありますまいか。

世話狂言の時の敵

三津五良

所謂三頭目合同劇

平野止夫

□

五月に帝劇で二頭目合同劇を打つた新派の河合、伊井は、八月更に喜多村を加へ演舞場を本陣として謂ふところの新派三頭目合同を演じた。それから翌九月には、喜多村と河合二優が亭主ぬきの芝居を、本郷座に見せ、追つかけて十月には三頭目が民衆を對象として、淺草は公園劇場に華々しく打つて出たのである。何さま、表面目覺しい奮闘に見える。

八月の演舞場は旅行不在中で知らないが、帝劇と本郷はどちらも入りは香しくなかつた。が、淺草は遺がに玉石混淆の不景氣知らずといつた風、連日の大入は先づ結構と申して宜からう。

□

帝劇から本郷までは、どうやら三頭目が更生らしい道を志して進んでゐるやう（な狂言の立て方で）に見えたが、園劇となつてはチト眉つばものではあるまいか。即ち「砂繪呪縛」「お鯉物語」「婦系圖」「戀の受難」の四題。髷物チャンバラから、オールバック、マーガレットの現代まで、社會の種々相を見せようといふところに善心もあつたのであるが、第一は兎も角、第二、第三に至つては、ご挨拶のしようがない。況んや、今度の三頭目合同では「お鯉」が「呼物」だと

長谷川　伸

伊井、河合、喜多村みんな優れてゐる藝術の人だ、それでゐて營業的にも世間的にもパッとしないうまくなり過ぎたからではあるまいか。もつとまづいのであつたならそのまづさを補ふ爲に過去の新派がとつてきたやうに、新奇を、新天地を新技藝を漁れるだけ漁らうとしてそこに尠くとも對世間的に所謂人氣を煽る何かが生れてくるのではあるまいか。見てゐて藝の味わざの冴へ、そんなものはいつでも認めさせるけれ共何かしらぐいと迫つてくるものがない。いつもの味、いつもの冴へをみるのに過ぎないから、自然、飽きがきたのではあるまいか。しかし、近來所謂三頭目が結んで戰つてゐる事はまことに快い。いふまでもなく三人とも新派をどウするかに就いて惱んでゐるのはわかる。惱みは實に更生のはじまりだ。私が新派が盛り返へすだらう。曙光を認めてゐるどうか先づ新奇さだけでも摑んで見せて欲しい。

大關柊郎

私の愛する新派三頭目——伊井、河合、

いふに至つてはだ。

新狂言だかなんだか知らないが、今更「お鯉」でもあるまい。また今頃「婦系圖」でもなからうではないか。更生だなんて氣持は、もうとツくの昔どつかへ置き忘れてゐやしないかな。あれぢやまた元の、昔の「新派」に逆戻りだ。

□

こんな惡口をたゝくのも、新派を少しでも愛するからだ。まだ多少の望みをもつからだ。「可愛いゝ子は打つて育てよ」といふことがある。——前號にも書いたやうに、私は世間のやうに、彼等を見捨てはしない。まだなんとかなりさうに思へる。殊に喜多村には新らしいものが、十分やれると思ふ。

大衆物に目をつけたのはいゝ。が、例のチャンバラだけは、澤正や明石に任しとくがいゝな。あいつだけはどうか願ひ下げにしてほしい。まアやるなら、やつぱり「龍門黨異聞」の如き、探偵がゝつたものを望みたい。——が、出來るならば髷物だけは、と思ふ。どうも髷物ではピタリとこない。——近來どうもこれをやりたがる人が多いのに驚く。新劇の畑中一派までが。

兎に角、ピントを合せて貰ひたい。的を外さないやうにしてほしい。惡趣味や惡傾向に墮せないやうに。——かう書いてゐるところへ、新聞のニュースとして公園の三頭目が　こないだ死んだ德富蘆花兄弟の「別れの場」を一幕やるらしいなどゝあるのを見た。「不如歸作者と天下の記者の訣別！」やア、助けてくれ！とどこかで悲鳴が上りさうだ。

□

さて、十一月には淺草のまゝを大阪へ持つて行くさうだが、拙作「戀の受難」は前回中座上演の際禁止になつて問題の芝居で、曰く付になつてゐるから、今度も何うなるかまだはつきり判らない。でそれについてのことは、單に園劇の批評

喜多村よ。諸君は私がこゝに云ふまでもない優れた技倆を有する天下の名優である。それが今日の不振はどうであるか、それには色々の原因もあらうが、要するに諸君は出物の選定にあまりに無關心、いやあまりに退歩的であつた、あまりに過去の世界に囚はれてゐたやうに私は思ふのである、だが世の中は日一日と進轉してゐる。だからこの點に鋭い眼を向けて出物を選んではどうか、それについて指導者といゝ興行主をおえらびなさい、必ずや諸君は復活、いや再び隆盛な日が來るでせう。さし當り歐米で歡迎されてゐる——クロック、プレイを演じなさい。そして新らしいメロドラマを新らしい作者を選んで書いて貰ひなさい。もつと目先を變へてごらんなさい。必ず道はあります。

食滿南北

私はかつて相合橋で歌舞伎店といふ人形店を出した事がありました、其處へ日を違へて河合、伊井、喜多村の三氏がやつて來ました、伊井君は何にも多くを云はないで大分澤山買物をしてくれました、河合君はいゝ店ですねと云つて暫らく話して行きま

に止めたいと思ふ。

伊井の井上技師はまア變りはないとして、前回帝劇の時と違ひ女優ぬきで、河合と石川が月子と純子をやつたので、どうしても例の新派式に墮ずのを免れなかつたのは已むを得ない。この種の狂言はどうしても女優でなくては、といふことを一言するより外にない。

喜多村が純子をやつてくれたら、まだ見られたのだが、石川のあれぢや、なんともハヤ恐れ入つて、引下るばかりである。

三頭目よ！　本當に更生して、新らしい脚本に手をつけたら何うだ？　切に努力を望む。

——（完）——

伊井、河合、喜多村の合同劇に就て

綿貫六助

一

河合は、ダリヤである。
喜多村は、コスモスである。
伊井は、莊嚴な溪のあいだを飾る紅葉でもあらうか。

二

露霜に、幾分ハイタイの美を現はした年増の凄艶は、河合の生命であらう。
小春日の吹くとしもなき微風に、こまやかな戰慄をきざんで、すつきりとした

した。喜多村君は人形の並べ方に就ていろ〳〵と注文を出して行きました、私はこの時位よくこの三人の性格があらはれてゐたのを直感した事はありませんでした。

藤井柴郎

拙者近來老懶にて芝居へも御無沙汰殊に新派は十年以上も見物せず三優がいかに進歩發展されたかも存ぜず隨て何かと御答申上ぐる資格がありません。

山崎紫紅

明治から大正にかけてのある代表演藝、角藤川上から出發して高田を最頂點として所謂今日の三頭が有終の大をなしてゐる、井上にも花柳、小堀の連中にも、この繼承はできまい、エライ人たちだが惜しいことにもう年齢が許さない、知れ切つてゐる前言の通りをくりかへすの外はない、我れまた何をか云はんやである、

鳥居清忠

新派の連中が時代物（マゲモノ）を上演すると東京の見物は『おそえもの程度』に見るようですが是は歌舞伎劇とは別にして見たいのです。又一種の味が有る事は今更

もち味をほこるのが、喜多村の特長なのである。

楢、楓の別をとはず、朽葉色に、黄に薄紅に、眞紅に、晩秋の莊嚴を、その藝術の上に具現して、雨に、風に、嵐に人をして、應接に遑あらざらしむる、と云つた趣のあるのが、伊井の氣魄ではなからうか。

三

今度、浪花座に於て、右三氏大合同の興行開場に就き、何か書けと電報まで頂いたのである。恰度、雜用に取紛れてゐる際で、甚だ不本意ながら、これで、今度だけ、ゆるして頂きたい。

名にし負ふ三頭目の大合同であるから大に觀るべきものであることは云ふまでもない。

とにかく、季節の、それ〴〵の美しさを象徵した三頭目の合同は、渾然とした秋の自然の美を關西の眼に映出すであらう。

御側闘を祈つて筆を擱く。

幸四郎

立役の新

新派劇の存在

山上貞一

新派の三頭目と呼ばれてゐる伊井河合喜多村の合同劇は東京ではよい成績を擧げてゐると新聞紙にも見えてゐたが、當地でも珍らしいからよい結果を招くことと思はれる。又新派不振の聲を一掃する上から言つてもよい成績であらねばならぬ責任が三頭目の上にかゝつてゐる譯である。

申す迄も有ますまい。

大幹部以外の人が馬脚をあらはすのが困ります、何とか御工夫ありたし。

『婦系圖』の内『湯島天神』を一場上演するなぞは結構な事と存候

高安吸江

明治の中頃でしたが、ある文學雜誌が、東京中の美人の寫眞から、尤美しい眼、鼻口等を別々に撰り出して、是を寄せ集め、所謂理想的美人の標本として、己が表紙畫に用ゐた事がありました。新派大合同の話を聞いて、スグこの三人が私の頭に浮びました。あれだけ立派な腕を有つて居る三頭目に、在來の所謂新派劇をやらせるのは、あまりに惜しいことです。此人々が充分に腕をふるへさうな明治物を、かいて見やうと思ふ現代人が、誰かないでしやうか。

伊原青々園

このまゝ三人合同で永つゞきする事を希望します、そうして正しき進路さへ取れば復活するに違ひないと思ひます、だが其の『正しい進路』といふのは何ういふ事か、それが大問題です。

處で私は新派劇といふものゝ存在について疑義を抱いてゐる。歌舞伎劇に對する新派劇で、新派劇とは明治年間に創成された演劇の一つとして古典化して見るべきものであるか、又今日の新を傳へる使命の下に存在する現在的に躍動しつゝある演劇として寧ろ實際的に見るべきものであるかといふ二つである。面白く可笑しくあればそれでいゝ、芝居にそう難かしい理窟をつけることは禁物であるかも知れないが、よく考へてみると新派劇が嘗つて非常な勢力で歌舞伎劇を壓倒して流行した當時のことを顧ると、そこには古典的な歌舞伎劇に慊怠をもよほしつゝあつた觀客に實際的な演劇を見せたのが成功のもとであつたやうに思はれる茲に於て新派劇が昭和の今日古典的な道を歩むとすれば『金色夜叉』『不如歸』『婦系圖』『乳兄弟』などの所謂新派劇全盛時代に喝采を博したものゝ再展開であり、又新を傳へるものとして實際的な歩みを續けるものとすれば、今度三頭目のとりつゝある『砂繪呪縛』『お鯉物語』の上演である。即ち新派劇は新派不振の聲を聞き始めた最初に於てまづ此の判斷のいづれかを正しいとして堅實な歩みを踏み出すべきであつたか、そこに多少の躊躇があつて、この疑義の解決を急がなかつた爲めに現狀の不振に至つたものであると思はれる。

そこには新派俳優そのものが自由な演技の人であるべき筈を、その技藝の範圍に於て案外狹溢であつて表現法に於ても一定の形式化を免かれなかつたといふことなどが觀客の興味を失した原因であるとも言はれる。

例へば伊井、喜多村、河合にしても、その個性なり演技の點よりして藝風がいつか固定して居て舞臺上の變化がない。河合は俠艶なる女、喜多村は優麗な女、その間に介在した伊井は二枚目の決して惡人でない男と決つてみれば狂言の題名が如何に變つても狂言の取材に妙を得ても俳優と扮役から來る聯想そのまゝの舞

平山蘆江

喜多村は獨りよがりになり、伊井は因循になり、河合は捨ばちになり、三人三樣の我儘が、自然、その門下の人々の心を離反させるばかりですから、今の儘ではどう合同したつて、それは名のみの合同です、何の仕出來した事もありますまい、まして今の新派は時勢の流行ものを二足程遲れて追かけるやうに追かけるやうにとなつて行きますから尙更世間の人氣からまで離反されて了ひます、困つたものです。

大村嘉代子

三人〈三つの希望

一、三人がいつも一座であること。

二、舊劇の人と一緒に芝居をしないこと。

三、所謂舊來の新派劇を脫したいゝ現代ものを演ずること。

國枝史郎

この三氏は所謂新派劇本流の三巨頭なので從來あらゆる人に批評し盡くされた感があり、それらの諸批評の總和がこの三氏の得點でもあり缺點でもあり、さうして私の三氏に對する感想もそれと殆ど差が無いや

新派三頭目に就ての希望

川村花菱

臺を見ることは觀客として困つたことである。三頭目の分離は此點に主なる原因があること、思ふ。

私は新派劇の字在は新聞紙の立體化であれかしとは望まないが、少くとも新を傳ふるものであつて欲しいと希望する。歌舞伎劇には洗練ささたる型の踏襲があるが、新派劇には現在する俳優が持つ味のみがある。その俳優は永遠に若くない三十歳の伊井が喝采を博した演技はよく五十歳の伊井が喝采を博し得るかどうか新派劇の場合に於てはこの點は實に危險であるとも言へる。新派劇の女形に至つてはその弊が甚だしい。されば最近新派劇の一つの逃げ路として女形を廢して女優採用に努めてゐるのを見ても明である

私はかねてより新派劇の更新の策として古典的に猛進するか、實際的に突進するか二つに一つの策を選ぶべきであつて新派俳優の新劇、即ち創作劇上演など間に合はぬものはないと思つて居つたが、今度伊井、河合、喜多村の三頭目が合同上演に當つて、新派劇本然の使命ともいふべき新を傳ふる實際的な道をとつたことは實に賢明であるといふべきであつて今更にといふやうな骨惜みの觀念なく所謂舊來の惡習を破棄して、革新的な演技の發表を期待するものである。

うに思はれます。三氏乍ら個々の藝は實に旨い頂點まで達して破ることの出來ない型を作つて了つた、だから今度は不味い藝をやつて無理にも型を破つたらどうだらうなど、とても出來ない要求を私は要求したく思つてゐます。一方諸批評家がもつと親切に批評したらどうかなどゝも思つてゐます脚本難といふこともあるやうです。

額田六福

此間久方ぶりで公園で見た。お鯉物語に婦系圖の湯島詣でゞあつた。お鯉は脚色も無難で面白かつた大詰は憐れで河合の出來無類だつた。更に湯島詣に至つては益々新派の絶品。藤井、大矢の仕出しまで寸分の隙のない出來。ことに喜多村のお蔦は、少し無意氣との評もあるが全く最上彼の諸辭をおしまない。しかしだそれでゐて、本當に陶酔出來ないのはどうしたものだらう。それが新派での問題だと思ふ。清元をチヨボ代りに使つて、きまり〳〵木の根にすがつたり、燈爐に手をかけたりする見得實に巧だと思ふと同時に、暫くみてゐるとすぐに倦いて仕舞つて、反つていやになる。そこだつまりあまり上手ずぎて眞を失つた形

新派の事については、私自力も度々云つた事もあり、又多くの方々の御高見もしば〳〵あらはれた事であるから、云ふべき事はすでに〳〵つき果てゝ居る筈だと思ふ。が、猶今日になつて、それが問題になつて居ると云ふ事は、いつまでたつても吾々の新派に對する希望が實現しない爲だらうと思ふ。

職業劇作家ではあるが、私としてもいい芝居を見度い心持は滿ちあふれて居る新派に對しての希望も要するに見度い芝居をやつてもらひ度いと思ふ事に他ならない以上、議論としては比較的正しい事を云つて居るつもりであるが、正しい議論必ずしも興業價値のあるものでもないと見えて、吾々の考への一端さへも新派の劇團を興行する上にあらはれた事が無い。興行さへ當れば、舞臺上の事は怎うでもいゝと、どの興行師も思つて居るかと云ふに、私の知つた限りに於ては決してそうでないと思ふ。が、只イヤな事は巨額の金をかけて勝負をすると云ふ場合に、好況時代とちがふ今日に於ては、ともすると冒險を恐れ、いつも損のないやうにと云ふ立場で脚本選定の標準を定めあまりに現代の見物に迎合しやうとする態度である。その態度がいつも常識的であり、世間的であるのが私にはなさけない。讀みものとしての大衆物とか云ふものが流行すると云つても、私は決して芝居見物が直ちにそれを好んで居るとは思はない。劍劇は劍劇として終始すべきもの、新派は新派として終始すべきもので各々獨自の藝術（？）を標榜して立つた以上は、その目的に向つて精進して、最もよき芝居を見せると云ふ事に主眼を置くべきだと思ふ。それを、新派の人々に劍劇風のものをやらせ、キワ物をやらせ大衆物をやらせると云ふ事は、料理人が器だからと云つて、天ぷらやのゝれんをあげながら支那料理をやらせると云ふやうな結果になる。

今本當に、作者の思ふがまゝに書いた脚本（座つき作者のあてはめたものでなだと思ふ。もう一度素人になつたつもりでふみ出せば、往年の盛をみる事も至難ではないと思ふ。

大久保作次郎

魚づくしでたとへて見ます。

伊井君＝鰹

鰹一尾喰ふために袷を質におくなんて、貧乏くさい江戸子の自慢ですが、所詮アナクロニズムの非經濟思想、モダンボーイ向きの魚ぢやございません。

喜多村君＝鮎

香氣が高いなんていひますが、皮肉家だけがひとりよがりに頂くもの、榮養價値はゼロです。

河合君＝金魚

綺麗ですが、煑ても燒いても喰べられぬ

土師清二

◇喜多村氏　の藝の味を分つてくれる人が殖えないか。

◇伊井氏　の直情勁行に、陰影が出ないか。

◇河合氏　の華麗にコクが付かないか。

い）を完全に演出し得るものは新派を措いて他にないと思つて居る。眞に新作脚本をゆだぬべきものは新派の演技に待つより他に仕方が無いと思ふ。

一座には一座の俳優があつて、かりによい新作物を上演するとすれば、多くの人が無駄になつたり芝居がさびしくなつたりするので、これを見物側から云へば三頭目の一人が、ほんの仕出しに等しい一役で一日の芝居を了ると云ふ事は物足りまいし、興行師側から云へば、大枚の金を支拂つて使ひ道のない俳優を養ふ事も出來ない事になる。そこで私は一ッに此のやうな座つき作者の復活を呼び度いと思ふのだ。座つき作者と云つても在來のものでなく、眞に新派を知り、眞に多くの俳優を活用して、最も面白い最もいい脚本を書く事の出來る劇作家の出現を望んでやまないのだ。

新派を論ずる人々で、本當に新派全盛期の芝居を心得て居る人々はそんなに澤山ないと思ふ。只新派と云へば現在殘つたものをのみ指して云はれるやうだが、月給三十圓から新派のおかげで怎うにかなつた私としては、一概に興行師と云つても、安來節の興行師に歌舞伎芝居はいぢれないし、曲馬團の興行はいかに松竹でも出來ないやうに、今の興行師中、本當に新派をいぢつて育て上げる人も全く尠くなつたと思ふし、同時に作者側から云つても、本當の新派の作者で一作毎に何等かのムーブメントを起すと云ふやうな人は、紅綠先生以外に一人もないと思つて居る。これは、外界から見た新派であるが、俳優側から見れば、三頭目中二頭目は女形であり、伊井さんは、之から所謂新派とは全く獨自の天地に一座を救つて居られた方であるので、現在の座は少しも統一がないとしか見られない。いつも云ふやうだが、高田さんの時分は、本當に統一されて居た。脚本が氣に入らないで、お正月元日の芝居を十五日に延ばしたやうな偉大な勢力もあつた。がこれは要するに芝居を愛すると云ふ考へか

井上康文

新派劇が沈靜してゐるといふ寂しい言葉をきいて、もうかなり久しくなります、が最近、伊井、河合喜多村の三氏が合同して新派劇のために氣勢をあげてゐることは嬉しく思ひます。『艶物語』や『俠艶錄』等を見たときの愉快さを思ひ出しながら、それを再び見ることが出來なくなつた（さう云ふといかにも現在に望みをもつてゐないやうな言ひ方ですが）のを寂しく思ひました然しまだこれからずつと三氏は新派劇のために働いてくれることゝ思ひます。今迄觀たものをはつきり思ひだせませんがとにかく新派劇の本質的な特味を捨てないことです、新派劇は決して現在の大衆から捨てられるものではなくむしろ歡迎されるものでせう、それは伊井、河合、喜多村の三氏の上にかけられてあると思ひます。

十菱愛彦

伊井蓉峰、河合武雄、喜多村錄郎共にその持味があります。この三人が今度合同興行すると云ふことは兎に角にも興味ある觀物でせう。然し今日の三優としては更に時代により深く食ひ入つて行くべき他の問題

ら出發した事で、正月だ見物は來ると云ふ目先の考へから、腑に落ちない脚本をやつて、新派永遠の問題を忘れる事は出來ないと云ふ考へからであつたらしい。

目下の支那は丁度日本の新派のやうなものだと思ふ。見物は何を信じ何をめあてにしていゝか分らない。俳優個々の力は認めて居るが、その演出は信じられない、脚本は更に信じられない。全く怎うしていゝか分らずに、只々偉大な力の出現を待つて居るのだと思ふ。

「三成にすぎたるものが二ツあり、島の左近に佐和山の城」

と云ふ歌があるさうだ。高田さんは大阪で、月給百圓の時に、太夫元に嚴談して、某作者を月給百圓以上で招いた事があると紅綠先生に伺つた今、それ丈の作者もあるまいが、それ丈の俳優の度量と思慮とがあるか怎うかも問題である。

私は新派の上に只大きい力がほしい、その力が何事をか爲し遂げられると思つて居る。

高助

『砂繪呪縛』

に出て來る人物の性格

土師清二

元祿年間のこと。有名な『柳沸騒動』の時の五代將軍大公方綱吉の時代にあつた話である。綱吉は自分の妾腹鶴姫の婚である紀州綱教を六代將軍にしやうとした綱吉が行つた生類憐憫の令のため寺院を建立などしたので非常な失費で幕府の財政疲弊の極に達したので

がある筈だと思ひます。過日劇壇に就いての某合評會の時にもその問題が出たのですが――。旅行より歸り匆々以上にて御免蒙ります。

山口草平

拜復　伊井、喜多村、河合三氏に對しては多少の感想を持つて居りますが目下多忙を極めてゐますから遺憾ながら次ぎの機會に申上ます。　早々

石割松太郎

『新派の凋落』といふ言葉は使ひ古して申し飽いた位ですが、事實だから仕方がないで、新派三頭目を個々に見ると立派な俳優です、上手な役者だが三頭目の合同には面白い芝居はもう望めません。この三頭目を無條件に動かせる作者と興行師があれば別ですが、然らずば三頭目を集めては面白い芝居は出來ない。一例がこの間見た『京の島原』の大詰の伊井と河合との行き方があれです、あれでは統一のある芝居は望めないぢやありませんか。今度の大合同に私のこの言葉を取消すやうな芝居を見せて下さい、新派の將來のために。

柳澤美濃守吉保は通用金を殖やさうとして金銀の吹替を計畫し、大阪城にある黄金棒竹流し分銅を江戸へ運んで通貨に鑄直さうと計畫した。水戸光圀は紀州綱教の西の丸入にも反對し竹流し分銅鑄潰しにも反對した。そして甲府綱豊を六代將軍に立てやうと間部詮房と謀つた。そして天目黨の人々を養つた。柳澤はそれに對抗して柳影組を養つた。こゝに砂繪呪縛の物語は生れる。

『砂繪呪縛』に出て來る人物の性格について極く大雜把な感じを言へば、僕の考へてゐる脇浦孫之丞は僕の理想的な武士である。非常に腕は立つてゐるが、情もありそれに大義名分が非常に判然りして居る男だ。それに配してある露路は清淨無垢で、運命のまに〳〵從ふてゆく女で、決して人を恨むことを知らぬといつた樣な娘だ。

お酉はもとよりバンプ型の女だが、是れも例へて言へば、倫落の淵に沈んでゐてもまだ何處かに女としての羞恥心を持つてゐる女である。森尾重四郎は、作者自身でも得體の知れぬ性格の男である。一面から言へば、非常に人生に退屈してゐるといつた風な人間である。目明しの米吉は、これも眞面目一方な律義者だ。同じ目明しの紋吉は、所謂小惡黨でやゝ三枚目がゝつた男、砂繪師の藤兵衛は名人風の男で、この藤兵衛はお酉に執心してお酉を追ひ廻すことになつてゐる。だから普通一般の名人のやうに飄逸な男ではない。

黑阿彌は惡の權化である、鳥羽勘藏は、先づ度量の太きい男で、親分肌の男だ。

以上が作者が書き乍ら始終考へてゐる各人物の性格である。

今度の東京に於ける伊井、河合、喜多村の合同劇に依つて上演された『砂繪呪縛』は殘念乍ら未だ觀てゐないので、何とも言ふことは出來ぬが、然し凡てお芝居の活殺權は、勿論脚本そのものにも據るが、俳優が是れを握つてゐるといつてもいゝだらう。だから僕の芝居が、どんな風に上演されてゐても、原作には少しも痕がつかない譯である。

然し僕は、喜多村氏を知つて居る、新派の三頭目なるものを信頼し切つてゐるから、僕の期待してゐるやうなものが觀られることゝ想像してゐる。

楠田敏郎

伊井、河合、喜多村三氏のことについては、機會のある毎に書いて來ました三氏がもう一度新派の全盛時代に返さうとしての努力はまことに涙ぐましく見られます。けれども、斷じて云ふなれば總ては、現在のまゝであるならば無駄の努力ですよ、本郷座、帝劇、公園劇場と、すべてを見て、私はそれを云ひ切ります。

新派は、――三氏は、たゞ苦しんでゐるだけで、打開すべきその道を知らないでゐるやうです。好い作と、好い演出者を先づ要します、問題はそれから先きにかゝります。

小島德彌

私は新派の芝居をあまり見てゐませんが、劇場外の或るところで、伊井蓉峰氏と圖らずも面接したことがあります。その時、氏はから歳を取ると駄目ですなと云つて笑つたが、實際、舞臺で見て想像してゐたより老けてゐるのに驚きました。同時に、あの年齢でゐながら舞臺に立つと水々しい色男となつて魅力を見せるのを感服しました

浪花座十一月興行上演

芝居小說

嘲笑

福隅一孝

この秋ぐちに入つてから、今日は何日にない快晴で、のんびりした靜かな小春日向の陽が、庭に向つた硝子窓を透して、睦まじそうに語り合ふこの室の男女に注ぎかけてゐる。

遠くから流れて來る長閑なピアノの音律も、この樂しい物語りを悅樂の境に入れる伴奏に、この二人には聞えて來るのである。

『いやですわ……』

羞かみを半分見せて、男の腕に抱かれた女はまだ若かつた。

お光は、元々この家に小間使ひに上つたのだつたが、妻を亡くした庄吉は、老衰を酷く恐れて、まだ二十歳にもならないこのお光をその母親に所望して以來、お光は去年頃から、庄吉の小間使とも、この年寄りの餘生を樂しませる妾ともなつてゐたのである。

『ハヽヽヽヽヽ一年と經たない中にお前もすつかり大人になつたな……實際私もお前を花嫁のやうに思つて、自分でも此頃は、年なんか忘れて二十時代の花婿になつてゐる氣持だよ』

庄吉はお光を抱えた手をグツと締めて、美しい顏を今更らの樣にしげ〳〵と見入りながら、ニタリと笑つた。

『ね……』

お光は、庄吉の膝の上に手を於て甘まつたれた。

『私しも本當を云ふと、斯うなつたら、何處へもお嫁なんかに行けやしませんし、又行く氣にもなれませんから、どうぞ御見捨てなさらない樣にね……』

若い自分の娘の樣なお光に、こうされる事は庄吉に取つてひどく嬉しかつた。

『馬鹿な！　見捨てたりなんぞするものか、お前には、一生傍にゐて貰つて世話をして貰ふと

佐々木千之

新派といふものに私がやゝ興味を覺えた時にはすでに凋落の兆があり、間もなく消えたやうになつてしまひましたので、之といふ感想もありません。たゞ私は三人の中で、喜多村さんの深みも幅もある藝術には感服してゐます。先般ラヂオで井上正夫さんとやつた鏡花氏のものゝあの太夫も立派でした。女優などでは行けない女の『眞』といふものがつかめてゐます。

大平野虹

三頭目といふ――いやに征服的なその名稱からして僕の氣には入らない。頭目であらうとなからうと、本質的に優れた藝術を持つて居れば、それで生命がある筈で。その意味に於て三人の合同といふことは、單に興行的に見て團體的に滅びて行く今の新派を更生させる手段といふ以外に何んの意義も見出せない。それは惡い企圖ではない唯衷心から望むところはこの機會に於て三人各自が從來の如き自我を出さずに、綜合的に統一された舞臺藝術を尙更に優れたフレッシュなものを見せて貰ふやうに努力し

思つてゐるんだよ』

『でも、他にまだ二人も三人もお妾さんを圍つてゐらつしやるんじやありませんか。私し知つてゐますわ』

『誰、誰れがそんな事を云つたのか、馬鹿々々しい、そんな事があるものか、私は實業青年矯風會の會長だ、そんな事をして若い者に訓しか附かん、そんな事は事實無根だよ』

庄吉は少し周章て辯明した。そしてこの若いお光の氣をまぎらす爲めに、逗子へ遊びに行かうと云ひ出して約束したが、矯風會の演說に行かなければならぬ事で、それも止しになつてしまつた。

庭に訪れる二三羽の雀は、夫婦か親子のものか、樂しそうにさへずりながら、開放されたこの廣い宇宙を我が物顏に、飛び廻つて遊んでゐる。

引きつけられた樣に、凝つとこの狀景を見てゐたお光の眼には、やがて何故か、涙が潤んで來た。

庄吉は、この雀の戯れを愉快そうに眺めてゐた。

『御免遊ばせ』

襖の外から突然の訪れ客である。

二人は驚いて我に返つた。

『誰れ！』

聞き覺へのある女中の聲だと知るとお光は中から何の用かを尋ねた。

『御新宅の奥樣が、一寸お目にかゝりたいと仰しやつて入らつしやいましたが……』

『そうか、此處へ通してくれ』

庄吉が、形を直して、こう云ひ終るか、終らぬ中に入つて來たのは、興奮した娘の清子だつた。

お光は、どぎまぎしながら挨拶もそこ〳〵にしてこの室を出て行つた。

『お父さん、私しはもう氣が狂うかも知れません！』

こう云ふ言葉も、ヒステリツカルである。

『どうしたと云ふんだ』

『とう〳〵宅はお妾のお千代を家へ引ずり込んで了つたのですよ……お父さんの眞似をやり出したんですよ』

清子はその場に泣いてしまつた。

そして、泣きじやくりながら、口早に言葉を續けた。

清子の良人は、養子だつた。そして華旅の次男坊だつたのである。

てほしい、それは三人の心がけひとつにあることだ。

高原慶三

美男、美女の觀念が明治時代とすつかり變つてしまつたのですから昔はずいぶん騷がせた伊井君のイナセ、喜多村君の粹、河合君の仇つぽさなるものが今の世にどれだけ價値高く通用することが出來るか、甚だ心細いことと思ひます、まつたく世の中が變りましたねと挨拶するより仕樣がありません、甚だ愚感ですがこれで御免下さい。

木蘇毅

伊井、河合、喜多村三氏は久しく見ませんが、この頃どんな新派の脚本を上演してゐるのでせうか。若し在來の型にはまつたもののみをやつてゐるとすれば、時代から次第に遠ざかつて行かねばなりますまい新聞の連載物なぞも最近になつて以來とまるで違つて來ましたが、これ迄新派劇が新聞の連載物を大分上演して來た(脚色して)のにならつて今日のさうした讀物を劇化して彼等が上演するならば、それも明らかに彼等を生かす一つの道になるかも知れないと

その良人の孝介が、お千代と云ふ妾を圍つて置いたが、清子は、外で圍ふのなら、自宅へ連れ込めば經費も違ふし、お千代の教育も附けようからと云つた。

清子はこうも云つたら、良人の妾狂ひも止むだろうと思つたのを孝介は、それを本當に引き入れたのである。

『ね、お父さん、私の生命を助けると思つて、それから孫の行末の爲を思つて、あの妾を追ひ出す樣にして下さいよ。私一生の御願ひですから矢張り自分の娘は可愛かつた。庄吉は、早速孝介を呼びつけて嬌しをすると誓つた。

「若し良人が、何うしても、お父さんの仰有る事を聞かないと云ひますなら、お父さんが一つお手本を出して下さいな、……あの若い妾を追ひ出すからつて』

庄吉は、苦い顏をした。

『まア〳〵私に任せて置け』

清子が猶くど〳〵と說き立てるのを、

『まア〳〵』

と、歸して後、庄吉はお光の事を色々と考へて見た。

この話を立聞いたお光は、自分の身の不安に怯やかされて來た。そして、庄吉がどんな氣持でゐるかを試して見たのである。

庄吉も遂に、自分の年を知つてゐた。

金で縛つた體！とその魂！

これを考へると、寂しくなつて來るのである

何も彼も、スツカリ忘れて了つて、若い男と女とが夢心地になつて戀をしてゐる樣な氣で、二人で暮す日が何時迄續くか？……

『馬鹿々々しい、私はもうそんな時代は、昔に過ぎ去つたのだ、ずつと昔にな、ハ、ハ、……』

寂しく笑ふその眼、その口、その凡てが、凡ての執着を捨てた本當の庄吉に返つた時の表情だつた。

『だつて私は若いのよ——』

媚びるやうな、潤んだ可愛いお光の眼を避けて、この若さの誘惑から遁れようとした。

『うむ……お前だけは若いんだな……』

こう云ふ言葉も重苦しい。

『いゝえ、貴方も、……ねえ、貴方も…よう、ね、……』

いきなり庄吉の首筋に縋りついた。

世間の娘なら、肩上げもまだ下ろさない年頃のお光が、常に深く刻みつけられた、庄吉に對する責任觀念と、親娘のこれから先きの生活の苦しさを恐れて、心ならぬ心をわざと燥いで

思ひます。

水木京太

所謂新派芝居の傳習的舞臺には閉口して『新派』の頽勢も當り前だと考へてゐますが個々の役者の技藝や天禀には多く推服すべきものがあります。三頭目といつたところで、三人寄つて文朱の智慧を出したのがもとの新派芝居では有り難くありません。うまい役者が三人寄つて出直して新しく芝居をするのではじめて期待を持てるわけですこの間淺草でならべたやうな狂言で大入りを取つたつて誇りにはなりません。今迄に『新派』さへ知らなかつた人達に、安價で『新派』を見せただけの話で、數をつゞけたらその人達にだつて飽かれるのが必然です。

——三頭目もたゞすぐれてうまい、三人の裸の役者になつて歩いて貰ひたい。いつまでも『新派』の三頭目でゐるなら、もうわれ〳〵には無用の人です。

津村京村

新派の大幹部が顏を合はしての芝居といふと、矢つ張り新派らしい出し物を選んで大いに新派らしく堂々とした芝居が見たい

見せたのである。
襖がサアと開いた。
『アッー』
二人は極度に驚愕した。取り亂した風體を直しても、もうそれは遲かつたのである。
「突然入つて來て、御邪魔ぢやありませんでしたか？」
そこに立つてゐたのは、意見をする爲めに呼び付けた孝介だつた。
二人は、何んと云つて好いか挨拶に困つた。
孝介は却々の通人である。
二人の氣持を反らせなかつた。
『イヤ、私への御遠慮は入りませんよ……お光さん、まア此處へお掛け……あんたは、よくお父さんの世話をして上げて、くれるそうだね、蔭ながら皆で喜んでゐますよ』
お光はもう、此處には居堪らなかつた。
『ハイ……一向行き屆きませんで……一寸……
……』
と云ひ乍らこの室を出て行つた。
『幸介、お前も相變らずで困るぢやないか』
冒頭がこれである。そして清子からの話を進めた。
『お前は妾を家へ引き入れたと云ふぢやないか怪しからん話だ』
庄吉は威嚇的に云つた。
孝介の返辭は突拍子である。
『お父さん、あのお光は却々別嬪ですね、彼女は餘程貴方の御氣に入つてゐるそうですね』
庄吉は苦り切つた顏をした。
『そんな事を聞いてゐるのぢやない！、お前何故、妾なんかを家へ引き入れたんだ』
孝介は上の空を裝つてゐる。
『お父さんは實業青年矯風會の長ですね、お父さんの一言一行は我々青年が模範にしてよろしいんでせう』
話はてんで出來なかつた。
それでも庄吉は無理押しに理屈をつけて話をした。
『今の妾を追ひ出して了へ緣を切つて了へ、養子の分際で怪しからん』
烈火の如き怒りを見せた。
『その事ならもう御返答をしてゐます。お父さんが……孫のやうな妾の緣をお切りになつたら……』
孝介は、煩しい問答は不必要と眷を向けて出て行つた。
『馬鹿者めが！……やくざ野郎奴が！』

ものだと思ひます。近頃時々見受けますが新派の大芝居にまで流行の大衆文藝的脚本を演るといふ事は、自ら新派の立場を失つてゐはしないかと思ひます。要するに新派は新派として時代と共に動いて行く道がある筈だと言ひたいのであります。

大森眠歩

あへて新派に好意をもたないとはいひません。けれども私が新派に強い魅惑をかんじてゐないことは慥かです。
これは新派が私を牽引すべき何ものかゞ足りないのか或は私が鈍感でソカラズヤなのか、いづれにしても私と所謂新派とは今のところ、あまり交渉はないやうです。
以上は直接の質問である三頭目へのお答へには觸れてゐない、といはれても仕方がありません。私は故意に觸れることを避けたのです。敬遠ではありません。ほんとうの意味の敬意からです。

永田龍雄

新派のくさみが身について居る三人にはもう今日の新らしき感情の劇をやることはむづかしい、あれだけの藝をもちながら藝

庄吉は孝介の背後から罵聲を浴びせた。

『あらくすぐつたいわ……まア御戯談を……ホ……！』

お光の金切聲が聞えて來た。

それと同時に、男女の入交つた嘲笑の聲が流れて來る。

庄吉はもう堪らなく、その邊を歩き廻つた。

『チエツ！　人を馬鹿にしやがる！』

いらだゝしい鈴の音が庄吉のもつれた頭に激しく響いた。

清子から安否の電話である。

庄吉には、もうこの場合どうして好いか解らなくなつて頭を抱へた。

先刻のか、別なのか、矢張り二三羽の雀は、樂しそうに庭を飛び廻つて囀ずつてゐる。

そんな事があつてから、數刻經つた頃だつた孝介の邸の應接室に、お千代も孝介も居る處で清子は、父の庄吉が清子の前でお光に暇を出す事にして來た事を話してゐた。

『ヤ……茲に皆お揃ひだな』

先刻とは別人の樣に氣輕に入つて來たのは、父の庄吉だつた。

そして面倒なお千代に場を外させて、妾追ひ出しの話が持ち出されたのである。

『清子から話をしたであろうが、私は自分の地位とか身分とか云ふものに對して、よく〳〵思案した上でお光に暇をやる事にした。だからお前も一つ、人の父とし又良人として、反省して貰ひたい』

庄吉がこう云ふのも、孝介には眞實に受け取れなかつた。

そして色々に疑つて見たのである。

『それでは何んですか、お光の手切金の五千圓は、もうお渡しになつたんですか』

庄吉はギヨツとした。

『何を馬鹿な事を云ふ、手切金をそんなに出すいはれはない』

こう云ふ言葉も、しどろもどろである。

お光を庄吉が、お光の母親に所望した時、手切金五千圓の契約書が入はつてゐたのだつた。

それを知つてゐた孝介は、茲を突込んだので、あるが、相手はどこまでも白を切つた。

それのみか、お千代を追ひ出す事を二言目には云ひ出して急いだのである。

孝介は最後に人格を傷けられ、お前は種馬に過ぎぬとまで惡罵された。

もうこれまでと思つた孝介は、この家を出て

田中芳哉園

伊井は正倉院裂である河合は西陣のお召である喜多村は古渡唐桟である伊井は天目である河合は白高麗である喜多村は伊羅保である、斯くした觀察から三頭目とそれに取合はせる役々を考へたならば三頭目をして當年の憶氣を再たびせしむる事が出來やうだが正倉院裂が何だか、西陣のお召がどう迎へられて居るか古渡唐桟の味がどうあるか、殊に天目は天の眼かなんて謂ふやうが藝を相剋して居るからである、どうもがからがあせらうが彼らはあれだけのものである、彼らの技藝には時代とともに進む素直さがなかつた、あたまがなかつた、三人が淺膚なる通俗小説の大アマのみを舞臺にかけてきた身の困果は、今日、彼らの頭上に新派の落莫たる秋風が吹く事になつた。

大衆を對象にするのは劇の責任である、が、三人は大衆に媚び過ぎた、澱める水に清らかな流れをそゝぐことを忘れて居た、三人は新らしき時代の感情を背馳をしてしまつた、彼らのもつものは舊時代の感情の殘滓のみである、また何をか言はんやである。

行く氣配を見せたを清子は慌てゝ、この父の言葉を打消して歎願した。

然しお千代はどうしても追ひ出したかつた。親娘して、お千代に暇を出すからと云つたのを孝介が、あくまでも庇い立てた。

お光が突然訪れて來た。

庄吉は事の以外に驚いた。

『別に何も用はないだろう』

何事も云はせまじき庄吉が豫防線なのである

『お前は暇を貰つたそうだな……そして手切金を貰つたかい』

得たりと孝介の突擊戰である。

『あゝ、それも濟んである、なアお光……』

『ハイ、實は母も、いろ〳〵私の行末の事を案じまして、矢つ張りこの際、綺麗にお暇をお貰ひ申して、私しは婿を取つて地直な商賣をする方が、先々も安心だからつて强つてれう云ひますので……』

庄吉すつかり自論んだ狂言が外れて驚いた。

『コレ〳〵てんな事を今、こゝで云ふ奴があるか、そんな話は……』

うろたへの來た父を尻目にかけて、孝介や清子は、お光に同情し尤もな事と贊成をしたのである。

『お父さん、手切金はまだ濟んでゐないのですね、それはいけない』

孝介がなじる言葉も耳に入らず庄吉は逆上せんばかりである。

貴樣！　金に目がくらんだな！

お光に未練を充分持つてゐる庄吉は思ひ切れず、場所柄も忘れて叫んだ。

清子や孝介は、父をなだめて置いて、とう〳〵手切金の五千圓も拂はせた。

この上はお千代の處分について急ぎ出したのは庄吉と清子である。

『お父さんと私とは違ひます。あの女は忌々乍らお父さんのやうな老人の介抱をしてゐたのですが、お千代はそうじやない。心から私の世話になつてるのですよ。夫婦關係だつて、金錢でつないでゐるのは賣淫です。妾と名がついてゐても、愛情で結ばつて行く間は神聖です。それを同じ杓子定規で行くもんですか。だから子の教育の爲めにならんのなら、元の通り、別宅を持たせます。それでいけなければ、自分で暇を貰ふ事にしてもよろしい』

庄吉は地駄んだを踏んだ。

清子は良人の出て行かれる事をひどく怖れた

清子はどうして好いのか解らなかつた。父の

な白高麗とは白い高麗狗か伊羅保とは溫泉でも湧ところかなんて謂ふやうな所謂鑑賞家劇通などの謂ふ事を聞て居ては滅茶苦茶なものが出來やう自分等は當面した識貴家では無く門外のものであるから比較的ほんたうに見へて居ると信じて居る、天目、白高麗、伊羅保、此取合せを一席にして堪納するほどな茶が喫んで見たい。

大橋瑛兒

三頭目の來演は誠に結構です、然し昨今新聞紙の傳ふる處を散見するに目下公園劇場で當りをとつたお鯉物語と砂繪呪縛だと既に新聞で讀んだものを又新しく見る必用はないと思ひます無論脚色にもよる問題ですが要は在來新派の芝居なるものは藝と脚本の新作を觀賞するもので決して役者を見にゆくものではなかつたのです、舊派はその反對で役者を見に行きその役者の都合でツラネとかダンマリで一流役者の揃つたのを見せたものです、ですから別に東京で當つた右狂言を持つてお目見得の必要はないと思ひます、三頭目に望むのは全然新機軸と新しい時代に合致した演出を一般が要求してゐるのです。

庄吉は矯風會から急かれて演說會に出て行つた

『矢ッ張り別宅にするよ』

『いけません〳〵』

清子の聲は、もう慄へてゐる。

『ぢや、このまゝ當分行かうか』

孝介の詰め腹斬らす口上に、清子は詰つて返事が出來ない。

『この儘で行くのなら機嫌を直して、サア仲好くしろ』

夕餉の仕度の報せに、お千代と清子の二人を押やつて、

『ハハ、、、……』

孝介は、思つ切り大きく嘲笑した。

戸外の遠くで知つてか、知らいでか、子供の嘲笑が反響する樣に聞えて來る。

『オヤ、外でも笑つてやがる、已の事かな』

孝介は凝つと頭を押へて考へ出した。（完）

新派三頭目に對しての感想

井手蕉雨

「所謂」と上へつけるかつけぬかゞ問題の岐るゝ所であります。私は――すくなくとも私は「所謂」をつけずにながめたいと思ひます、何んといつても昔とつた杵づか三頭目には三頭目の立派なうでが有ると信じます、今雌伏のかたちなのは、これこそ所謂時に利あらざるもの歟。

佐藤綠葉

古い昔、新聞小說を脚色したものを此人達が演じたのを一遍か二遍見たきりです。其當時は自分の氣持は勿論、一般の見物がどんな氣持であゝした物を見物してゐるのか解らなかつた位ですから先づ何の感銘も受けなかつたと云つてよいと思ひます。其後この人達も定めしさま〴〵の方面で努力して來たことでせう。その事を知らないから何も云へないわけですが、たゞこの人達が吾々と全然別な世界を歩んでゐるのは事實のようですいづれにしても日本人の國民性と、吾が文化の普及の狀態とをよく考察して吾が劇界新領域の開拓に相應な功績のあつたこの人達が、今少し有意義な世界を見出すことを希望して已まぬ次第です。

風早次郎

特別に感想と云ふほどのものを不幸にして持ち合せてゐません。それに私は、今の新派劇に對しては、それほど深い愛着もなく、期待もしてゐないので、右の三氏に對して、これこれ云ふことを控えたいと思つてゐます。

然し河合氏にしろ、喜多村氏にしろ、春秋に富む新派劇のために、ふみとどまつてあくまでも奮鬪してゐられることに對してだけは、涙ぐましいほどの敬意を拂つてゐます。

中山重孝

ひとしく行詰てゐるといはれても、歌舞伎劇は三百年以前の思想と今日との變遷から推理しても、或は當然とうなづかれるふしもありませう。新派劇は漸く三十年以前にうぶ聲をあげたものです、それが早や行詰つてゐゝといはれる事は、餘りに凋落の太甚しいのに驚かされるばかりです。

伊井、河合、喜多村が新派の三頭目といはれるまでの過去の貢獻に對しては敬意を表しますが、こゝには氣永に頌德の辭を呈

浪花座十一月興行上演（泉鏡花作）

婦系圖（鸚鵡石）

湯島天神境内

主税　（立つたまゝ）お前の方から、いやなら私の方から縁を切る。

お蔦　えゝ、縁を切る、いや、いや、そんな事はいやですよ（主税の傍へ來て上手のベンチに腰かけさせる）貴方、鍛から棒に別れろの其方が別れなければ此方から縁を切るのつて云ふのは隨分自分勝手ぢやありませんか、私こんな事を云ふのは愚痴の樣に聞えて嫌だければ、私柳橋を出て來る時、裸同樣の姿で出て、お友達にだつて肩身のせまい思ひをして、お赤飯一つ配つて出たんぢやないんです飯田町へ行つてからだつて表向に逢えるは、め組の位のもんです、アトはお客さえ云へば、オマンマの時でも逃げ込んで隱れなきやならないし、シヤミ箱一つだつて梯子段の下へ突込んでかくして置かなきやならない樣な苦勞をしても私や、嬉しく暮して居りました。それと云ふのも、いつか一度は假令一日でも世間晴れて、早瀬の女房と云はれ度いからぢやありませんか、それに切れるのつて私に何の落度があるんです、惡い事があるのなら謝ります、私はあなたに縁を切られる覺えはない（と考えて）今になつてそんな事を云ふのは、あなたは、私に俺が來たんですか。

主税　おつた俺は決して薄情ぢやない、誓つてお前に俺きはしない。

お蔦　俺きられてたまつたもんですか、そんなら何故そんな薄情な……切れるの別れるのつて、そんな事は出て居る時に言

してゐるよりも、いかにせば新派劇は時代に適合し運命を開拓するかといふ速たゞしい責任感に奮起してほしいのです、時勢の罪だから仕方がないといつてしまへば、新派劇を滅す者は代表者たる三頭目の無自覺にあると斷言します、妄言多謝。

丸山　耕

一、新派三頭目を評して往々新派の常道を脫せぬのが不可ぬと云ふ人があるが、それこそ新派の常道を眞に知らぬ人の言ひ草です、新派には他派の追隨を許さぬ得難い立派な常道があります。

二、觀客と俳優との心持を兼ねて新派の諸君に他の芝居を成るべく多く見て頂くことです。

三、三頭目は固より幹部格の人達が動もすると新派の甦生とか復活とか云はれますが、それは自己の藝術を侮るものです。今後禁句に願ひたい。

高谷　伸

新派から新劇へと時勢は移つても伊井河合喜多村の巧さに變りはありませんがどことなく明治の俳優不如歸通夜物語金色夜叉

ふ事です、今の私にはいつそ死ねと言つて下さい。

主税　朝眠を覺ませば、俺より先に臺所で夜寢る時には、俺より後に灯りの下で針仕事、心配さうに煙管をついて考へると見れば お菜の献立、味噌漉で豆腐を買ふ後姿を見るにつけ、別れてくれとは言へなかつた。まして先刻今も、今、優しい事、嬉しい事、可愛い事を聞くにつけ、背後から欺し打ちにするような、岩か女能かで身を打ち碎かれる樣な思ひがして……よくせきな事と諦めて切れると承知をしてくれろ。

お蔦　ですから死ねと言つて下さい……死ねならあいと返事をするわ、私しや命が惜しくはない。

主税　さア、その命と俺の命を、二つ合せても足りない大事な方を知つてるか、お前が神佛を念ずるにも、先づ第一にお願ひすると言つた言葉に嘘がなければ、言はなくとも分るだらう、そのお方の言ひつけだ。

お蔦　えゝ、それぢやあなたの心でなく、さう仰有るのは眞砂町の先生が……

主税　俺は死ぬにも死なれない。

お蔦　諦められない、もう一度泣いてお膝に縋りついても、是非ともしようもないものか。

主税　實は柏家の奥座敷で、胸に匕首をつきつけての御意見だ、たとい焦れて死んでもかまわん、俺の言ひ付けだと仰有つても、二の句はつゞかない、俺も傍に居た小芳さんも泣き倒れたよ。

お蔦　まあ死んでも構はないと……死ぬまいとお思ひなすつて……小芳さんの命をかけた、譯知りでゐて水臭い、女の情を御存知ないが……私し死にます、身に憧れて死んで見せますわ。

主税　勿體ない、意地で先生に楯をつく氣か、待て、落付いて、死んでも構はないと仰有つたのは先生だけれど、女を捨ると言つたのはこの俺だ。

の人といふ氣がすると同時にこれらの演技にかけては又獨歩の人でせう。これは單にもう古いといふ意味でなく私たちにとつて一つの忘れ難いなつかしい時代をいとほしむ心からきた愛着です。それがきざそのものゝやうなモボやモガに扮するに適しなくても三人には誇りともなれ恥辱ではないでせう。またそれら明治時代の劇でなく所謂大衆劇時代劇などゝいふ劍刄亂闘のものでも、出ッ尻屁つぴり腰の武士俠客の大立廻りの怪しげなので、はらはらするより伊井の吉良の仁吉喜多村の大瀬の半五郎また河合の冬木心中のお仙などがどれだけ安心して見られるかは申すまでもありませぬ。にも拘らず所謂三頭目の不遇次第に甚だしきは自ら省る所に缺くる點があるのではないでせうか。

小林愛雄

新派の頭目である三氏の舞臺を久しく見ませんから今日の境地を申上かねますが、これを植物にたとへると、伊井は葉河合は花、喜多村は實で三氏が一座してこそ花も實もある舞臺が見られるでせう。

『原田甲斐』寸言

行友李風

仙臺騒動の原田甲斐の刄傷顚末、騒動の内容は兎も角も、刄傷の一部分だけは是非書いて見たいと思つて居た。

ソコへ丁度、新聲劇から何か金襖物をとの相談にあづかり、早速三幕に取纒めたものゝサテ、伊達騒動といへば芝居道の米櫃、夙に加賀、兩越、黒田と併せて舊幕の五大お家騒動なぞと箔附けられて居り、院本では遠く延享の『大鳥毛五十四郡以來、安永では伊達競阿國戯場』となり天明では『伽羅先代萩』となり、純脚本としては明治九年に『早苗鳥伊達聞書』所謂仙臺の實錄となり爾來『毒茶の丹助』『道益殺し』『袖ヶ浦の綱宗』『白川頼母』と次から次へ續出し、新派劇では故人高田實が上演し、最近では澤田氏の新國劇において演じられ、隨分斯界を賑はせて居る。

騒動の本體に就ても近來頻りに、專門的ないろ〳〵の著書もあるやうで、黒箱の眞相だとか、深谷領地事件、或ひは淺岡松前抹殺論なぞと至難い詮索も行はれて居るが、今度の脚色は直ちに然うした本體の解釋を下さうとするのでなく、大老役宅における甲斐の刄傷といふ點を主眼とし、加へて甲斐といふ人物の心持の半面を描き出さうといふ企て、勿論愚作、散漫不徹底の譏りは免れないと豫期しつゝ。

隨つて刄傷の手順、及び情景が在來の多くの作に比べて、拙いながらに全然その趣きを異にして居るだけは間違ひのない話、甲斐が安藝を殺したか、安藝が甲斐に殺されたか、忠臣と不忠臣との突き詰めた心の一致、ソコに幾らか違つた解釋を試みやうとしたので、配役いづれも至極その當を得た物だと、作者も大いに意を强くして居る。

劇壇縱横

住田朝郎

×

藝術劇場の著者シエルドン、ケニイの説く處に據れば『單に利益のみを目的とする營利的の演劇でなく藝術本位の演劇に於ては、先づ第一に、舞臺全體に精神的統一が必要である』と言つてゐる。勿論、然うである。だが營利主義の演劇に於ては更に、精神的統一が必要であることは論を俟たない。

×

澤正の新國劇一座の歩一歩と目醒ましい進展振りは、全く精神的統一に依るものである。併し、單に精神的統一のみに依つて劇團の發展を期することは出來ない。

×

演劇は民衆より一足だけ進んでゆけばいゝ。

×

だが、餘り彼等より進みすぎても不可ない。つまり新國劇の『劍客商賣』に於ける娘や息子の親達であることが必要だ『劍客商賣』は愚作である、だが、これを上演したのが澤正であつたゞけに、其處に何等かの暗示を與へられた即ち『劍客商賣』は民衆より一歩だけ進んでゐる彼自身を象徴したものだ。

×

近頃一隨分もつて冷汗ものは、昭生座に於て『金色夜叉』が上演されたことだ。成程、昭生座は創立以來の不入り續きで座員一同の苦闘振りは、見るも痛ましい程氣の毒であつた。が何も澤正に依つて上演され、宣傳された同脚色者の『金色夜叉』を、然も新國劇の開演中、軒を並べた道頓堀に於て上演するのは、少々ばかり厚かましい過ぎはしないかと、他事ながら氣になる次第、成程、開演中は大入滿員で結構であつた。興行的には稀有の大成功だつた。だが、だが。然し！何故!!如何して!!!何を演らうと、それは演る者自身の自由ではあるが、もつと奇麗に胡魔化しの利く手段がないでもない『金色夜叉』の變りに『不如歸』もあれば『乳兄弟』もある。まだ〳〵其他に澤山……

×

寫實的演出は、確に觀客の胸に迫るものがある。が、然しそれは結局三面記事的興味であり、たゞそれだけのものである。演劇は誇張された藝術であり、誇張が演劇の生命である歌舞伎のすたれない理因は此處にある。

×

民衆に媚を賣る笑賣婦的演劇は滅亡する、が、自瀆的演劇（所謂自己滿足、藝術至上的）も滅亡する。自己に忠實であることは、民衆に忠實であることだ。よき標語『帶に前車と後車との中間を運轉せよ』然り、而して『演劇は民衆の乳房である』

×

觀客の欠伸が恐ろしい、其處で、映畫のやうに何幕十何場幕無しといふ肩書つきのお芝居を見せる。だが、如何なる幕無し芝居でも映畫には追つかない、其處で一體如何したらいゝかといふ問題に逢着する。一を知つて十を知らぬの愚だ。無駄な努力を止めよ、骨折り損の草臥れ儲とはこの事だ。映畫にはそれ自身の持つ魅力があるやうに、又演劇には演劇そのものゝ持つ特長がある。この問題さへ解決されたら、例へ一時間以上の幕があらうとも觀客は欠伸をしない（然しこれはその……新劇の話である……少し苦しい……？）

十月の文樂

宮本　初汐

一、駒の逆井村から聽く、同君のはいつもながらに磨き研ぎあげられて、氣持がよい程完成されてゐるが、それだけに、ピリツト心を打たないのは、何故だらう。舞臺成績、觀客の受け共に滿點で、所謂素義連には一番參考にならうが細心翼々とした間口の狹い藝は――同君の體質、盲目の故に歸せらるにもせよ。――まだまだ餘地がありそうだ。

二、雷門の鍛君は蓋し適材適所面白く拜聽したが、もうあゝした場面は若い小生等にとつて餘程の忍耐なしには辛抱致し兼ねる。要するに馬鹿げてゐる。

三、土佐君の揚屋、これには土佐の健在を疑はしめる。

吉兵衛の三味に引き廻され追ひ立てられ、やつと語つてゐる小生の最も好きなのは『思ひ返せば十二の年……』からの述懷のサワリであるが、宮城野を遣ふ文五郎の腕程、土佐君の喉は冴えてこない其の爲節まわしのシツトリした色どりや、地合を主にした氣分が殺されて殺風景な感がしないでもない。これは文五郎紋十郎君の人形の濃麗さに對應してこない。が言葉即話術の方では相當によく宮城野の品位『しのぶ』の素朴さが表現されて居る。人形では紋十郎君の『しのぶ』が逆井材の時と全然性格を異にする樣に遣はれてゐる――あれでよいのかしら。文五君が優しい老顏に笑を湛へての豐麗な宮城野にば名人の腕に敬服するばかり、然も從前と反し、舞臺を獨占せずに、他の人にも充分腕を振へる餘地を與へてゐる點には再び頭がさがる。さなきだに手薄い手遣に凋落の秋の感深い今日切に文五郎君の健在を望む。

四、四條河原の大隅は無難、あの入れ撥の多くかけ聲の高く、自己誇示本能の旺溢してゐた道八が穩やかにおとなしく彈いてゐるのは、一寸意外である。

五、古靱は小生の聽いた中途でつばめ君に換つた矢張病氣の故だらう。つばめは若さと力とに溢ちた精力的な點を取る。人形では榮三の與三郎よりも文五郎の『おしゆん』の方が矢張光つてゐる。

小生は榮三君の客に媚びる態度を好まぬ。猿廻しの三味線には、いつもながらに陶然と醉はされるとりわけ猿を無心に踊らす點がよい。清六の健腕に祝福する。人形に比して又太夫に比して三味線は實に英材人材、林の如く雲の如しだ。それにつけても、太夫、手遣の貧弱さ、手薄さが悲しまれる。

六。津の近八は矢張隨一に位する惡辟の津が唯一の武器の『押し』の一手で押しに押し通す熱演には、唯れだつて感激する。津の盛綱は其の押しと熱の點で、雁の情味、羽の姿、吉の心理解剖と比肩し得やう。あの惡辟、あの貧弱な辟量にも拘はらず兎も角も紋下らしい近八を語つた事、此處に彼の偉大さがあり、同時に惱みが潜んでゐやう。

第一段、小三郎の手柄話が、この惡辟のため鮮かにゆかない、第二段、和田兵衛との詰問が餘り威高々になり過ぎる、理智の人として盛綱自身もつと寛大な態度がほしい。これも津君の辟量の結果かも知れない。第四段微妙が小四郎に切腹を頼む件にはもつと纏綿たる骨肉の情愛が浸み出てほしい‖人形の文五郎はこの點最も自然に且嫌や味なく演じてゐられる。‖

全體を通じて初は微妙、中は時政、終りは和田兵衛の各人を、反つてシテにして主人公盛綱をワキ役として靜かに置いて語つてゐた事は理智の將としての盛綱をよく

解釋したと肯ける。

人形、文五郎の微妙は何にも云はず百二十點進呈する。繰り返し云ふ、小四郎に切腹をたのむ微妙の演出は完璧で、祖母の情愛あふるゝばかり少しの嫌や味も感ぜしめず人の心を衝つ事極めて大である。

七、切りの阿波十、朝太夫のは語るのではなく唄ふのだ。他の人と同じカテゴリーに入れて論じてよいか悪いか甚だ迷ふ。巡禮歌の良い喉には感心する又受けてゐる樣だが、これで誤魔化すのは悪い了簡である猿系の神經質な三味は中位。貴鳳に就いては何も云ひたくないが、氣ざな身振りや、嫌に見臺をたたくのは五十美會でする事、文樂では謹んでほしい。

人形の紋十郎のお弓には將來の大成を豫想し得る。

光太郎のおつると共にこの母子會合の場には小生わからず感動した事を告白して筆をやむ。

朝顔日記所感

本陣良平

我童の深雪は實によい。何といふ立派な藝術であらう。何度見ても飽かぬ。見れば見る程その藝に執着を覺える。どうしてこれ丈けの藝術が出來るのかと疑はれる程によい。（むざんなるかな秋月の……の淨瑠璃になつて深雪が舞臺に現れると舞臺が急に引きしまり一段と重味が加はる。如何に落ちぶれた外被に包まれてゐても昔の深雪の面影品位が恰も硝子越しに見る樣にうかがはれることが出來る。それが琴唄になつてからは一層よい。

この傑作の中でも最も勝れてゐる所は戎屋前で昨夜の客が日頃尋ねる戀人宮城阿曾次郎であつたことを知り、德右衛門が『えゝ、折悪う雨も降出しこの暗に一人は危ない〳〵』と止めるもきかず『いえ〳〵いえ、假令死んでも厭ひはせぬ。イエ放して〳〵』と（突き退け刎ねのけ、杖を力に降る雨もいつかな厭はぬ女の念力、跡を慕ふて……』、床の間に鏡臺より花道にかゝるあたり、それから杖の折れたのを投げすてるあたり、何と立派な藝術ではなからうか。

私は今度の觀劇によつて我童の朝顔日記に對して一層の執着を覺ゆる樣になつた。

駒澤には右團次、岩城には壽三郎、がつき合つてゐるが私は之は適役でないと思ふ。壽三郎の岩城では悪が足らず、右團次の駒澤では情味が缺ける。むしろ駒澤を壽三郎、岩城を右團次がやつた方がよい樣な氣がする。昨年京都で見た時には嚴笑が駒澤をやり、當之助が岩城をやつてゐた。この方がずつと適役だつた。然し大正十三年のたしか六月頃東京演伎座でやつた市藏の次郎左衛門が最もよい樣な氣がする。

德右衛門を大吉がやつてゐる。無難ではあるこの役で私の知つてゐる範圍内では大正八年の七月、浪花座で小團次昨年京都南座で荒五郎、今度の大吉のを知つてゐる先年東京演伎座では誰がやつたか今日一寸思ひ出せない。この中で私は荒五郎のが最も上出だつた樣に思はれる。

然し今度の朝顔日記とても決して悪いものではなかつた。仲々立派なものだつた。私をして十分に滿足せしめた。

編輯部より

二十數篇の讀者倶樂部の投稿を讀んで、可なり教へられる處がありました。今月は、宮本初汐、本陣良平君の二篇を載せることにしました。尙、此外に、『林長三郎』駕六『浪花若手俳優へ』小澤伊助二君の原稿は大變面白いと思ひます。追つて掲載いたします。

編輯後記

朝郎生

×

御多忙中にもかゝはらず御懇切なる御回答を頂きましたことは、私共にとつては此上もない喜びで御座います。尙、今後ともに宜敷く御指導をおねがひいたします。

×

休演と定つてゐた『昭生座』が天滿八千代座へ出ることになりました。處へ、長い間休演中であつた英太郎、木下吉之助、大井新太郎、福井茂兵衛といふ顔ぶれの新一座が組織されて、十一月の名古屋新守座に旗上げ、十一月の浪花座は、伊井河合喜多村の三頭目が出演します。どうやら、新派復興の兆が見えて來たやうです。折から『新派三頭目に對する感想』といふ記事を載せることは大變有意義なことだと思はれます。

×

締切後になつて、川尻清潭氏の御原稿が屆きました。もう一日早ければと、大變殘念に思ひましたが、今更仕方がありません來月號に載せさせて頂きます。

×

それから、綿貫氏から『帝劇の夜』といふ原稿を頂きました。折角お賴みいたしたものですが、どうしても紙面の遣繰りがつきませんので、割愛させて頂きます。何卒惡しからずお赦し下さい。

×

『讀者倶樂部』の應募原稿が二十數篇集まりました。編輯者としての滿足は此上もありません。そこで來月號から『讀者文藝』を募集いたします。選者は斯道の一流の大家です。どし〳〵佳き作品を見せて頂きたいと思ひます。

×

『道頓堀』は餘りといふよりちつとも廣告をしないのですが、それでも毎月購讀申込者が四五十名以上あります。中には、地方へも發送してくれと仰言る方もあるのですが、今のところ手いつぱいで如何することも出來ません。其内に何んとか良い方法を考へるつもりで居ります。右御返事まで。

×

尙、郵券にて購讀を申込まれる方はお忘れなく、一割增のこと、

×

今月はどうやら一日に發行出來さうです。これからは期日通りには如何にしても出してゆきたいと思ひます。

寄贈雜誌

演劇藝術　番傘
舞臺評論　演劇改造
劇と評論　藝術市場
女性　苦樂
エレガント　日本及び日本人
歌舞伎　文學

昭和二年十一月一日發行
雜誌月刊『道頓堀』第二年第十四輯

□誌代は前金でお拂ひを願ひます。
□郵券代用は一割增にて御註文を願ひます。
□御相談の上廣告掲載の儒めに應じます。

定價　金參拾錢（郵稅壹錢五厘料）

昭和二年十一月廿八日印刷
昭和二年十一月一日發行
大阪市南區久左衛門町八番地
松竹合名社
編輯兼發行者　鳥江銕也
大阪市東成區鶴橋天王寺町五七八五
印刷者　松本米藏
大阪市東成區鶴橋天王寺町五七八五
印刷所　桃谷印刷株式會社
電話南〔三〇六二番〕〔三七二二番〕
大阪市南區久左衛門町八番地
發行所　松竹合名社內　道頓堀編輯部
電話南〔一二四〇番〕〔六六八五番〕

味
深く
新なり
寒霞渓

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和二年十月廿八日印刷
昭和二年十一月一日發行

若く明るい顔になる

レート白粉

東京 平尾賀平商店 大阪

金參拾錢（郵稅壹錢五厘）